

## 天保仇討無残旅

### (第一部)

厳冬の合間の良く晴れ渡った一日、ここ川田藩城下の武家屋敷町にも温かくうららかな陽が注いでいた。

武家の住まいらしく質実剛健を旨とする、厳めしい門構えの屋敷が建ち並ぶ中に笹川家の屋敷があった。

玉砂利で水の流れを表現しただけの枯山水の庭は、小振りな築山と大小の岩石を数個配置しただけの簡素な佇まいであったが、幾本か植えられた梅の木が、その苔生した庭石と見事に調和して、風雅な趣を醸し出していた。

家人の日々の生活を反映する様に、特に飾り立てられる物の無い質素な佇まいではあったが、良く手入れされた庭に植えられた梅の木は、梅初月の月名の通り暖かな春の日差しを待ちわびていたかのように可憐な白梅がチラホラと咲き出し、その白い花が簡素な庭の中に明るい彩りを添えていた。

その清楚な梅の花に引き寄せられる様に枝に止まった鶯が、のどかな鳴き声を上げていた。風雅な景色を楽しむよう開け放たれた庭に面した客間の奥にも暖かな日差しが明るく差し込んでいた。

客間では分家の叔父が一人の若武者をつれて来て、笹川家の若き当主の真之介の正面に腰を下ろしていた。

当主といっても昨年元服を済ませたばかりで、まだどこか子供らしさが残る女のように華奢で色白の美少年である。

真之介の姉の志乃は突然訪れて来た叔父達に茶をすすめていた。

叔父の兵衛門はお茶を点てる志乃の典雅な立ち居振る舞いを見惚れる様にじっと見詰めながら、少しの間にこの子も美しい娘に育ったものだとしみじみと思った。

幼くして両親を失い、まだ年端の行かない身で弟の事を支え、女手一つで笹川家を支えて来た気丈さは、端正な細面の容貌の底に凜とした美しさを醸し出していると思った。

今年数え年で二十歳となる志乃はまさに女としてもっとも輝かしい年代にいることを感じさせた。

その抜けるような白い肌や楚々とした女性らしい所作をじっと見詰めると、何か庭に植えら

れた清楚な気品を備えた白梅の花を連想するような気がした。

志乃には叔父の隣に正座する良く日に焼けた精悍な顔立ちの若侍が気になって、武家の娘として不躰な事だとは思いつつも、お茶を煎れながら若者の方をチラと盗み見てしまうのであった。

「話というのは他でも無い・・・」

兵衛門が、志乃にも座るように促し、志乃の煎れてくれた熱い茶を一口すすって、一つ咳払いすると、目の前に正座する年若い姉弟の方に交互に視線を向けた。

並んで正座する姉弟を見比べると、男にも劣らぬ様な芯の強さを秘めた引きしまった志乃の顔と元服を済ませ大人社会の仲間入りをしたとはいえ、<sup>ものふ</sup>武士として相手を威圧する様な要素を感じさせない真之介を見て、小さく息を吐いた。

少し下ぶくれの輪郭に薄く紅を引いた様な柔らかな頬やスッキリと通った高い鼻筋など、女の鬘を結わせ女の着物を着せれば姉妹と言っても誰も疑わないだろうと考えた。

あらためて咳払いをすると二人の様子を伺いながら神妙な表情となって静かに話し始めた。

「・・・そち達の父上のことじゃ・・・」

志乃と真之介の姉弟も何か叔父が重大な事を告げるため訪問したことを理解していたので、叔父の言葉を聞き漏らすまいと神経を集中して叔父の顔をジッと見つめた。

叔父はどこから話を切り出したら良いか思案しながら言葉を継ぐように静かに、しかし、ハッキリとした口調で口にした。

「そち達の父親は病気で亡くなったことになっておるが・・・実は違う・・・」

叔父の突然の言葉に姉弟はエッとするような顔をして叔父の目を見つめた。

「実は、つまらぬ争いが原因で尾幡権八郎と言う浪人に斬り殺されたのだ・・・」

叔父の口から意外な真実を知らされて、姉弟は思わず息を呑み、目を吊り上げて叔父の目を睨むように見詰めた。

「この尾幡という男は、神刀無捨流の使い手で、この川田藩に剣術指南の職を求めて他所から流れてきた素浪人じゃった・・・そち達の父親の人の良いことに付け入り、藩の剣術指南の役を得ようとしたのじゃ・・・そち達の父親も親身になって藩の重職を相手に色々働きかけたが、今の平和に慣れ親しんだ川田藩では血腥い尾幡の剣技は受け入れられず、結局仕官は、叶わなんだ・・・」

気の毒に思ったそち達の父は、翌日の朝には川田藩を出て他所に流れて行くと言う尾幡に、せめてもの<sup>はなむけ</sup>餞として内輪で送別の酒宴を開いてやったのじゃ・・所が、この尾幡という男は酒癖の悪い男での・・自分が剣術指南に成れなかった原因をそち達の父親の<sup>せい</sup>所為だと自分の武士としての未熟さを棚に上げ、逆恨みの態度を示し始めた。これには温厚なそち達の父も怒りを覚え、口論になった挙げ句、そち達の父親を斬り殺してしまったのだ！・・・当に恩を仇で返す、言語道断の所行じゃ！」

哀しい記憶を蘇らせたのか、叔父が苦しそうに目を閉じた。

「この尾幡という男、自ら剣術指南役を売り込みに来るくらいであって、劍の腕がめっぼう立つ・・ところが笹川家は何代も前に劍を筆や算盤に持ち替えての勘定侍。笹川家の親類縁者が束になって掛かっても敵う相手では無かった・・・死亡の原因が<sup>にんじょう</sup>刃傷だと藩に届け出れば、仇を討たねば家名は継げず、泣く泣く病死だと届け出たのじゃ・・」

叔父がいかにも無念そうに下を向いてわなわなと体を震わせた。

姉弟も悔しそうに唇を噛みしめ、怒りと無念さに身体を震わせて、血走った目で叔父を見つめた。

「そち達の母親も仇討ちも出来ず病死と届けねばならなかった無念さに、後を追うように自害してしまった・・言わば、この尾幡という男はそち達父母の仇・・」

怒りと悔しさに顔を赤らめ、目を吊り上げ、肩を怒らせ睨み付けるように自分の方に目を向ける姉弟の視線を意識しながら叔父が話を継いだ。

「しかし、人の口には戸は立てられぬもの・・病死と届けても刃傷との噂は直ぐに飛び交い、小幡と云う男が当代でも部類の剣術者であることも棚に上げ、『親の仇も討てぬ臆病者よ』と、陰口を叩かれ・・・志乃、そちも今年で二十歳になる。普通ならとつくの昔に、何処かの良家に興入れしていても不思議では無いのに、縁談の話も来ない・・・真之介や・・・お前も17歳となり元服も済んだ。しかし、これだけの家格の家なのにお主にも碌な役が回って来ない。これも全て、親の仇も討てぬ臆病侍の家と世間で陰口を言われているからだ・・」叔父が溜息を吐きながら言った。

「しかし、良馬も老いれば駄馬にも劣ると言う。・・・あの劍の腕を誇った、尾幡権八郎も今では年老いて、かつての劍の冴えは無いと言う。今ならそち達でも親の仇討ちが出来るかも知れない・・・天晴れ仇討ちを果たした折には、志乃には良縁が降るように舞い込み、真

之介には、藩の重職の役が回って来るだろう。」

姉弟の目に見る見る力が漲って来るのを意識しながら、叔父が話を続けた。

「そこでじゃ、そち達にこの柏木篤馬君を紹介したい。柏木君は諸国を遍歴して自らの剣技を極めんとする武者修行中の身の上だが、姉弟の話聞き、同情して仇討ちの助太刀を申し出てくれたのだ。」

と、傍らに正座する良く陽に焼けた若侍の方を向き紹介した。

「柏木篤馬と申します。お二人のお話は、兵衛門殿よりお聞きしました。」

柏木と呼ばれた男は、軽く頭を下げて姉弟に会釈した。

「お二人の仇の尾幡権八郎は、今は赤坂玄齋と名乗り、秋芳藩で剣術の道場を開いております。私も諸国遍歴の途中で秋芳藩に立ち寄り、赤坂無捨流の道場に逗留し、何度か門弟達や師範と剣技を交えた事がありますが、無捨流の剣技は肉を切らせて骨を断つ実戦剣技。その太刀筋は中々鋭いものがありました・・・まさか、その道場主が仇持ちとは知りませんでした・・・」

と、過去の記憶をたぐり寄せるかのように思い出しながら喋った。

「もし、お二人が仇討ちの旅に出られるので有れば、私も微力ながら、これまでの武者修行の経験を活かし、真之介殿の剣技を磨かれるのをお助けし、お二人を仇の元にご案内すると共に、及ばずながら仇討ちにおいても介添えしたく考えております。」

と言うと、姉弟に向かって頭を下げたので、姉弟も慌てて「こちらこそ宜しくお願いします。」と柏木篤馬にお辞儀した。

翌日から柏木による剣の特訓が始まった。

梅の花が咲きほころぶ笹川家の庭で木刀を構えた真之介と柏木が相対峙していた。

柏木が真之介に死ぬ気になって打ち込んで来るように命じた。

真之介が気合いもろとも打ち込んで来るのを、見事な太刀さばきでかわして逆に真之介の胴に一太刀を浴びせた。

「これが木刀でなく、真剣だったらお主の命は無かったぞ！」

腹に激しい苦痛を与えられ、<sup>うすくま</sup>蹲る真之介を柏木が厳しい言葉で叱り、再度打ち込んで来るように命じた。

真之介も打ち据えられた痛みを堪えて、憎い仇を討ち取る剣技を身に着けなければと、再

度木刀を振り上げると挑んで行った。

気力を振り絞って挑み掛かる真之介に柏木が遠慮会釈無く打ち据え続けた。

剣技の稽古では、手加減することなく真之介のことを厳しく指導するが、休憩でお茶を出した時に、はにかんだ様に陽に焼けた浅黒い顔から白い歯を溢して微笑むこの精悍な若侍に、志乃は、何か胸がキュンと締め付けられるような物を感じ始めていた。

そして、それは武家の娘として、はしたない事だと自分を<sup>たしな</sup>窘めるのだった。

少しの休憩を挟んで、再び激しい稽古が再開した。

気合いを上げて柏木に斬りつけるが、逆に激しく打ち返され、地面に這う真之介に、

「そんな事では、玄齋に返り討ちに遭うぞ！」と激しく叱咤する柏木であった。

激しい打ち込み稽古で真之介が疲労困憊して動けなくなったのを見て取った柏木が、志乃に短刀を構えさせて、自分に突いて掛かるよう命じた。

「さあ、私を憎い親の仇だと思って、突いて来なさい！」

「はい！」

と、一言言うと、教えられた通り脇差しを胸の高さに両手で抱えて、甲高い気合いを残して、柏木に突進した。

短刀が柏木の体を捉えるより早く、志乃の身体を素手で払い退けた。

柏木に投げられて地面に転んだ時、着物の裾がはだけて、白い脹ら脛が露わとなった。

若い男の前で体の一部を露出してしまった羞恥に思わず志乃の顔が赤くなったが、柏木は何も気にする様子も無く、「さあ、早く掛かってきなさい！」と、志乃に立ち上がって再び掛かって来るように命じたのであった。

そんな柏木の真摯な様子に、一時的とはいえ羞恥に捕らわれた自分の心を恥じて、憎い仇に一太刀浴びせるための剣技を一刻も早く身に付けなければならないと、自分を奮い立たせると短刀を手に挑み掛かるのであった。

再び立ち上がり、相手の胸に斬りかかっても、またもや裾を乱して地面に転ばされる志乃であった。

柏木は例え相手が女であっても手加減せず、志乃を厳しく指導した。

仇討ちと言う、生死を掛けた闘いに挑むための剣術修行には、例え、<sup>おなご</sup>女子といえど手加減しないという厳しさの中に、逆に柏木の優しさを志乃は見取った。

いざ！と応えると、再び志乃はこの精悍な若者に挑んで行くのであった。

ただ、脇差しを構えて、切り込むのではなく、素手でこの男の胸に飛び込んで行けたらどん

なに幸せで有ろうと思いながら・・

その夜、床に就いた志乃は悪夢にうなされていた。

それは、志乃が幼い時から度々襲われる恐ろしい夢であった。

ああ・・又あの夢が始まった・・、半ば覚醒した意識の中で、まるで金縛りに遭った様に身体は布団の中で膠着し、声を上げようにも声も上げられず、覚めることのない悪夢と対峙するしか無かったのであった。

小さい時から気分が滅入っている時や、疲労困憊した時等に、度々見る夢であった。

今日は柏木様に激しく稽古をつけられ、身体が疲れ切っているからかしら？と半ば覚醒した意識と半ば夢のまどろみの混沌とする意識の中でボンヤリと思うのであった。

一薄暗い闇の中で女が妖しく白い身体を蠢かせて、苦しげな呻き声を上げている・・

その呻き声は苦痛や怨嗟の混じった呪いの声の様に低く小さな呻き声であった。

その何時までも続く苦しげな呻き声が耳について、志乃に逃れようの無い恐怖を与え続けるのであった。

女の顔は見えないが、艶めいた白い肌が、薄明かりを背後から受けて、ほのかに青白く淡く輝き、成熟した女性らしい柔らかな輪郭を描き、苦しそうにくねくねと身悶えていたのであった。

どうやらそのうら若い女は闇の中で全裸で蠢いている様であった。

もう何時間も苦しげに身悶え続けているのか、女の肌にジツトリと浮かんだ汗が背後から差し込む青白い月明かりに照らされて真珠の様に艶々と輝いていた。

成熟した女が全裸で呻き声をあげて苦悶する姿に、言葉に出来ない恐怖を感じて、布団の中で金縛り状態の志乃は身じろぎも出来ず、悪夢にうなされてビッシヨリと全身に汗を浮かべるのであった。

何時もなら全裸で闇の中で呻き声を上げ身悶える幽鬼の様な女性の姿に恐怖して、跳び起きる様に目覚める所であったが、何故か今夜は中々覚醒しなかった。

心の奥底から込み上げるジリジリとする様な恐怖感に苛まれながら、

・・ああ・・早く夢から覚めて！と、志乃はボンヤリした意識の中で祈る様に叫んだ。

怨嗟にも似た女の呻き声は益々激しくなり、その身悶えも大きなものとなっていた。

・・縛られているの？・・

逃れられない悪夢に何故か食い入る様に見詰める内に、その暗闇の中で幽鬼の様に佇む若い女が素肌の上から太い縄で縛り上げられているらしいことが判ってきた。

女らしい柔らかな肌に牙を立てるように浅黒い縄が荒々しく食い込んでいた。

全身を雁字搦めに縛られているため、逃げることも出来ず、身体を蠢かせているらしい事が、ボンヤリとした灯りの中から判って来た。

荒くれた縄が容赦無く胸元に食い込み、良く張った柔らかな乳房が上下を通る縄により根元からくびり上げられた姿が薄暗がりの中にボンヤリと浮かび上がっていた。

その凄惨な若い女の姿が言いようの無い新たな恐怖心を呼び起こし、早く夢から覚めたい、この金縛りから逃れたいと藻掻くのと同時に、何故か全裸のまま身動きも出来ず厳しく縛り上げられた女から漂う哀切感に被虐美とでも云う様な不可思議な感情が込み上げて来て魅入ってしまうのであった。

何故苦しそうな呻き声を上げて身悶えているの？・・・何故縛られているの？・・・何故裸の姿を晒しているの？・・・何かの罰で折檻されているの？・・・

暗闇の中で緊縛された身体を身悶えさせ、低い呻き声を上げ続ける幽鬼の様に青白く霞む女の姿に、志乃は恐怖を覚えて身体をガタガタと震えさながら問い掛けた。

・・・誰か居るの？・・・

暗闇の中に目を凝らす様に見詰める内に、女の傍にもう一人の人間が居る気配を感じた。

暗闇に隠されて、ぼんやりとしか見ることは出来ないが、それはどうやら大きな男の影であった。

浅黒いその男の身体は闇と同化して最初は良く判らなかったが、何も身に付けていない事が見て取れた。

相変わらず女の顔も男の顔も闇に紛れて見る事は出来なかったが、その闇から妖しく浮かび上がった男は巨体を縛り上げられた若い女の傍にピッタリと寄せ、身体を妖しく蠢かせていた。

まあ！何という淫靡なことを！・・・縛り上げられた全裸の若い女の傍に寄り添う様に裸体を晒す男の妖しい姿に、ドキリと心臓が止まる様な衝撃を憶えた。

その男は、絵巻物に出て来る鬼の様に骨張った筋肉質の巨大な身体をしていた。

そして、剛毛に覆われた鬼の様な腕を伸ばして、青白く輝く女の身体をまさぐり始めた。

悪鬼の様な男の手が柔らかな女に肌に触れる度に、縛り上げられた女の身体がビクッビクッ

と痙攣した。

布団の中で金縛り状態で身動き出来ない志乃も夢の中の女と同調するようにビクッビクッと身体を振るわせた。

その時間は長い時間では無かったかも知れないが、夢にうなされる志乃には、永遠に続く時間の様に感じられた。

布団の中に横たわる志乃の心臓はドクドクと脈打ち、身体もジットリと汗ばんでいた。

たっぷりと時間を掛けて女の柔肌を弄んだ男は、次に上下から縄で括り上げられ前に飛び出した乳房を鷲掴みにして、淫靡に揉み上げ始めた。

男の指の動きに呼応する様に女の身悶えが激しくなり、押し殺した様な呻き声も速くなった。

男に揉み上げられる両の乳房の先で乳首が硬く凝こって行く様子が判った。

夢でうなされる志乃の鼓動も段々激しくなり息が早くなっていた。

長い時間女の乳房を執拗に愛撫した後、片手を女の股間にソロソロと伸ばしていった。

そして、正座の姿勢でピッタリと閉ざした股間を押し分ける様に手を秘部に差し入れた。

男の手が秘所に達したのか、女の身体がビクッと大きく痙攣した！

鬼人の様な男は女の反応に満足した様に固く閉ざされた太股の間に骨張った掌を差し入れモソモソと蠢かせた。

男の掌が股間で淫靡に動く度に、女は麻縄で雁字搦めに固縛された身体をビクビクと仰け反られせ、堪え切れないように小さく悲鳴を漏らせた。

女体に加えられる陰惨な責め苦の前にグッタリと力を失った女を抱え上げたまま、女の両脚に自分の脚を絡めると、まるで間近に横たわる志乃に見せ付ける様に女の股間を扇の様に広げさせた。

両脚を大きく広げられていきながら、女は羞恥に堪えられない様に激しく身悶え続けたが、男の力の前には余りにも無力であった。

今や志乃の眼前には、責め続けられるその女の股間が隠す物無く開示され、その部分の生々しい佇まいが在り在りと見て取れた。

視線を外す力も失われ、それを直視した志乃の心臓はドクンと音を立てそのまま停止してしまうのでは無いかと衝撃を受けた。

臍下で固縛された麻縄から真っ直ぐ下に延びた数本の荒くれた太い縄が振り合わされ、まるで男の下穿きの様に女の秘部を潜っていた、

成熟した濃密な春草の下に潜り込んだ縄が軟らかな肉を置いた陰裂の中に食い込んでいる鮮

烈な様がマザマザと見て取れた。

そして女陰の上には振った縄を結んだ結び玉が作られ半ば陰孔の中に埋没していた。

男は縦縄を握り締めて上下に揺すったり、結び玉の上から掌を添えて秘め処を責め上げていたのだった。

男が縄で作った瘤で女陰を責め立てる間、金縛り状態で身動きの出来ない志乃の呼吸も荒くなっていった。

夢の中にも関わらず、其処の様子はまるで眼前に繰り広げられている現実の事態を直視するように鮮明に浮かび上がるのだった。

抵抗を封じられた成熟した女が悪鬼の様な男に躰られる・・・陰惨な場面であった。しかし、被虐美とでも謂うような切れ切れの哀切な声を発する女の醸し出す妖艶な雰囲気魅せられた様に、身動きの出来ない志乃は何故か取り憑かれた様に男と女の淫靡な行為を見続けるので在った。

陰惨な鬼による人間の女への呵責無い責めは何時までも続くように感じられた。

やがて男は秘裂を責め上げていた縦縄を弛め横に退かせた。

艶めかしく赤く充血した女の陰孔は半ば開孔したままで、大きな瘤により封印されていたその内部よりドロリとした液が滴り落ちた。

今や獣の様な男の股間からは猛り狂った肉塊が天を向いているのが判った。

女の身体を軽々と抱え上げた男は、荒くれた縄を退かしたばかりの秘孔に自らの物をあてがった。

そしてゆるゆると女の身体を下に降ろしていった。

悪鬼に貫かれ女の口から全てに絶望したような哀しげな呻き声が上がった。

その瞬間、悲鳴を上げる様に身体を痙攣させて志乃が跳び起きた。

薄明かりの中で布団から上体を起こしてハアハアと荒い息を吐き続けた。

強い衝撃で身体は熱く火照り、心臓がドクドクと痛い程激しく鼓動していた。

恐怖の余韻で全身にビッシヨリと汗を浮かべている事が判り、枕元の手ぬぐいで身体を拭いた。

覚醒が進み落ち着きを取り戻すと共に、ふと自分の股間が汗とは違う、夥しい液体で濡れている事に気付いた。

「まあ！何とはしたくない事を・・・」

男との交接も知らず、自らの手で自分の秘め処を慰めた経験もない志乃にとって絶頂を感じるという概念は未知のものであったが、今自分の秘奥を濡らすそれが何か非常に背徳的なものである事は本能で感じていた。

暗闇の中で幽鬼の様な男に責め上げられ、苦悶の呻きを上げながら身悶える若い女の姿に、恐怖に打ち震えながらも、無意識の内に女の芯を濡らしていた自分に気が付き、武家の女としてあるまじき事だと、心から恥じ入る志乃であった。

そして、昼間柏木の胸に飛び込んで行きたいと、ふしだらな考えを一瞬でも持った自分の心がこんな淫らな夢を見させたのだと、自分を戒めるのであった。

一月余りの激しい剣の稽古の結果、真之介も志乃も一応剣技が様に成るようになっていた。満開の桜の木が美しい花びらを散らす温かい春の日差しの中、叔父夫婦に見送られて、いよいよ仇討ちの旅に出発する三人の姿があった。

見事仇討ちを果たし、故郷に帰れるのは何時の日になるであろう・・・と感慨に耽り、何度も振り向いて花吹雪の中に見え隠れする叔父達の姿を瞼に留めた。

国境まで見送ってくれた叔父達の姿も、次第に小さくなり、降りしきる桜の花びらに隠れて見えなくなっていった。

長い旅になるかも知れない、しかし、見事仇討ちを果たした時が、この若侍と別れる時になるのであろうか・・・と心の片隅で思う志乃であった。

川田藩から秋芳藩までは長い旅であったが、志乃はこの精悍な若武者と共に旅を出来ることに一人幸せを感じていた。仇討ちを成し遂げたら分かれなければならないと思うと何時までも一緒に旅を続けていければと柏木の背を見詰めながら思った。

そんな志乃の心も全く気付かない様に柏木は歩を進め、若い真之介に声を掛ける事はあっても、志乃の方を振り向くことは無かった。

自分には女としての魅力が無く柏木様は自分に興味が無いのだろうかーと、淋しい気持ちになるのであった。

長い道中で途中幾つもの宿場に泊まり、いよいよ今日は宿敵の待ち受ける秋芳藩領に入ることになった。

「秋芳の街では、旅籠には泊りません。実は前もって秋芳藩の台所を一手に引き受ける恵比寿屋と云う豪商に連絡しておいたのです。」

と、柏木が道を進みながら二人に話し掛けた。

「この恵比寿屋の主人は篤志家で、私も諸国遍歴の武者修行で秋芳を訪れた時に、世話になった事が在ります。先日お二人の事情を手紙にしたため飛脚を使って伝えておいたところ、お二人の仇討ちに役立つなら是非手を貸したいと、今朝宿場に返事が届いておりました。」これを聞いて、何もかも手筈を整えてくれた柏木への感謝の気持ちで、志乃は胸が一杯になるのであった。

三人は昼過ぎには秋芳の城下町へ足を踏み入れた。

自分の属する川田藩は長く続いた太平の世に馴れ切ってしまい、武士と言えどもすっかり脆弱になってしまっていたが、この秋芳藩は常在戦場を合い言葉に、戦国の気風を今も残していた。

藩祖が戦国時代に徳川家から大恩を受けた事に恩義を感じ、一朝有事の際は真っ先に馳せ参じて、幕府のために死力を尽くすことを代々の遺訓としており、常に武士としての矜持を維持していたのだった。

道行く侍の姿にも何処か武張った姿があり、高く石垣を積み上げた豪壮な天守閣を頂く城も合戦のための城塞としての厳めしさを感じられた。

その一方、城下には武家屋敷や商家が軒を連ね、大いに賑わっている様子であった。

柏木の案内で城下町を歩き回り、柏木が手筈しておいてくれたという恵比寿屋の店先に到着した。

ここに来るまでの間に多くの商家を見て来たが、恵比寿屋の店構えはその中でも一際大きく、多くの使用人を抱えて、商売も隆盛であることが見て取れた。

柏木が店先に居た手代を掴まえて、来意を取り次がせた。

店の奥に手代が姿を消すと、まもなく奥からこの家の主人とおぼしき男が現れた。

男は四十後半くらいに見える良く肥えた大柄の男であり、腰が低く、店の名前の通りニコニコと恵比寿顔をして、手もみしながら、一行の前に歩み寄って来た。

「これは、これは柏木様、お久しゅう御座います。暫く見ない間に一段と立派なお侍になられはって・・・」と、ぺこぺこ頭を下げ、相好を崩ずして、手もみしながら、柏木にお世辞の言葉を並べ立てた。

手もみする両手が袖から溢れ、太い手首から肉付きの良い二の腕にかけて、濃い体毛に覆われているのが見えた。

肥満した巨体や、脂ぎった大きな顔や、濃い体毛から、商人らしく腰は低い、大変精力的な男であることを姉弟は見て取った。

恐らく、この人一倍強い精力が事業を発展させて来た源なのだろうと感じた。

「こちらのお二人が、書状でお知らせした笹川姉弟です。」

柏木が恵比寿屋の主人に紹介した。

紹介を受けて、志乃と真之介が主人に挨拶した。

二人の挨拶を受けて、

「恵比寿屋の主人の惣右衛門と申します。お二人のことは柏木様から聞いております。見事仇討ち御本懐を遂げられますよう、この恵比寿屋、微力ながらもお力になりたいと存じます。」

と、二人に挨拶を返すと、

「店先でも何ですから、奥の方へ・・・」と、一行を店の奥に招き入れた。

一行が通されたのは、店を取り抜けた中庭に在る離れ屋敷であった。

開け放たれた座敷からは、広大で豪壮な庭園が美しく眺められた。

雲一つ無い快晴の陽の光に照らされ、まるで庭全体に金粉を振り捲いたようにキラキラと光り輝いているような印象を受けた。

笹川家の閑静な狭い庭とは全てが対照的であった。

姉弟には、この良く手入れされた、まるで平安貴族の屋敷のような広い庭からも恵比寿屋の財力をうかがい知れる気がした。

庭には何本もの大きな樹木が植えられ、船を浮かべて遊べそうな大きな池が庭の中心を占めていた。池の中に設えられた小島には一本の見事な松が優美な枝振りを示し、中の島を挟んで対岸には、三つの大きな土蔵が並んで見えた。

そして、そこから少し離れた場所に、松の枝越しに艶々とした海鼠壁と漆喰の白さも鮮やかな塗り壁の最近普請したばかりと思われる、真新しい蔵が一つ建てられていた。

このことから恵比寿屋の発展は、現在も途切れる事無く続いているものと感じられた。

「私も赤坂様の事は良く存じ上げておりますが、まさか仇持ちとは知りませなんだ。人は見かけによらんとゆうことすなあ。・・・それに噂では、赤坂様の道場の評判は余りよろし

ゆうおへん。・・門弟は凄腕揃いやと聞いておりますが、武士としての心構えを示す武士道教育などまるで行わず実力一本やりで、剣の腕におごった乱暴者が多く、城下でも度々乱暴狼藉を働いておると言うことです。・・殿様はご存じないと思いますが、赤坂道場はゴロツキ者の集まりやて、町の人には毛嫌いしているとの事です。見事赤坂様を討ち取られ、道場も無くなったら秋芳の町の人でも感謝するんやないでしゃるか？」

ここまで話をして、思わず喋りすぎたと言う様に口元を押さえると、

「まあ、見事仇討ちを遂げられますまで、自分の家や思うて遠慮の一使っておくれやす。長旅でお疲れですやろ、風呂も沸かしてありますさかい、先ず、お風呂でも使ったらどないですか？」

惣右衛門が改めて二人をニコニコと見つめながらに言った。

主人の厚意に感謝の言葉を述べながらも、姉弟は惣右衛門の言葉に、この土地の言葉では無い上方の方の訛りが時々混じる事を感じた。

恐らくこの土地に生まれた者では無く、関西の方から流れて来た者ではないかと感じた。

その時、襖をスーッと開けて、女中が盆にお茶を載せて持って来た。

見ると十五六歳位の幼さが残る色白の可愛い顔をした娘であった。

「こちらが、川田藩より遠路お越し頂いた笹川様や、千鶴、ご挨拶しなさい。」

と、お茶を運んで来た年若い女中に惣右衛門が二人を紹介した。

惣右衛門の言葉を聞いた時、千鶴と呼ばれた女中が、ふと何かを思い出そうとするかのよう  
に動きを止めた。

「これ、何をボンヤリしているんや！ほんまに鈍な娘やな。早よ、お茶をお出しせんかい。」

と、主人に窘められて、まだ子供の様なあどけなさが残る若い女中が、慌てた様に一行にお茶を差し出した。

恵比寿屋に旅装を解くと、姉弟は柏木に案内されて、秋芳の城下町に偵察に出かけた。

「ここが、玄齋の道場です」

柏木が通りを隔てて、大きな建物を示した。

通りに面した黒い板塀の壁面に開けられた、格子窓越しに、多くの門弟の竹刀や木刀が打ち  
合わされ剣技に励む鋭い気合いが三人の耳に入った。

「この秋芳藩は、戦国の気風を今に伝える藩風があります。城主も形や心の剣法より実際の

戦場で役に立つ剣術家を召し抱えたいと希望しておりました。あなた達の仇である尾幡源八郎は、形よりも実戦を重んじる剣術家。この城下に流れて来て、城主の御前で剣術試合において、形骸化していた当時の藩の剣術指南を破り、代わりに藩の指南役に納まり今日の発展を見たのです。」と、柏木が二人に教えた。

この剣術道場の規模と隆盛を見て、これは容易ならざる相手だと感じた二人が、格子窓の中をのぞき見ようとした時、柏木が慌てて二人を物陰に押し込んだ。

シッと口の前で人差し指を立てて、二人に静かにするように指示すると、こちらの方に向かってくる一団を指さした。

柏木の指さす方を見ると、頭を綺麗に剃り上げた良く陽に焼けた大男を輪の中心にして、五人ほどの武張った顔をした侍の一団がこちらの方に向かって歩いて来るのが判った。

輪の中心に居る男は、身長六尺（180センチ）以上在りそうな巨漢で、周りを取り囲む様に歩く侍達よりも頭抜けて大きかった。

「あの輪の中心に居るのが、そこもと達の父の仇、尾幡源八郎—今の道場の主の赤坂玄齋です。」と、柏木が物陰に隠れながら小声で二人に教えた。

尾幡源八郎は、話では五十にもなろうという歳であり、二人は、もっとやつれた男を想像していたが、良く陽に焼けた張りのある肌と、筋肉質のガッシリした巨体は、年齢による衰えを全く感じさせず、化け物の絵に出てくる大入道のように、艶々とした禿頭をした厳つい顔に濃い口髭を蓄え、未だに男としての強い精力を保っているように感じさせていた。

「おのれ！父の仇！」と、真之介が勇んで刀柄に手を掛け今にも飛び出さんとするのを柏木が押さえ付けた。

「さて、逸<sup>はや</sup>まるな！今はまずい！敵は赤坂と師範級の腕を持った五名の手練れがいる。今の我々では多勢に無勢だ。逆に返り討ちにあう。時期を待つのだ！」

と、逸る真之介を宥め諭すのだった。

そうこうしている間に、赤坂玄齋の一行は、物陰に潜む3人には気付かず道場の中へと消えていった。

「どんな敵でも必ず隙を見せるものだ！今は先ず、赤坂玄齋の行動を調べ、隙を探すのが先決だ！時間は有る。焦ってはいけない。」

恵比寿屋への道に戻りながら、先ず本日は赤坂の顔を確認出来ただけでも収穫だった—と、姉弟を諭す柏木であった。

恵比寿屋に戻ると、主人の惣右衛門も加わって、離れの一室に四人が集まって今後の方針を話し合った。

その席で、惣右衛門が、

「お三人は他所者ですさかい、あまり城下を歩き回ると人目に付きます。そうすると仇の赤坂玄齋にも知られて、相手に返り打ちの準備をされる恐れがおます。内の手代なら城下を歩き回っても、商いや思て、誰も気に止めません。どうでっしゃろ？赤坂の見張りは内の店の者にお任せ頂けませんやろか？」

と口を開いた。

其処まで惣右衛門の好意に甘えるのは心苦しく思う姉弟であったが、柏木が惣右衛門殿の仰ることは尤もな事で御座る、此処は惣右衛門殿のご厚意に甘えるべきだと、主張したので、すべては惣右衛門の申し出に従うことにした。

その様に決まると、惣右衛門は早速店に戻り、テキパキと手代に命令した。

早速、恵比寿屋の手代により密かに赤坂の尾行が始められ、その行動をつぶさに調べていった。

赤坂の身辺を見張る手代からの情報は、逐一惣右衛門に報告され、惣右衛門から三人に伝えられた。

その間にも、恵比寿屋の内庭を借りて、柏木により真之介と志乃の剣術の稽古が続けられた。真之介も志乃も赤坂玄齋の発する唯ならぬ威容を目にして、三人で戦ったとしても容易に倒せる相手では無い事を感じており、剣術の修行にも一層真剣に取り組むのであった。

赤坂の行動を密かに偵察すること20日余りを過ぎて、赤坂の挙動がおおよそ見えて来た。赤坂は各旬（上旬、中旬、下旬の月間の三分割）の内3日ほどは、登城して藩主の剣術指南をし、残りは道場で剣術指導をしていることが判った。この登城の際や何かで道場の外へ出歩く時は、必ず何人かの屈強な門弟が取り巻きとして同行するため、襲撃は困難そうであった。

ただ、調査している内に、赤坂が街外れに妾を囲っており、旬に3、4日はこの妾の所に通っているらしい事が判って来た。

そして、この妾宅に行く時は、さすがに門弟も遠慮して、一人で行き、一晚妾宅で過ごした後、早朝一人で戻ることが判った。そしてこの帰る時には、妾宅でしこたま酒を飲み、酔って覚束ない足取りで朝帰りすることも判った。

見張りをする間も赤坂に特別の動きは見られず、自分がつけ狙われている事に気付いている素振りはないとの事であった。

三人が仇討ちを果たすには、この妾宅からの朝帰りの時に途中で待ち伏せするのが最良であり、大酒を煽って剣の切っ先も定まらない赤坂を討ち果たすことは容易と思われた。

そして決行は、次回玄齋が妾宅に出かける時と決まった。

ある日の夕暮れ、玄齋を見張らせていた恵比寿屋の使用人から、玄齋が一人で出かけたとの知らせが入った。

3人は支度して出かけ、先回りして街外れに向かう街道の家の物陰から様子を覗いた。

茜色に染まっていた空が次第に暮色に沈む頃、薄暗くなってきた道を提灯をかざして、気持ち良さそうに謡曲を吟じながら一人こちらに向かって来る玄齋の姿があった。

これから妾と一夜を過ごす嬉しさに心が緩んでいるようで、見張られている事などまるで気付かない風に朗々と謡い上げていた。

これを見て、血気に逸った真之介が刀に手を掛けて、飛び出そうとした。

「待て、未だ早い！暗い場所での決闘は実力の差が出やすく、こちらの方が不利だ。良く見えない中で刀を振り合えば同士討ちの危険性もある！」

と、今にも打ち掛かろうとする真之介を柏木が押さえつけた。

「どうせ、明日の朝になれば、玄齋は一人でこの道を通る。その時には、酒に酔って普段の実力を出せないし、我々は朝日を背負って有利な位置に立てる。」

と諭すのであった。

玄齋が通り過ぎ姿が見えなくなったのを見計らって、

「今は、一旦恵比寿屋に帰って、準備を整え、明日早朝この場所で待ち伏せしよう」と、姉弟に告げるのだった。

明朝の為に少しでも眠っておかなければいけないと、心では思っても、いよいよ仇討ち本懐を果たすと思うと気は逸り、布団に横たわっても寝付けない志乃であった。

如何に自分達が有利な状況で、玄齋を待ち伏せるといっても、相手は名だたる剣の達人である。

無念にも自分の方が返り討ちに遭って、命を失うことが在るかも知れない。

死装束となるかも知れない真新しい白い着物を用意して枕元に畳んで置いてある。

もし、自分の死骸を人に見られても恥ずかしく無いようにと、床に就く前に良く湯浴みして、体の隅々まで清浄に洗い流し、死して恥を晒す事も無いだろうと思った。今は全ての準備を遣り尽くして、後は時を待つだけだと、寢床に就きながら瞼を閉じて思うのであった。

「志乃殿・・・起きておいでか？」

突然、障子の向こうから、柏木が囁くような声で問いかけて来た。

柏木は離れた部屋で休息を取っているはずであるのに、思いも掛けず、薄い障子を挟んで自分の寝所の前の廊下に柏木が居る事が分かり、どぎまぎして、「はいはい、・・・起きております。」と、慌てて応えた。

柏木の声に、慌てて志乃が布団から抜け出し、行灯に火を点すとともに、傍に畳んであった小袖の着物を羽織り、乱れた黒髪を掻き上げ、居住まいを正した。

時間は、まだようやく子の刻（深夜12時）を迎えようとする頃で、打ち合わせの仇討ちに出発する時間には充分間があるはずであった。

「御免、・・・」と、一言言うと、志乃の許しも得ずに、障子を開けて志乃の寝所としている部屋にズカズカと入り込んで来た。

その普段と違う柏木の不躰な態度に志乃が、驚いた表情を浮かべた。

その様子は、日頃見せていた禁欲的なまでに剣技の道に精進する、精悍な若侍の姿とは、全く別のものであった。

しかし、柏木と知り合ってから以来、心の中で密かに好感を抱いている男の侵入であったので、声を上げて抗議する事も無く、逆に寝起きの自分の恥ずかしい姿をこの好意を寄せる若者に見付けられるのでは無いかと不安になり、無意識に髪を掻き上げて襟を正すのであった。

百姓や町人身分の男達は、夜這いと称して、深夜に恋する女の所を訪れる風習があるという話は聞いたことがあるが、『男女七歳にして席を同じゅうせず』という厳格な儒教の教育を受けた武士には夜這いの習慣は無かった。

もしかして、柏木様は幼少の頃から剣の修行だけで、儒教の道德教育を受けて来なかったのかと柏木の視線を避けて目を下にやりながら訝った。

しかし、志乃は密かに自分の思いを寄せる若者の思いがけない登場に、胸が痛い程、早く強く鼓動するのを感じていた。

柏木と知り合ってから以来、一日のほとんどの時間、身近に接しているのに、柏木の志乃への態度は淡泊なものであり続けた。

そのことが自分には、女としての魅力が無いのか、結婚年齢の早い武士の女としては、二十歳過ぎの自分は、既に男の興味を引くことも無い老いた女となってしまったのかと、内心淋しい思いをしていたので、この深夜の無礼な来訪を心の片隅では嬉しく思っている自分が居ることに気付いて驚き、心が乱されるのであった。

しかし、武家の女のたしなみとして、深夜の男の来訪を喜ぶような態度は不躰なことで、目を伏せ畳の目を数えるように、この若者と対峙するのであった。

「明日になれば、志乃殿は憎っくき仇の赤坂玄齋を打たれます・・・」

深夜に狭い部屋の中で若い男女が佇む緊張感を破るように柏木が口を開いた。

志乃は、柏木の言葉に伏し目がちになりながら、

「はい・・・」と怖ず怖ずと応えた。

「拙者は、ご姉弟が見事仇討ち本懐を遂げられるよう、ご姉弟の剣技を鍛え、この旅に同行して玄齋の居所を教えるなど、微力なれど、努力を尽くしたと思います・・・」

そう、言いながら柏木は志乃の傍にぐっと躍り寄った。

「はい、そのことは、私たち姉弟、心底より感謝しております。」

僅かな距離まで柏木に迫られ、内心の動揺を隠し切れないようにおろおろしながらも志乃は正座のまま、身動きして距離を取ろうとした。

間近に身を寄せられ、柏木の息が掛かる程になって、志乃は柏木の息の中に酒臭いものが混じっていることに気が付いた。

正面から志乃を見詰める柏木の目にも酒に濁って、トロンとした好奇心な眼差しであることに気が付いた。

「柏木様、貴方は御酒を召されておりますね？」

仇討ちを前にして飲酒するなど不謹慎では無いかと、非難するような口調で尋ねた。

「左様・・・」

柏木は悪びれる様子もなく、歯並びの良い白い歯を見せて、ニコリと笑みを浮かべて応えた。

「酒も過ぎれば、剣の動きに影響を及ぼしますが、少量なら生死を分けた立ち会いの恐怖心を忘れさせ、逆に勇気を与えるもの・・・」

と、真面目な顔で志乃の詰問に応えたものであるから、酒という物の性質を知らない志乃は、

そうかも知れないと内心思うのであった。

「それ故、志乃殿も一献召されませ。」

柏木が背中に隠すように持っていた、酒瓶と杯を志乃の前に差し出した。

「私は、女の身で、これまで御酒など飲んだことは御座いません・・・」

志乃が目の前に並べられた杯を目にして、拒否するように言った。

「まあ、良いでは無いか。先ほどの申したように、少しの酒は勇気を奮い立たせるもの。」

強引に志乃の両手を取ると、無理やり杯を持たせて、さあ飲まれよーと、酒瓶から杯に並々と酒を注いだ。

先ほどから若い男と二人だけの緊張感に苛まれ、喉がカラカラに乾いていた志乃は、目の前に注がれた透明な液体に、喉の渴きを覚え、口に運ぶとそのまま喉に流し込んだ。

「おお、見事な飲みっぷりでは、御座らぬか！」

志乃が酒を嚥下する光景を見届けて、笑みを浮かべて感心したように声を上げた。

生まれて初めて酒を口にする志乃に取って、それは口内の乾きを潤す物では無く、逆に乾いた口内をヒリヒリと刺激し、嚥下した酒は腹の底から熱い物が込み上げて来る不思議な感じを与えた。

強い酒が一機に全身に回ったのか、雪の様に白かった肌がほんのりと桜色に染まっていく志乃の顔を眼を細めて眺めながら、

「ささ、もう一献召されよ。」

と、更に杯に酒を注ごうとする様子に、慌てて志乃は手にした杯を畳の上に逆さに伏せて、柏木の強引な勧めを断った。

柏木もその様子を見て、それ以上強引に酒を勧めるのは無理と悟ったようであった。

「話が中座しましたが・・・」

志乃との距離を間近に保ったまま、柏木が何やら話し始めた。

「それがしは、ご姉弟に少なからぬ貢献をしたと、自負しております・・・」

志乃の目を覗き込むように言葉を続けた。

「はい、それは私たち姉弟心より感謝いたしております。」

柏木の言葉を遮るように喋った。

志乃の真剣な表情から、心底感謝の念を抱いていることを読み取った柏木が言葉を継いだ。

「そこで、拙者は、志乃殿より報償を頂きたいと思っております・・・」

「はい、それは、見事仇討ち本懐を遂げれば、川田の屋敷に戻って、柏木様が望まれるままの金子をお支払いしたいと考えております・・・」

「前にもお話したように、それがしは、今回の仇討ちを終えた後は、川田藩に戻ることなく、その場で全国武者修行に発ちたいと考えております・・・」

「今は旅のみそら故、柏木様にお渡し出来る金子は、私たちの気持ちに比べて余りにも少のう御座います。是非とも川田の屋敷にお立ち寄り頂きたく存じます。」

志乃は、必死の思いで柏木に川田藩に残した屋敷に立ち寄るように求めた。その心の中では、仇討ちが終わり柏木と離れてしまっただけでは、もう二度と会うことが出来なくなるのでは無いかという、惜別の思いも入っていた。

「それに、仇の赤坂玄齋は、恐るべき剣の使い手、三人で同時に挑み掛かって、見事討ち取ったとしても、それがしが、玄齋の剣の前に倒れるかも知れません・・・」

「まあ！そんな縁起でも無いことを・・・」

そんな悲惨な情景を思い浮かべたのか、顔を曇らせて叫ぶように言った。

「従って、それがしは、今報償を頂きたく存じます。」

柏木の強い言葉に、仕方が無いという様に、枕元に置かれた道中袋から、財布を取り出そうとした。

「志乃殿、拙者が頂戴したいのは、そのような金子では御座らぬ！」

と、真剣な眼差しで志乃を見詰めてきっぱりと言った。

柏木の真剣な表情に、驚いたように志乃は言葉も出せず、強い眼差しで自分の方を見つめる柏木の顔をまじまじと見詰めるだけであった。

「志乃殿、拙者は志乃殿のお情けを頂戴したい！」

柏木の思いがけない要求に志乃は、心臓が止まりそうな衝撃を受けて、言葉も出せず顔を横に伏せた。

志乃の蠟の様に白い顔が見る見る赤面して行く様子がありありと映った。

これまで自分に対して、何ら関心が無いように振る舞っていた柏木の様子から、自分には女としての魅力が無いのかと思っていた志乃であった。それが、突然の柏木から自分の肉体を要求され、心臓が止まりそうに驚いた。

「初めてお屋敷で志乃殿にお会いした時、何とお美しい姫君だと心動かされたのです！それ以来志乃殿の事が心を離れる事はお座らなんだ。しかし、それを態度に出してしまっただけでは真

剣に仇討ちのため剣技を磨こうとする真之介殿や志乃殿に差し障りになると、この心に秘めていたのです。しかし、仇打ちを控え最後の晩となって我慢出来なくなったのです！」

柏木の決意を込めた表情に、やはり柏木様は自分に関心を持たれていたのだと嬉しくも感じ、心の片隅にこのまま柏木様に抱かれてしまいたいと思う自分が居た。

しかし、一方では武士の娘として、正式に祝言を挙げていない男に抱かれるのは、はしたない事だと自制する心がそれを押し潰そうとして、心は千々に乱れ、心臓は早鐘の如く鳴り響き、顔は熱く赤く火照ってくるのであった。

「志乃殿！ご返答は如何に？」

無言のまま俯いて、顔を赤くする志乃の畳に就いた左手を掴むと、柏木が体をひたと寄せて来て問い詰めた。

志乃は、真剣に自分に思いを寄せる、この若い侍がこれまでも増して愛おしくなっていて来た。

柏木の言う通り、これまでの柏木の好意の恩に報いるために、この体を差し出しても良いのでは無いかと思い始めていた。

見事仇討ちを果たしたその暁には、真之介が家督を継げば良いのであって、自分は今宵一夜の情念を胸に秘めて、髪を下ろし尼寺に入り、一生男と交わることを避ければ良いのだと思うのであった。

「分かりました・・・柏木様、志乃をお好きなようにして下さいまし・・・」

顔を赤く染め、俯いたままか細い声で答えた。

「左様か？良く了見なされた。かたじけのう御座る・・・」

満面に嬉しそうに笑みを浮かべて柏木が叫ぶように言った。

まるで小さな子供が焦らされた末にやっと欲しがっていた玩具を与えられた時の様に小躍りせんばかりに喜ぶ柏木の姿を見ると、自分の方が柏木より年下であるのに、何故か母性本能の様なものを刺激され、胸がキュンと締め付けられる様な何か甘酸っぱいものを感じ、この身体を玩具の様に柏木の好きにさせても良いと思うのであった。

「それでは、先ず志乃殿のその雪の様に白いお体をこの目に焼き付けたくお願いつかまつる。」

志乃の裸身を見たいと言う柏木の要求に、

「此処でで、御座いますか？」と驚いたように声を上げた。

柏木が黙って首を縦に振るのを見て、どうせこの後、柏木にこの身を任せるのだから、裸の姿を見られるのは仕方が無いと、きっぱりと心を決めるのであった。

志乃の決心を見抜いたように、

「志乃殿には立ったままお召し物を脱いで頂きたい。」と、目を輝かせながら、更に要求して来た。

柏木の熱意に絆<sup>ほだ</sup>されて、激しい鼓動の中頭も熱病に冒された様にポーとなりながら、分かりましたと言うように、フラフラと柏木の目前に立ち上がると、寝間着の上に羽織っていた小袖を肩から脱ぎ落とした。

ふわっと雪の様に、着物が志乃の足元に滑り落ちた。

跡には薄い寝間着だけとなり、志乃のか細い体の線が透けて見えるような印象を受けた。

「さあ、志乃殿の雪の様に白い体を見せて下され」

畳の上に胡座を組んだまま柏木が、食い入るような視線で、直立する志乃を見上げた。

ここは柏木への恩を返すため柏木の喜ぶようにして上げようと心に決めた志乃は、黙ったまま寝間着の紐を緩め始めた。

ポトリと紐が落下すると共に、支えを失った寝間着の前がはだけ、その間から志乃の深い胸の谷間が垣間見えた。

シンとした部屋の中に、柏木の喉が生唾を呑み込む音を鳴らした。

「さあ、早く寝間着を脱いで、その白いきめ細かな肌をお見せ下さい・・・」

興奮にかすれた声で柏木が言った。

「ああ・・・恥ずかしゅう御座います・・・」

志乃は思いを立ち切るように、顔を赤く染めながら、寝間着を押し開けるとゆっくりと肩から脱ぎ降ろした。

その滑らかな肌を滑り落ちるように寝間着がするすると落下していった。

柏木の前には腰巻き一枚で裸身を晒したまま立ち尽くす、武家の若い女の姿が在った。

「おお！なんと瑞々しく柔らかそうな乳房では御座らぬか！」

志乃の良く発達した形の良い大きな乳房を見て、柏木が感嘆したような声を上げた。

ここまで柏木の熱情に背中を押されに自分でも何が何か分からない内に裸身を晒してしまったのであるが、男の目の前に晒された乳房を指摘されて、ハッとしたように両手で露出した乳房を覆い隠した。

見る見る羞恥に赤く染まっていく顔を柏木の方から背けた。

そんな志乃の恥ずかしげな姿も気に留める様子は無く、

「さあ、早くお腰の物も取って、生まれたままの姿をお見せ下され・・・」

と、興奮に爛々と目を輝かせ急かした。

これまで経験したことの無い羞恥に身悶える志乃であったが、既に半裸を愛しい男の目に晒してしまっただけで、諦めたように乳房を覆い隠していた手をどけて、震える指先で腰巻きの紐を弛めにかかった。

支えを失った腰巻きが音もなく、志乃の腰から滑り落ち、志乃の揃えた足元に落下した。

腰巻きが太股を滑り落ちる時、柏木は目敏く志乃の股間に繁茂する艶々とした漆黒の繁みを目に留めた。

「ああ・・・恥ずかしゅう御座います・・・」

恋しい男の目に裸身を晒す羞恥に堪えかね思わず腰を落とすと、立て膝となって男の目から恥ずかしい女の部分を隠そうとして、両手で胸を覆いながら、前屈みとなって股間を硬く閉じて、裸身をくねくねと振らせながら呟いた。

「さあ、志乃殿、お約束で御座る。その手を退けて志乃殿のお室の収まる場所を、拙者にお見せ下され・・・」

羞恥のあまり畳の上にしゃがみ込んだ志乃の身体に手を掛けると再び立ち上がらせようとした。

「ああ・・・お許し下さいませ・・・」

男の前に裸身を晒すという羞恥に、全身を赤く染めて、軽く嗚咽しながら、これ以上の恥ずかしめを容赦して貰えるように頼んだ。

「駄目で御座る！お約束で御座る・・・さあ、その手を退けて拙者に志乃殿の乙女の命の宿る場所をお見せ下され。」

羞恥に身を染めたまま嫌々とするように必死に手で股間を隠す志乃に、痺れを切らしたように柏木が片膝立ちになると、

「いけない手で御座るな。折角の美しい所を隠してしまおうとする・・・このようないけない手には少し懲らしめないといけませぬな！」

と、苛立たしげに声を上げると、畳の上に脱いだままになっている寝間着の紐を手にとると、必死に股間と胸を隠そうとする志乃の手を掴み、無理やり後に捻り上げ、その紐で両手を後に縛り上げてしまおうとするのだった。

「ああ・・・何を為されます！痛い御座います！お許し下さい！」

志乃が柏木の乱暴な行為に嫌々をするようにか弱く抗ったが、そんな志乃のはかない抵抗を嘲笑うように軽々と後手に縛り上げてしまった。

そして、クネクネと身体から力が抜けてしまったような志乃を背後から支える様にして無理矢理立ち上がらせた。

全裸で正立する志乃の姿に満足した様に満面に笑みを浮かべた柏木が、再び志乃の前にどっかと腰を降ろした。

今や柏木の目の前には、両手を後手に縛られ豊かな乳房も恥ずかしい股間の繁茂を隠すことが出来なくなったまま立ち尽くす志乃の姿があった。

「アア・・・志乃は恥ずかしゅう御座います。この様な辱めを受けるくらいなら、いっそのまま志乃を抱いて下さいまし・・・」

これまで愛おしく思っていた男から好色な目で、恥ずかしい所をジロジロと見られる屈辱に耐えかねたように目に涙を浮かべて哀願した。

しかし、そんな悲痛な哀願も耳に入らないかのように、志乃の前に胡座をかいた柏木は、血走った目を染み一つ無い志乃の裸身に注ぎ、

「志乃殿のお下の毛が立派すぎて大事な隠し所が良く見えませんな・・・」

と、手を伸ばして志乃の繁茂を掻き分けて中をのぞき見ようとするのであった。

柏木の指が志乃の陰毛に触れ、その内部に向かって掻き分けようとした時、余りの羞恥に貧血を起こして、直立した体を崩してそのまま倒れそうになった。

倒れそうになる志乃の裸身を受け止めた柏木は、そっと志乃を布団の上に伏せた。

余りの羞恥に意識が虚ろになった志乃を寝床に置いたまま立ち上がると押し入れを開き、中に置かれた茶箱の蓋を開けて、その中から麻縄の束を取り出した。

麻縄を抜いて、意識も虚ろな志乃の上半身を支え起こすと縄を掛け始めた。

両手を麻縄で後ろに回し、高手小手に縛り上げると、志乃の無抵抗を良いことに、余った麻縄を前に回して豊かな乳房を括り上げるように上下に二巻き三巻きと縛り上げて行った。

意識も薄く身体が痺れた様に動かない志乃は、柏木の異様な行動に「ああ・・・何をなさるのですか？・・・痛う御座います・・・」と、朦朧とした意識の下から呟くように問うた。

真剣な表情の柏木は、志乃のか細い問いかけにも応えず、無言で柔らかな志乃の白い肌に次々と縄を掛けて行った。

「ああ・・・イヤ！嫌で御座います・・・」

次々と縄掛けされて行きながら、意識が混乱した志乃が譫言の様に呟いた。

「この浅黒い縄が白い志乃殿の肌に掛かって益々雪の様に白く美しく見える事ですよ・・・」  
素肌の上から縄掛けされた志乃の艶めかしい姿に見惚れるようにウツリとした嘆声を上げる柏木であった。

「ああ・・・恥ずかしゅう御座います・・・」

柏木の腕の中に抱かれて上半身を厳しく麻縄で縛められた志乃が身も世もなく恥ずかしそうにナヨナヨと身体を震わせた。

「今此処には拙者と志乃殿の二人だけ・・・何の恥ずかしいことが御座ろう？」

そして、畳の上に伏せられたままの杯を手にして、なみなみと酒を注ぎ入れると

「ささ・・・これを飲まれよ！落ち着き申すぞ・・・」

と、杯を薄く開いた志乃の唇に押し当て、口内に酒を注ぎ入れていくのであった。

すっかり意識の混濁した志乃は、訳も判らず柏木に注がれるままに酒を飲み下して行くのであった。

すっかり酒の酔いの回った志乃の全身が桜色に染まり、体温が上がっていくのが判った。

羞恥心と酒の酔いが回ってしまったのかグッタリとした志乃の上半身を硬く縛り上げ、縄止めをすると、更に新たな縄を手にして、意識が朦朧とする志乃を無理矢理立ち上がらせると書院作りの床の間の柱を背に志乃を縛り付けようとした。

うっすらとした意識の中で志乃が、アア、お許し下さい、と讒言のように呟いていた。

志乃の儂い抵抗を無視して、柏木は志乃を床柱に立位で縛り上げてしまった。

そして、再び押し入れの奥から長さが三尺（90センチ）以上ありそうな竹棒を取り出し、志乃の足元に置いた。

そして、再び別の麻縄を手にする、その竹の棒の両端に志乃の脚を縛り付け始めた。

全ての作業を終え、今や畳に胡座をかいた柏木の目の前には、一糸纏わない志乃が、立位で人の字に脚を全開に広げさせられて縛り上げられていた。

一仕事終えたとも言うように、立位で開股縛りにされた志乃の正面にどっかと腰を降ろし、胡座をかくと舌なめずりしながら志乃の非の打ち所の無い美しい裸身をネットリとした視線で上から下までゆっくりと眺め回した。

部屋中の行灯や蠟燭の灯りを直ぐ傍に並べ立て、明々とした灯りが白い志乃の全裸姿を照らし上げていた。

柏木の嫌らしい熱い視線を裸身に感じて、志乃の意識がしらじらと戻り始めた。

自分が正常な意識を失っている間に床柱に背を押し付けられて縛り上げられ、股間を大きく開いて開股に縛り上げられていることに気付いて小さく悲鳴を上げた。

「ああ・・・これはどういう事で御座います？何を為されます？お許し下さいませ・・・」

柏木の陰虐な行為に激しく首を振って涙を浮かべて抗議した。

しかし、そんな志乃の哀願も無視するかのように、

「これで志乃殿の大事な大事な隠し所も、パツクリと全開のご開帳で御座るよ・・・」と、楽しそうに呟くのであった。

「もっと良く志乃殿の乙女の証を見せて頂こう・・・」

と、呟くと両手の指を伸ばして、志乃の良く茂った繁茂を掻き分け、幾重にも畳まれた襞を押し開き内部をのぞき見ようとした。

ヒィヒィと息が止まるような短い悲鳴を上げて、柏木の手から逃れる様に腰を悶えさせる志乃の抵抗を無視するように、いや、それをまるで楽しんでいるかの様に、両手の指を器用に操り、こんもりと茂った春草を掻き分け、熱く火照った肉襞を左右に押し広げ、その長い間人知れず秘められてきた秘奥を露わにし始めた。

「おう！おう！これぞまさしく乙女の証！」

志乃の膣孔を覆う半透明の膜状の物を目にして、感激した声を上げるのであった。

嫌々と涙を浮かべながら弱く抵抗を見せる志乃であったが、何故か柏木から狼藉を受ける股間が熱く潤って来るような感触を受けるのであった。

これまでの柏木から受けた好意に恩返しするため、この身を柏木に捧げるという一大決心をした志乃では在ったが、柏木の変質的な行為にドギマギと心が揺らぐのであった。

志乃の想像では、布団の中で逞しい柏木の腕の中に抱かれ、柏木の情けに甘えて、身を委ね、優しく新鉢を割られる事を予想していたが、想像と現実の余りの違いに心は絡み合った麻糸の如く千々に乱れて混乱するばかりであった。

ああ一、これが柏木様の望む女の愛し方なのか？各地を遍歴して来て、それなりに女を抱いて来たかも知れないこの若侍は、荒々しい剣の修行を積む内に普通の男女の睦み事とは異なる荒々しい男女の行為を身に着け、この様な暴力的な女の愛し方を好む様に成ったのであるうか？

自分の想像も就かない男女の交接であるが、これが、柏木様の好む女の愛し方なら、これまでの柏木様から受けたご厚意の万分の一もお返しするため、このままこの屈辱的な行為を甘

受した方が良いのでは無いかと心の片隅で思い始める志乃であった。

「ほほう・・・良い香りが漂って来ましたぞ・・・」

想像もしていなかった体験による興奮と無意識の内に男を迎え入れる受容の徴として熱く火照った陰部が切なく蠢いた。

柏木が股間から立ち上る女の香りに気付いて、鼻先を両手の指で押し開いた乙女の命の中心に押し当てようとした。

柏木の淫靡な行為に驚き、それに呼応するようにカッカと反応を示す自分の肉体に狼狽したように志乃が激しく首を振り始めた。

実は、柏木が志乃に先ほどから飲ませた酒の中には強烈な催陰剤が溶かしてあったのだが、懊悩する志乃にはそれが愛しい男を相手にする際の自立的な身体反応と感じていた。

志乃の悲壮な決心にも気付かず、薬が効き始めたなど、熱く潤い始めた女の花園に顔を寄せながら、にんまりとほくそ笑んだ。

「志乃殿も受け入れる準備が調って来た様で御座るな・・・」

柏木は右手の中指をぴんと立てると、秘孔に懸かる乙女の膜の隙間から内部に少しずつ押し入れ始めた。

「アアッ・・・痛う御座います・・・お止め下さい・・・もう、お許し下さい・・・」

「何の何の・・・志乃殿の此処が拙者の指を愛おしそうに啜えておりますぞ！それに、どうじゃ？この暖かく湿った極上の内部は！」

「ああ・・・志乃は恥ずかしゅう御座います・・・もう充分で御座いましょう・・・早くしないと仇討ちに間に合わなくなってしまう・・・」

柏木の巧みな指技に乙女の中心部を掻き回されながら、志乃が喘ぐように言った。

剣術一筋の節くれ立った指と思っていたが、意外にも柏木の骨張った長い指は繊細に動き、まるで女の秘め場所を知り尽くした様に秘所を這い回り、拒絶の態度を示す志乃を嘲笑う様に、秘めたる情炎をジワジワと掻き出して行く様であった。

「心配しなくとも、仇討ちの時間までは充分時間は在りますよ。」

と、指先を熱く潤い始めた志乃の女の内部に含ませながら言った。

志乃の処女の証である薄い膜を傷付けない様に慎重に指をその熱く火照った内部に埋めながら、心憎い程の見事な手技で志乃の感じ易い部分を的確に責め立てた。

アアッ嫌！、アアッ恥ずかしい！と柏木の指技の前に責め続けられる志乃が、床柱を背に縛り付けられた裸身をブルブルと身悶えさせた。

「裸でいるのが恥ずかしいと言うので御座るか？」

全裸にされカッチリと人の字型に縛り付けられた志乃の前に胡座をかいて指先で責め立てながら身も世もあらず身悶える志乃を見上げて聞いた。

「それなら良い考えが御座るよ・・・」

と、言うのと志乃を責めることを止めて立ち上がった。

そして、そのまま部屋を後にした。

柏木が居なくなってホッとしたように志乃が息を吐いた。

しかし、柏木の指技に責め続けられていた志乃の股間は、何故か切なく疼くのであった。

疼きを癒そうと無意識の内に不自由な股間を振らせていた。

股間から熱い滴がポトリと畳の上に落ちたのが分かり、はしたない真似だと僅かに残っていた武家の娘としての自意識が志乃を責め立てた。

暫くして、柏木が廊下を何か引きずるよう音を立てて志乃の部屋に戻って来た。

障子を音を立てて開くと、その引きずって来た物を部屋の中に乱暴に投げ入れた。

志乃はそれを見て息が止まる程の衝撃を受けた。

それは、全裸に剥かれて全身を身動き出来ないように胡座縛りに雁字搦めの縛り上げられた、弟の真之介であった。

真之介も床柱に股を大きく開いて人の字型に縛り付けられた姉の姿を見て、驚いたように、猿轡により嚴重に声を封じられた口から怒りのよううなり声を上げた。

志乃も柏木との二人だけの男女の睦み事に終わると思っていた、密会の場に弟の真之介を連れ出され、柏木の真意を測りかねて何も考えることも出来ず混乱の極みにあった。

何よりも一糸纏わぬ全裸姿を弟に目撃された事に、冷水を頭から浴びせられた様な衝撃を受け、羞恥に全身がガタガタと震えた。

「姉弟の裸同士のご対面で御座るよ！これでお互い裸同士！恥ずかしいことは無いで御座ろう！」と柏木が手を叩きながら嬉しそうに声を上げた。

上半身を高手小手に縛り上げられ、両脚も胡座縛りにされ、首から通した縄を両足首を交差する様に縛り上げ、縄尻をクルクルと搾り上げ、前屈みの姿勢で身動きも出来ない裸の弟の姿が、これまた全裸のまま立位で開股縛りにされた姉の前に向き合うように佇んでいた。

「おお！そうであった！真之介殿はまだ一枚下穿きを着けておいでであったな？」

と、カラカラと笑い声を上げながら胡座縛りで大きく開いた真之介の股間を僅かに覆っていた禪に手を掛けた。

真之介が怒りを含んで雁字搦めに縛り上げられた身体を震わせるのを無視して、クルクルと六尺の禪を解いてしまった。

「これで、姉弟揃って一糸纏わぬ丸裸という物じゃ！」

と、真之介から奪い取った長い布切れを手にして大きな声で笑い上げた。

「おお！これはどうじゃ？真之介殿の此処はまだ皮を被っておいでではないか！」

座禅縛りに縛り上げられ、剥き出しにされた股間の一物を目にしてゲラゲラと笑い声を上げた。

柏木の嘲り笑いの前に悔しそうに真之介が首を振った。

そして、書院の柱に立位で開股縛りにされた姉の目の前に、胡座縛りにされた真之介を引き据えた。

見てはならぬと必死に目を逸らす真之介の鬣を柏木がグイッと掴むと顔を正面に向けさせた。直ぐ目の前には無残にも押し広げられた姉の女の部分が在った。

「失礼ながら真之介殿はまだ女の事は、何も知らないのでは無いか？明日の仇討ちでは万が一玄齋の兇刃の前に倒れるかも知れない。女の事も知らずこの命を終えるかも知れ無いのは余りにも不憫。これから姉上が自分の身体を使ってお主に女の身体のことを教えて遣わすと言っておる事よ・・・」

「柏木様！余りにもお戯れが過ぎます！真之介、見てはなりませぬ！」

柏木の突然の言葉に狼狽した志乃が激しく身体を震わせて叫んだ。

志乃の狼狽ぶりを無視して、柏木が左手で真之介の鬣を掴んで正面を向けさせると、志乃の股間の形良くこんもりとした繁茂に右手の指を添えた。

「見るのだ、真之介殿。どんな女でも股座はこの様になっておる・・・それにしても志乃殿は実に美しい生えっぷりをして御座るな、艶があり、柔らかくて実に触り心地が良い・・・」

志乃の股間に密生した痴毛の感触を楽しむ様にウツトリとした声を柏木が上げた。

柏木に股間をまさぐられながら志乃がお止め下さいと悲鳴を上げ続けた。

「そしてこの草むらを開くと・・・」

柔らかな繁みで遊ぶことに飽きたのか、次に右手の指先を駆使して黒々と艶を帯びた下草を左右に掻き分け始めた。

表の風が秘部に触ることに気付いたのか、徐々に押し広げていく度に志乃が身体を仰け反ら

し、ヒッヒッと悲鳴を上げ続けた。

「ほら！綺麗な桜色した柔らかな貝の様な合わせ目が見えて来たろう？おなごと云う者は宮中の上臈でも武家の女でも百姓女でも股の間にこの様な二枚貝を隠し持っておるものじゃ・・・」

完全に露出してしまった志乃の秘所を指し示しながら得意そうに講釈をぶった。

「次はこの貝の中身をお見せしよう・・・」

柏木が人差し指と中指を遣って秘裂の合わせ目をこじ開け、弟の目にその秘奥の様子をジワジワと晒させ始めた。ふと弟の怨嗟の籠もった焼ける様な視線に気付いた志乃が、

「真之介！見るのではありません！」と悲鳴のような声を上げた。

柏木の術中に嵌ったように無意識の内の姉の秘所を凝視していたことに気付いた真之介がハッとしたように目を背けた。

「見るのだ、真之介殿・・・折角姉上が自分の身体を使って女体の構造を教えて下さっているのだ、目を背けては姉上に対して失礼と云うもの・・・ほら、このパツクリと開いた祠の周りがネットリと濡れ光っているのが判るだろう？」

真之介の額を鷲掴みにして、きつく閉じた瞼をこじ開け、恨めしそうな目を姉の方に向けさせながら、左右に押し開いた肉の花弁の奥を注視させた。

人差し指と中指で大きく左右に押し広げた柔らかな秘肉の上を親指でまさぐりながら言った。

「女という者はな、男を受け入れる準備が出来ると、これこの様にこの花弁を濡らすモノじゃ・・・志乃殿も先程から拙者の手技を受けて身体を蕩かし、この様に熱い湯をここから滴らせておったのじゃ・・・」

「嘘です！その様な事は在りません！」

弟の目の前で身体の変化を指摘されて、狼狽したように叫んだ。

「先程はあれほど喜んで、拙者の指を硬く喰い絞めておったのに嘘だと言われるのか？・・・」

それでは弟御の前で悶える姿を実際にお見せするが良かろう・・・」

柏木は傍に置かれた茶箱の奥から、蛤の貝殻を取り出すと、その蓋を開いた。

中には薄黄色みを帯びたドロリとした膏薬の様なモノが入っていた。

そして、その軟膏状の物を中指でたっぷりと掬い取った。

「真之介殿良く観るのじゃ、これが姉上の本当の牝の姿じゃ・・・」

乙女の膜の隙間からたっぷりと膏薬を載せた中指をズルリと滑り込ませた。

その瞬間股間から何やら得体の知れない熱いモノが秘部の奥から込み上げて来て志乃が身体を仰け反らせて悲鳴を上げた。

「見られい！真之介殿、拙者の指を根元まで呑み込みおったわ！」

真之介が血走った視線を向ける先で、志乃の開花した秘裂は柏木の指を付け根まで体内に収めていた。

暖かく湿った肉洞がドクドクと脈打って自分の指を喰い絞めている事を検知し、媚薬の効果を確認した柏木がニヤリと淫靡な笑みを浮かべて、緩やかに指を前後に動かし始めた。

志乃には自分の身体がどうなっているのか判らなかった。

ただ秘所が燃えるように熱くなり、全身の血液がその部分に集まった様に、カーッと燃え上がり、柏木が指を動かす度にズキンズキンと激しい衝撃が股間から全身を駆け巡った。

柏木が指先を前後に抜き差しする度に、アッアッと小さく悲鳴の様な声を上げ、堪えようにも熱い樹液が溢れ出るのが判った。

今は真之介も強制されずとも悪魔に魅入られた様に姉の狂態に血走った視線を注いでいた。

「アアーッ！お止め下さい！志乃はせつとう御座います！」

柏木に責められ、燃え上がった志乃がビクンビクンと身体を硬直させながら悲鳴の様な声を上げた。

「見られよ！真之介殿！姉上が滴らせているのが判るか？それに良い匂いも漂って来たであろう？」

柏木の手技の前に無残にも敗北した志乃の股間から夥しい愛液が太股を伝って流れ落ちる様子を大きな声で伝えた。

ふと雁字搦めの胡座縛りにされた真之介の股間が変化していることに気付いた柏木が大きな声で笑い始めた。

「これは重畳！姉上の喜ぶ姿を見て、弟御も喜びを現し始めたわ！」

右手で志乃を責め立てながら、左手で勃起した真之介の肉茎を鷲掴みにして前後に扱き始めた。

「今宵真之介殿も女の身体を知る様になったのに何時までも子供の様に皮を被ったままでは可笑しい。拙者が丁寧に皮を剥いて進ぜよう・・・」

柏木の術中に陥り、自らの心の闇に潜む陰獣の虜となってしまった様に肉茎を膨張させてしまった真之介の亀頭を覆っていた包皮をゆっくりと剥き上げて行った。

柏木の手指を熱を持って膨張した部分に受け、激しい羞恥と怒りに身動きも出来ない程きつ

く縛り上げられた身体を震わせた。

「ほほう・・・剥けて来たわ・・・剥けた頭の先が一段と膨らんで来て、まるで蛇が脱皮するようじゃ・・・」

真之介の包皮を亀頭の根元まで剥き上げた柏木が嬉しそうに声を上げた。

包皮を剥かれ外気に接した亀頭部から妖しい匂いが立ち昇り志乃の鼻腔を擦った。

「これは、これは！まだまだ子供だと思っていた真之介殿も立派な大人の持ち物を持っておいででは無いか！」

剥き上げてすっかり露出した陰茎にそのまま手コキを始めた。

真之介の怒りとも呪詛とも快感ともつかぬ呻き声を無視して、先走りのネットリとした樹液を鈴口から滴らせ始めた男根を嵩に懸かった様に激しく責めあげた。

「これは、ご姉弟にはご奉仕せぬ訳には行きませんか！」

再び蛤の貝殻に入った媚薬をベツトリと手に塗り付けると、媚薬を塗された手で真之介の男のモノを握り締めた。

アア・・・と、真之介が女のような悲鳴を上げて身を仰け反らせた。

亀頭部の薄い粘膜を通して媚薬が熱を帯びて膨張した陰茎の中に染み渡った。

「姉上も指一本では物足りぬであろう・・・」

再び右手の中指と人差し指でたっぷりと媚薬を掬い取ると、膜を破らないように注意しながら二本の指を奥深く挿入した。

「ああ・・・もうお許し下さい。」

先程と打って変わって、二本の指先を秘孔に受けて、男を知らぬ志乃がその二本の指の太さに堪え切れずに悲鳴を上げた。

「流石に未通の志乃殿には二本の指はきついと見えるな。どうじゃ！この絞め具合は！」

志乃の身悶えも気にならないかの様に、柏木は二本の指を駆使してその内部を荒らし回った。そして、一方では左手を激しく動かして真之介のモノを扱き続けた。

右手の指先で熱く燃え上がった志乃の極上の内部をまさぐりながら、柏木がニヤリとした。

「武家の女の志乃殿にはご存じないだろうが、志乃殿のこの部分は数の子天井と呼ばれる名器だ。それに拙者の指を締め付ける力も名器の素質十分じゃ・・・」

柏木の巧妙な手技の前に身体を燃え上がらせてしまい、今や自律的に秘肉を蠢かせ始めた志

乃に柏木が囁くように告げた。

柏木の繰り出す巧みな技巧と強烈な媚薬の作用の前に、最早志乃には柏木のからかいの言葉は届いていなかった。

「全部の女に在る訳では無いが、一部の女はこの裏側がプックリと盛り上げておっつの、其処を指の腹で撫でられると堪らぬ気分になるものだが・・・オオッ！志乃殿にも在るでは無いか！」

二本の指先で志乃の華洞内をまさぐり続ける柏木が秘められた快感の壺を発見して驚きの声を上げた！

「正しく、志乃殿は全国に何人も居ない名器の持ち主・・・」

と感嘆したように呟き、指先で膣内に盛り上がった快感の壺をグッと押した。

その瞬間、その部分から鋭い電流の様なものが全身を貫き身体がグッと硬直した。

熱い樹液が奥深くから吹き上げ、内部に収めたままの柏木の指を濡らした。

ハアハアと荒い息を吐き、早鐘のように心臓は鼓動し、キンキンと秘所からは鋭い快美感が全身に突き上げて来ていた。

「アアーッ！柏木様！もうお止め下さい！・・・お許し下さい！・・・このままでは志乃は醜態を晒してしまいます！」

先程から感じている股間に生じた痺れにも似た感覚が柏木の巧みな指技により煽り立てられ自分でも抑え切れない激しい痺れとなり身体全般に伝播し、その一端は脊髄を駆け上り脳髓を侵し始めていた。

男女の性愛の経験が無い志乃であったが、柏木の指捌きの前に本能的に自分が間もなく絶頂を迎える事を感じ取っていた。

全身を紅潮させて、激しく顔を左右に振りながら譫言の様に叫び続けた。

柏木は志乃がもうすぐ絶頂に達しそうだ気付いていた。

そして、自分が扱き上げる真之介も放出が近いと感じた。

「ハハ・・・お二人とももうすぐ昇り詰めそうでは無いか？お二人とも同時に達しなさい・・・」笑いながら両手の動きを益々激しくして、姉弟を責め立てた。

「アアーッ！真之介！見てはなりません！浅ましい姉の姿を見てはなりません！」

激しく襲い来る怒濤の様な快美感に今にもこの身体が木っ端微塵に打ち砕かれようとしていることを理解した志乃が身体をブルブル震わせながら叫び声を上げた。

思わず目を固く閉じた真之介の耳に姉の断末摩の悲鳴が響いた。

アアーッ！ウッ！と押し殺した声を上げて二人が同時に身体を仰け反らせて頂点を極めた。  
真之介の股間から放出された熱いモノが、志乃の太股の上で弾けた。

「これは、これは、お見事、お見事！二人同時に達したでは無いか！・・・しかも真之介殿は流石にお若い！ここまで精を飛ばすとは！」

志乃の大腿を滴り流れる真之介の精液を見詰めながら、感心した様に声を上げた。

柏木の手技が余りにも巧みだったため意に反して燃え上がってしまったとは言え、弟の目の前で惨めな姿を晒してしまったと言う自意識が込み上げて来て、堪えようも無く涙に咽んだ。真之介も姉の無残な姿に煽られて、射精してしまったという慚愧の思いから、顔を伏せて泣き崩れていた。

ひとしきり涙を流すと、少し気分も落ち着きを取り戻し始めた。

障子を通して外が明るくなり夜が明け始めた事が判った。

遠くで鶏の刻を告げる声が聞こえて来た。

アアーッ、仇討ちの刻限に間に合わなかった・・・と、志乃がさめざめと涙を流した。

頬を伝って流れる涙を、柏木が指先で掬って、その味を確かめる様に、指先を嘗めた。

「何を泣いて御座る？仇討ちが出来なかった事を泣いているので御座るか？」

御安心召されい。仇の赤坂玄齋には遭わせて進ぜる・・・」

その時廊下をミシミシと軋ませて、人がこちらの方に歩いて来る音が聞こえて来た。

そして、正面の障子の前で立ち止まった事が分かった。

空け始めた日の光を受けて、障子に二人の人影が映った。

一人はデブプリと肥満した人影でもう一人は六尺ほどの大男の影であった。

障子に浮かんだ二人の影絵に志乃の身体は凍り付きそうになった。

御免！と言って男達が障子を開け放った。

そこに立っていたのは憎い赤坂玄齋と恵比寿屋惣右衛門の二人であった。

ゆっくりと部屋に押し入って来た二人の男を目にして、激しい衝撃を受け、言葉も上げられず、思わず心臓が止まりそうになった。

憎い親の仇の前に裸身を晒すという羞恥を超えた驚愕の思いに身体が冷たくなって行った。

街外れの妾宅にいる筈の赤坂玄齋が、突然此処に現れた事に衝撃を受けた。

しかも恵比寿屋惣右衛門を伴って・・・

何故？何故？と、羞恥と恐怖で混乱する頭の中で悲鳴の様な声が竜巻の様に回り続けた。姉の方を向いて玄齋達に背を向けていた真之介も姉の唯ならぬ様子から後ろを振り返り、そこに赤坂玄齋が佇んでいる事を見て愕然とした。

まるで罪人の様に胡座縛りに雁字搦めに縛められて身体を震わせた。

「これは、これは、お初にお目に掛かる。・・・もっともそちらは拙者を見知っているようで御座るが、そなた達姉弟が親の仇として付け狙っていた尾幡権八郎こと赤坂玄齋で御座る。・・・しかし、お二人とも実に奇妙な格好をして御座るな！」

と、全裸のまま床柱を背にして立位の開股縛りにされた志乃と、これまた全裸のまま胡座縛りにされた真之介を交互に見交わして勝ち誇った様に笑い声を上げた。

「志乃殿もこれから敵討ちに出掛けられると言うのに、実に目のやり場に困るような格好をされているではないか？」

憎い親の仇に全裸姿を見られるという羞恥と怒りに青くなった赤くなったりして身悶える志乃の身体を上から下まで嘗め回す様に見詰めた後、開股縛りにされた股間部分を繁々と見詰めて、

「おやおや、少し前まで散々お楽しみになったご様子。股の間がまだ濡れ光って御座るぞ・・・」

と、惨めな敗北の痕跡を示す股間を指差して、

「如何で御座った？篤馬の手技は？・・・お気に召して貰えたかの？」

と、狼狽<sup>うろた</sup>える志乃の目を見詰めながら得意そうに笑い声を上げた。

「・・・実は篤馬は儂の息子であつての・・・儂も若い頃は全国をあちこち歩いて、あちこちに妾を作り子をもうけたが、篤馬が一番儂に似ておつての・・・」

「いえいえ、全然似ておりませんぞ！拙者は父上のように醜<sup>ぶおとこ</sup>男では御座らぬ！」

柏木が愉快そうに笑いながら口を挟んだ。

「剣の腕が立つ所と女に目がないと所が儂とそっくりじゃと申したのだ！」

最初から罠だったのだ！と初めて姉弟は気付いた。

最初から二人を罠に嵌め此処に連れて来るため、柏木は叔父に近づき、大仰な芝居を打って二人を騙し続けていたのだ！

今は本性を現し、敵方に戻り愉快そうな笑顔を浮かべる柏木に抑えようの無い怒りを覚えると共に、そんな卑劣な男とも気付かず、淡い恋心を抱いた自分が惨めになって来た。

「儂も全国を放浪してこの秋芳の地に流れ着き、漸く藩の剣術指南の役を得て成功を収め、今日の繁栄を見ておる。・・人間成功すると妙に昔が懐かしくなるものでな・・昔、儂の剣術指南就任に色々骨を折ってくれた人間がおっての、結局その役に就くことは叶わず、酒の席でのつまらぬ口論が元になって、その男を斬り殺してしまった。」

「いくら酒の上とは言えど、さんざん骨を折ってくれた恩人を斬り殺してしまうなど、当に人の皮を被った悪鬼。昔から赤坂様は悪い酒の様でおますな？」

横から面白そうに恵比寿屋が口を挟んだ。

「何を言う、お主だって藩のお台所を一手に引き受けるために、商売敵の主人を何人も儂に斬り殺させたでは無いか？この儂に辻斬りの真似をさせおって。お主も人の皮を被った悪鬼じゃないか？」

「まあ、それは、持ちつ持たれつと言うことで・・」

恵比寿屋が太い手を手もみしながら応えた。

「人間成功すると妙に昔が懐かしくなる・・昔斬り殺した男に二人の子供がいたことを思い出しての・・上の娘は美しく成長したと人の噂に聞いて合って見たくなつたのじゃ。そこで一計を案じて篤馬を送つたのじゃ・・」

玄齋の話から、大恩ある父を殺した上に、奸計を持って自分達を連れ出したこの男の底知れぬ陰険さに怒りを超えて恐怖を覚える姉弟であった。

「それにしても見てみろ！恵比寿屋！お主の様な下郎が蔭も踏めない様な武家の姫が股座を大開にして恥ずかしい所を丸出しにしておるではないか！」

「へえ、左様だすなあ・・」

玄齋の投げ掛けた言葉を受けて、恵比寿屋惣右衛門が改めて志乃の裸身に上から下まで粘っこい視線を匍わせると、腰を屈めて志乃の開け放たれた股間に顔を近づけ、淫靡な光りを瞳に宿して女の秘められたる場所を注視した。

憎い仇の玄齋と柏木の存在に注意を奪われていた志乃であったが、此処に恵比寿屋も居ることを思い出し、

「惣右衛門殿、そなたは関係ないはず！直ぐここから出て行くのです！」

と、気丈に叫んだ。

憎い親の仇の玄齋や自分達を騙し続けた柏木だけでなく、下世話な商人の恵比寿屋にも自分

の恥ずかしい姿をジロジロと見詰められる羞恥に堪えられずガッチリと竹竿に固定された両脚を閉じようと藻掻いた。

「いえいえ、私も関係がおますですよ・・・今回の計画には色々物入りがありましてな・・・その費用を工面したのは、この私でおますさかい・・・」

志乃の悲痛な叫びを何処吹く風とニコニコと恵比寿顔を浮かべて手もみしながら応えた。

絶望的状况の中で、最早これまでと観念した志乃が舌を嚙んで自害しようとしたが、目敏くそれに気付いた玄齋が一瞬速く志乃の口の中に手にしていた鉄扇をねじ込んだ。

自死しようとする志乃とそうはさせじと、格闘する二人の様子を面白そうに眺めていた篤馬が、畳の上に打ち捨てられていた真之介から剥ぎ取った褌を手を取った。

そして、その六尺の布切れをビリビリと幾つかに裂くと、大きな布をクルクルと丸めて塊にして、横から志乃の口中に差し込んだ。

「どうじゃ？弟御の股座の味は？」

と、弟の下穿きを口中に埋め込まれた志乃の様子を見詰めて嬉しそうに叫んだ。

そして、残った褌の布をクルクルと紐の様に丸めて、口内に入れた布切れを吐き出さぬように固く歯の間に通して後頭部で縛り上げた。

「暫くの間、志乃殿も喋る必要は御座るまい・・・弟御の股間の匂いを楽しむのが良かろうと・・・」

と、最後に残った布切れで鼻から顎にかけて白い布で覆いの様に猿轡を掛けた。

最後の自死の機会も失い、弟と同じように固く猿轡を嚙まされて、グッタリと項垂れる志乃であった。

美しい顔の下半分を弟が締めていた褌で覆い隠され、全てを諦めたように目を閉ざし、涙を溢れさせる志乃の姿に震いつきたくなる程ゾクゾクするものを感じる男達であった。

すっかり敗残の姿を晒し打ち拉がれる志乃に、「死にたければ何時でも死んで良いぞ！ただし、その後真之介の命も無い。真之介が死んだら笹川家も断絶することになるぞ！」と、脅しつけた。

玄齋の言葉に、ああ、そうであった。笹川家を守るためには、この身を犠牲にしても真之介の命を守らなければならないーと心に誓うのであった。

「実は、お二人のために新居をご用意しておます・・・早速新居にご案内しまひょ・・・」

惣右衛門が文字通り恵比寿顔を浮かべ、手揉みしながら言った。

玄齋が真之介の両脚を胡座に縛り上げていた縄を解き、ふらつく真之介を無理矢理立ち上がらせた。

惣右衛門も志乃を床柱に繋いでいた縄を解いて縄尻を手にとった。

「そら！歩くんや！」

志乃の背後に回って高手小手に縛られた縄に継がる縄尻を握り締めた惣右衛門が、歩行を促すようにこんもりと見事に盛り上がった柔らかな臀肉を蹴り上げた。

これまでの低姿勢から打って変わって本性を剥き出しにした惣右衛門の態度に恐れを為した様にトボトボと歩み始めた。

二人がこれまで過ごした離れ屋敷から外に連れ出される時、自分達の全裸の姿を誰かに見られるのではないかと羞恥と恐怖に歩みが止まったが、周囲を取り囲む悪党達から邪険に尻を叩かれたり、肩を小突かれたりして無理矢理庭に連れ出された。

周囲に朝霧が立ち込め始め、二人の姿を隠していくのがせめてもの幸いであった。

朝靄の中、離れ屋敷から何時も眺めていた池の周囲を回ると、乳白色の霧の中からボンヤリと黒く艶のある海鼠壁が出現した。

それは初めて恵比寿屋に来た時に目にした真新しい蔵であった。

悪人共は普請したばかりの土蔵の厳めしい鉄扉の前まで姉弟を引き連れた。

蔵の入り口の鉄製の大きな扉に架けられた黒光りする巨大な南京錠に鍵を差し込みながら、惣右衛門が得意そうに姉弟の方を向いて説明した。

「この蔵は只の蔵やおまへん！お二人というお宝を収蔵するため特別に造らした蔵でおます・・・」

鉄の軋む音をさせて分厚い重い鉄扉を開いた。

怯えたように入り口に立ち竦む姉弟を男達が無理矢理蔵の内に押し込んだ。

真新しい漆喰の湿った香りが鼻を衝いた。

中は板敷きの広い空間となっており、驚いた事に天井の中央部分が吹き抜け構造となっており一軒（約1.8メートル）四方の穴が開いており蔵の二階から吊り下げられた滑車が姿を見せていた。

「大工にこの様な蔵を造るように依頼した時、目を丸くしておりましたわ・・・」

外観は普通の蔵であるが、内部は何処にでも在るような蔵とは大きく構造の異なる蔵を発注された時の大工の驚いた様な顔を思い出して惣右衛門が笑い声を上げた。

蔵の中には井戸や竈も用意されていた。

そして、薄暗い蔵の隅の方に無造作に置かれた不気味な道具に姉弟の目が釘付けとなった。

それは、三角木馬や算盤板などの拷問に使用する道具であった。

玄齋が裏から手を回して番所で実際に取り調べに使われていた拷問道具を密かに入手して運び込ませた物であった。

その禍々しい拷問具を初めて目にする姉弟にとって、それがどの様に使用する道具か理解は出来ない物であったが、これまで幾人もの犠牲者の血と脂汗に塗れた拷問具が発する禍々しい雰囲気立ち昇り姉弟を恐怖のどん底に墜とし込むのであった。

蔵の内部に二人を連れ込み、重い鉄の扉を閉めて、中から鍵を掛けると、

「さて、これまで長々とお芝居を打ってお待ち兼ねや・・早速そのお体を抱かせて頂きまひよ！・・志乃様も早々と素っ裸になってお待ち兼ねの様子ですし・・」

恐怖に立ち竦む姉弟を横目に見て、惣右衛門がいそいそと床に布団を敷き始めた。

「さて、誰が志乃殿の初物を頂くかだが？」

篤馬が玄齋と惣右衛門の顔を見交わしながら呟いた。

「この姉弟は儂を仇として狙っておったのだから、先ず儂が返り打ちにせねば、話が成り立つまい！」

玄齋がきっぱりと言い切った。

「いえいえ、私も今回<sup>わて</sup>の計画では、この特別な蔵を新築したり、篤馬様の路銀を用意したり、色々金を使っております。初物の権利は私にもおます！」

「拙者も川田の屋敷より二人を連れ出し、此処まで連れて来たのだから、拙者にも権利はある・・」

「やれやれ・・娘一人に婿三人や！これでは埒が開きまへん！・・此処は籤を作って公平に順番を決めまひよ！」

男達の悪計が耳に届いて床の上に片膝を着いて恐怖に怯える志乃達を無視して男達は楽しそうに籤を作って順番を決め始めた。

「ほう！儂が一番だ！」玄齋が当たり籤を手にして嬉しそうに声を上げた。

「全く悪運だけは強いお人や！」惣右衛門が呆れたように声を上げた。

「拙者は二番目か・・」篤馬が外れ籤を見詰めながら呟いた。

一番籤を引き当てた玄齋がいそいそと着ている物を脱ぎ始めた。

五十近い歳にも拘わらず全身に無駄な肉は無く、太い骨の上を分厚い筋肉が覆っている逞し

い体をしていた。

手早く服を脱ぎ捨てると、男の精を全身から立ち昇らせる様に、浅黒い身体にびっしりと黒い体毛が覆っていた。

股間を覆う白い禪から左右にはみ出した剛毛が大腿の濃い体毛にそのまま繋がっていた。

濃い体毛に覆われた六尺以上の巨体はまるでひぐま熊が立ち上がった姿を連想させ、志乃を恐怖に陥れた。

何かの謡曲の一節を上機嫌で鼻歌の様に歌いながら僅かに残った禪もクルクルと脱ぎ落とした。

その下穿きを脱ぎ去った股間からデロリと垂れ下がった陰茎を目にした志乃が目を瞠り、猿轡を嵌められた口の奥でヒッと悲鳴を上げ、恐怖の色を浮かべた。

馬並みと云う言葉は在るが、まるで本物の馬の様に太くて長い巨大なモノがまるで三本目の脚の様に股間から生えていた。

「それではお待たせ申したの・・儂が志乃殿の秘め処を吾が豪刀で引き裂き、見事返り打ちにして遣わそう！」

玄齋がその巨体をワラワラと揺らして高笑いしながら、床の上に片膝を着き、涙を浮かべて項垂れ身体を小さく折り曲げる志乃の裸身に手を掛けた。

憎い親の仇の手が身体に触れた瞬間、まるで焼け火箸を押し付けられた様にビクッと身体を震わせ、弟の禪により猿轡を噛まされた口の奥深くから悲鳴を上げた。

玄齋の太い腕により柔らかな白い身体を抱き抱えられ、布団の方に運ばれて行く間、志乃は必死に身体を身悶えさせ抵抗を試みたが、大男の玄齋に取って上半身を縛り上げられた小柄な志乃を布団の上に運ぶことなど造作も無い事であった。

布団の上で身体をくの字に折り曲げ涙に咽ぶ志乃を上から見下ろしながら、

「志乃殿は儂の事を唯乱暴なだけの無骨の男と思っておるかも知れぬが、それは違うぞ！儂はこれまで千人以上の女を抱いて来て女を喜ばせる方法は熟知しておる。儂がこれまでの経験を活かして、志乃殿には一生忘れられぬような素晴らしい初夜の思い出を作ってやるわ・・」  
布団の上にとっかと胡座を組んだ玄齋が自分の組んだ脚の上に小柄な志乃を軽々と載せ上げた。

背後から密着した玄齋の身体から少しでも身体を離そうと後手に縛られた両指で玄齋の毛深い厚い胸を掻き拵ったが、それはまるで気にならないように志乃の柔肌を背後から撫でさす

り始めた。

玄齋の熱を帯びた指先が志乃の柔肌の上で蠢き、まるで不快な虫が這い回るような恐怖を覚えて、身体を硬化させた。

親の仇に犯されるという恐怖と羞恥と屈辱に身体を硬化させる志乃の身体を解きほぐす様に淫靡に指を匍わせた。

玄齋の指が身体の全身を這い回り始めて、志乃の性感を捉えたのか、突然ビクッと身体が震えた。

「さて、志乃殿は父上が相手をして当分時間が掛かりそうだから、その間に真之介殿には退屈せぬ様拙者がお相手して進ぜよう・・何しろ精力絶倫の父上は長いからの！」

篤馬が床の上にもう一つの布団を敷きながら、玄齋に抱かれる志乃を見て笑い声を上げ、次に床の上に小さく身体を縮める真之介の方を振り返った。

「武士たるものいつ何時戦場に出ても良い様に常時心構えをしておかなければならない。戦場では当然女を抱く事が出来ないが、股の間が重いままでは充分な軍<sup>いくさばたらき</sup>働<sup>はたら</sup>きは出来ないから、昔から武士という物は男を相手に精を抜ける様に心がけておったものだ。一国の<sup>あるじら</sup>主等は常に周囲に美男の小姓を侍らせているものじゃ。真之介殿にも衆道の楽しさを教えて遣わそう・・」まるで年の離れた兄の様な篤馬が、元服したばかりで全体に幼さの残る真之介の方を向いてニヤリと笑いを浮かべると、真之介の両脚を手にとって抵抗するのも構わず、無理矢理座禅の形に脚を組ませてゴロリと前に転がした。

高手小手に縛り上げられ、自力では座禅に組まれた脚を解けない真之介は、両膝頭と胸を布団に押し付けられた状態で何も身に着けていない尻を篤馬の方に向ける屈辱的な格好を取らされた。

座禅を組んだ形のため膜奥の秘められた所は、あからさまにさらけ出され、仇の息子の前に恥ずかしい所を晒す屈辱感と篤馬から漂う言い知れぬ恐怖感に身体は自然とブルブルと震えるのだった。

「これこれ、<sup>ものふ</sup>武士ともあろう者が何を小娘の様に震えておるのじゃ？」と、小刻みに突き出した尻を震わせる真之介に笑いかけた。

そして、そっとその中心を指で触れた時、ヒィ！と悲鳴を上げて身体をくねらせる様子に大きな笑い声を上げた。

両脚を座禅に組まされ、まるで菊の花のような尻穴が大きく上を向いた格好に満足した様に口の端に笑みを浮かべた篤馬は、

「幾ら何でもこのまま拙者の大きなモノを突き立てたら、真之介殿のこの部分は裂けてしまふからな・・・」

と、傍らに置かれた大きな蛤の貝殻に手を延ばした。

そして、貝殻の上蓋を外すと内部に収められた乳白色のドロリとした油の様な媚薬を指で掬い上げた。

そして、たっぷりと媚薬を塗した指先で真之介の菊花の中心を捉えると、その周囲の皺を一本一本伸ばす様にさすり始めた。

憎い親の仇の息子でありこれまで自分達を騙し通した篤馬に恥辱の箇所を撫でさすられる屈辱に真之介は涙が溢れるのを堪えるように額に皺を寄せて硬く瞼を閉じ、猿轡を嵌められた口の奥でウウッと呻き声を上げた。

そんな汚辱の嵐の中であってもその周囲を撫で擦る篤馬の指の動きは嫌が追うにも知覚させられ、丹念に揉み上げる秘部の周りが妖しげな薬の効果で熱を持って熱く火照り出すのを意識させられた。

何時の間にか、篤馬の指先の淫靡な動きに併せる様に鼻を鳴らしているかの様な喘ぎ声を上げて身悶え始めていた。

「ほらほら・・・こうしている間にも真之介殿の此処が熱を持って柔らかくなって来もうしたぞ・・・」

時間を掛けて真之介の肛門の周囲を柔らかく揉みほぐした篤馬は、頃は充分と更にネットリとした媚薬を中指の指先にたっぷりとすくい取るとそのままズブリと真之介の体内に突き立てた。

篤馬に直腸の中に中指を突き立てられた瞬間、真之介は身体を硬化させてまるで女が男のモノを突き立てられた時の様な悲鳴を上げた。

「こらこら、大の男がこれしきの事で情けない声を出すな！それにしても凄い締め付けではないか。拙者の指先を痛い程締め付けてくるわ・・・」

反射的に締め上げる菊花の輪状筋肉の抵抗に逆らい、楽しそうに笑みを浮かべて、ズブズブと中指を埋めて行き、とうとう指の付け根まで直腸内に押し入れた篤馬は、ほっと息を吐き、次に埋め立てた指先を締め付ける圧力を楽しむ様に真之介の内部を搔き回し始めた。

篤馬の指先の動きを恨めしく感じる様に真之介が額や鼻の頭に汗を浮かべ、呻き声を上げ続けた。

「真之介殿も拙者の指先でかなり楽しまれているようでござるな。おおっ、それに見てみよ！姉上のご様子を！父の愛撫により随分と感じているご様子ではないか？」

座禅転がしの姿勢のまま篤馬の声に思わず顔を上げてしまった真之介は、その目の前に玄齋の膝の上に載せ上げられ背面座位の体勢で、愛撫により全身を紅潮させて身悶える姉の姿を目撃してしまった。

最初は頑なに玄齋の愛撫を拒絶していた志乃ではあったが、まるで自分の身体の弱点を知り尽くした様な執拗な指先の動きは、何かの魔力を含んだ様に柔肌を這い回り、何時しか頑な拒絶の心を打ち破り、女の身体に秘められた性の様なモノを表に引きずり出していた。

これまで千人もの女を相手にして来たと言語する玄齋はその言葉通り女性が感じる全身のツボを熟知しており、志乃の全身から発していた、憎悪と嫌悪と羞恥という硬い瘡蓋の様に全身を覆っていた皮膚を一枚一枚と剥がして行くかの様に拒絶の心を萎えさせ女体の本性を暴き上げて行くのであった。

志乃の身体がのぼせた様に熱く火照り、心臓は早鐘の様に打ち続け、息は荒く速くなって行く事を感じていた。

憎い親の仇に身体を弄ばれるという屈辱感に玄齋の愛撫を拒絶していた自分の心を裏切り身体が反応し始めている事に驚き狼狽する志乃であった。

その効果を助長しているのは先程篤馬から吞まされた酒に含まれた媚薬であったが、心が混乱する志乃には判らなかった。

何時しか玄齋の手が重そうに垂れた志乃の両乳房に及び、その大きな乳房を両手で抱え上げる様にして柔らかく揉み上げ始めた。

「ほらほら、志乃殿の乳首が立って来ましたぞ・・・これは志乃殿のお体を感じている証拠・・・」玄齋が志乃の身体の変化を目敏く見付けて揶揄した。

恥ずかしい身体の変化を指摘されて、羞恥に苛まれた志乃が思わず顔を背けた。

しかし、最早志乃の身体は一線を越えて憎い仇の愛撫の前に蕩け始めていることは事実であった。

固く屹立した乳首を指先で優しく転がす様に愛撫した。

その心地良い刺激が脳髓を駆け巡り志乃は鼻を鳴らしてイヤイヤをする様に首を左右に振っ

て玄齋に背後から抱き抱えられながら小さく身悶えた。

頃は良しと見た玄齋が志乃の両脚に自分の脚を絡めて左右に大きく押し広げた。

玄齋により扇の様に押し広げられた股の中心に女の隠し所が露わとなった。

手持ちぶさたに姉弟の様子を見る惣右衛門や真之介を責め続ける篤馬の目に豊かに繁茂した春草とその下に僅かに垣間見える秘裂が明らかとなった。

陰部を在り在りと晒す姿勢に羞恥を憶えた志乃が股を閉じようとしたが、玄齋の執拗な愛撫に全身に力が入らず、逆に玄齋の両脚に絡め取られた脚を更に押し広げられ、その内部を益々晒して行くのであった。

左手で乳房の愛撫を続けたまま、右手を大きく押し広げた股間に延ばした。

「ほほう・・・志乃殿の女の秘め処がジツトリと熱を帯びて湿って来もうしたぞ・・・」

右手の指先を柔らかく動かして、痴毛を撫でさすり、その奥の秘裂を上下に撫でさすりながら玄齋が呟いた。

玄齋の言葉を否定する様に厳しく猿轡を噛まされ言葉を失った顔を激しく振った。

「嘘だと申すか？これがその証拠・・・」

と、人差し指をゾロリと陰裂の間にはわせた。

玄齋の指が秘部の柔肉の合わせ目の奥に触れた時、志乃の身体には電流が走った様に身体をガクッと震わせた。

随分と感度の良い娘だとほくそ笑みながら、その滲み出た体液を親指と人差し指で掬い取り、志乃の目の前に見せ付けた。

玄齋の開いた親指と人差し指の間には透明な粘液が糸を引いていた。

自分の繰り出す技巧の前に段々と自制の心を失い始めた志乃の反応を楽しむ様に、指先で女の秘密の花園を覆う柔肉を押し広げ、柔らかな襞を一枚一枚開いて行来ながら、最後の秘奥の中心部に辿り着いた。

熱く火照った華洞の入り口を塞ぐ様に懸かった薄い膜を指先に感じ、玄齋がニンマリと笑みを浮かべた。

そして、膜を破らない様に注意しながら、膜の隙間から指をその内部に差し入れた。

憎さ余りある仇の指が自分の女の中に入って来たことを感じて悲痛な呻き声を上げた。

志乃の絶望的な表情を痛快そうに窺いながら、片手で乳房を愛撫し続け、中指を半分程差

し入れ、その熱く湿った内部の様子を楽しんだ。

「おうおうたっぷり濡れて御座る・・・志乃殿の受け入れ準備は充分と見える・・・」

玄齋が差し入れた中指をゆっくりと上下に動かし、志乃の反応を窺った。

太い節くれ立った指が付け根まで埋まり、次にはゆっくりと引き出される度に、自分の腹の前に腰を落とす志乃の身体がビクンビクンと反応した。

「ほほう・・・良い匂いが漂って来おったわ・・・」

何時の間にか玄齋の執拗な愛撫に根負けした様に熱を帯びた股間からは愛液が滴り落ち、磯の香りにも似た芳香が辺りに立ち昇り始めていた。

指を出し入れする度に志乃の熱い豊富な樹液が掻き出され、敷かれた布団の上に滴り落ちた。

「如何ですか？父上！ 志乃殿のその部分は名器の素質が在ると拙者は見ましたが・・・」

真之介の内部に二本の指を突き立て責めながら篤馬が志乃の肉洞内に指を突き立てる玄齋の様子を見てたずねた。

真之介の方は柏木の二本の指で直腸内を蹂躪され、額にビッシヨリと汗を浮かべ、苦悶の表情に顔を歪め最早姉に構う余裕すら無い様に見えた。

指先で志乃の極上の内部をまさぐりながら、ニヤリと口元を弛め、息子の問いに無言で肯いた。

いよいよ全ての準備が調ったと見た玄齋が両手を志乃の腰に掛けると軽々と志乃の身体を持ち上げた。

その高く持ち上げられた腰の下には太く長大なモノが隆々と屹立して天を向いていた。

そして志乃の身体をゆっくりと降ろし、パツクリと開いた亀裂の奥にその先端をあてがった。

その巨大な亀頭の先端が華洞を割って押し入ろうとした時、志乃の身体は硬直して身も世もない様な悲鳴を上げた。

共に天を戴かない仇の手で乙女の命を奪われるのかと想像すると、突然悪寒が襲って歯がカチカチとなり全身がブルブルと震えた。

そんな志乃の悲哀に満ちた姿を気にすることも無く、更に志乃の腰を下に押し下げていった。自分の体重を受けて、鉄の様に硬く尖ったモノが柔肉を押し広げて侵入を始めていた。

秘孔を覆っていた薄い膜がブツブツと音を立てて引き裂かれ血が滲んだ。

長い年月に渡って女の命の宿る場所を守り通してきた皮膜が引き裂かれる激痛に眉根を蹙めて猿轡の奥でくぐもった悲鳴を上げて身を振った。

玄齋は一機に貫き通すことはせず、先ず亀頭の先端部分を柔らかく瑞々しい体内に埋め込んだだけで、志乃の股間を襲った最初の激痛が治まるのを待った。

最初の脳天に突き刺す様な激しい痛みは何時しか低下して行きジンジンする疼痛に置き換わっていた。

志乃の様子を窺いながら、次に玄齋はソロリソロリと亀頭部分全体を緩やかに華肉の中に納めて行った。

鰓の張った玄齋の巨大な亀頭が未通の膣内に突き刺され、志乃は再び肉を引き裂かれる様な激痛に苛まれた。

その大きさに陰洞の媚肉が馴染むのを待って、次にまた少しずつ奥に埋め込むと云う様に、一機に挿入するのではなく、男を知らぬ志乃の肉洞を引き裂いて仕舞わない様に注意しながら埋没作業を続けた。

そんな注意深い行為も志乃にしてみれば、その作業は永遠に続く様な息も止まる苦痛に満ちた時間であった。

「ほほ・・・そなたの姉上も父に責められその華奢な身の内に父の太いモノを収められておりますぞ・・・こちら準備はすっかり調った様であるから真之介殿の初物を頂くとするか・・・」  
今は三本の指を受け入れるまでに開いた真之介の肛口に満足した様に肯いた篤馬は自分の一物にたっぷり油脂の様な媚薬を塗り付け、座禅転がしの姿勢で高く臀をもたげた真之介の背後に押し当てた。

篤馬のいきり立ったモノが自分の肛口を押し開き内部に侵入を始めた時、真之介は身体を硬化させてまるで女の様な悲鳴を上げた。

戦国時代の名のある城主は美男のお小姓を身边に侍らせ自分の性の相手をさせる風習があったが、まるでお小姓の様な端正なまだ幼さの残る美形の真之介の顔が苦痛で歪んだ。

「おお！入って行く、入って行くぞ！」

侵入を拒絶する反射反応による硬く入口を閉ざそうとする筋肉の抵抗を無視して篤馬のいきり立った太い肉塊がズブリズブリと体内に没して行った。

「おお！何という締め付けじゃ！」

とうとう根元まで真之介の肉体内に挿入し終わり、男の筋肉による強い締め付けに強烈な快美感を覚えた篤馬が叫ぶ様に言った。

「どうじゃ？そなたの子袋の入り口に儂のモノが当たっているのが判るか？」

じわじわと志乃の肉洞が玄齋のモノの大きさに馴染んで開いて行くのに合わせて少しずつ挿入して来たので在ったが、とうとう肉茎の先端が子宮口に接触した事を感知して、苦しげに息を吐く志乃の様子を窺いながら尋ねた。

「それにしても流石は手入らずの娘じゃ！儂のモノを痛い程締め付けてくるわ！」

額に汗をビッシヨリと浮かべ苦痛に喘ぐ志乃の表情を見詰めながら、玄齋が感激して声を上げた。

とうとう志乃の体内に玄齋の長大なモノが根元まで埋め込まれた。

胡座座りの玄齋の両膝の間に腰を落とし、背中を預けた座位の姿勢のまま背後から玄齋のモノを受け入れていたので正面から、秘裂を割って醜怪な肉塊が志乃の秘部に深々と埋め込まれている様子が在り在りと映った。

好色そうな目で眺める惣右衛門達に一層良く見える様に、玄齋は志乃の両脚に自分の脚を絡めて一層大きく開いたので、大きく開け広げられた女の花園の中にピッチリと隙間無く挟まっているのが誰の目にも見えた。

つい何分か前まで処女だった志乃が、今は玄齋の巨根を深々と根元まで啜え込んでいる様子に惣右衛門は目を丸くして見詰め続けた。

惣右衛門が好奇の視線を送り続ける先には、玄齋に両脚を絡められて股間を扇の様に広げられた志乃の秘裂が晒されていた。

玄齋の巨根をその付け根まで挿入された志乃の秘孔はこれ以上無い程押し広げられ、女陰の粘膜が限界まで引き延ばされていた。

「おうおう、お主の姉上は吾が父の太いモノを根元まで受け入れて御座るぞ！」

座禅転がしの姿勢で背後から貫き続ける篤馬が真之介の顔を引き起こして、姉の方を向かせて嬉しそうな声を上げた。

「どうじゃ？お主も吾が名刀に刺し貫かれている様子を姉上に見て貰ったら？」

膂力に優れた篤馬が背後から真之介を貫いたまま、羽交い締めにする様に上体に腕を掛けそのまま上に起こすと、胡座をかいた自らの両膝の間に載せ上げた。

自分自身の体重を受けて真下から突き上げられ一層深く突き立てられた真之介の口からウツと悲鳴の様な呻きが上がった。

真之介の座禅に組んでいた脚を解かせ、玄齋が志乃に対してやっている様に自らの脚を真之介の脚に絡めて大きく開いたので、股間が大きく左右に押し広げられた。

篤馬に刺し貫かれる真之介には最早力は入らず、されるがままにだらしなく股間を抜げるのであった。

「どうじゃ？良く見てみよ！姉上と同じ姿勢じゃぞ！」

と、真之介の内部を襲いながら篤馬が腹を揺すって笑い声を上げた。

今や姉弟は僅かな距離を置いて憎い仇の父子に恥辱の部分の背後から突き刺されながら、股間を大きく左右に抜げてその恥ずかしい奥を晒していた。

姉弟の間に立った惣右衛門が淫靡な目で仇の父子に犯される志乃と真之介の様子を交互に見交わした。

「どれ、志乃殿も儂のモノの太さに馴染んだ頃だろう？これから出し入れして遣わそう・・・」  
志乃には背後から刺し貫く玄齋のモノの大きさに息も出来ない程の圧力を体内から感じていた。それはまるで鉄の様に硬く火の様に熱く感じられた。

玄齋の肉塊とこれ以上無い程押し広げられた志乃の膣壁はピッタリと隙間無く密着し僅かに身動きする余地も無いように感じられた。

それをこれから前後に動かすと言う玄齋の言葉を耳にして怯えて激しく顔を左右に振った。そんな志乃の拒絶の表情にも付度することなく、玄齋は志乃の身体を上を持ち上げゆっくりと腰を上下に動かし始めた。

玄齋の熱く硬化したモノが膣壁を擦り上げる感触に志乃は身を振り悲鳴を上げた。

最初はソロソロとした緩やかな動きであったが、志乃の女体がそれに馴染んで来たのを待つて段々と大きく上下させるようになっていた。

鯰の張った玄齋の肉塊により揺き筆られる様な摩擦感に、背後から抱き抱えられながら激しく身悶えた。

玄齋の雁首が志乃のその部分から姿を現す時には、肉洞内の柔らかな粘膜が外に向かって引きずり出され、肉茎が押し入れられる時は周囲の肉を引き摺って内部に押し込まれた。

玄齋のゆっくりとした上下動に煽られ志乃の顔が苦痛に歪み啜り泣く様な声が漏れ出た。

篤馬も父の玄齋に調子を併せるように真之介に対して上下運動を開始していた。

真之介の口からもヒッヒッと悲鳴が上がった。

何時しか志乃の隙間無く密着した肉壁からジワジワと蜜の様な潤滑の液が染み出していた。

出し入れする玄齋の太い陰茎が志乃の身体から滲み出た体液で濡れ光っていることが判った。

「どうじゃ？真之介殿、姉上はあのように楽しんでおられるぞ！我らも楽しもうでは無い

か？」

志乃の変化を目敏く発見した篤馬が、背後から抜き差しをしながら真之介の耳に囁く様に言った。

込み上げる激痛に頭はガンガンと痛んだが、憎い仇の肉塊を女の最も大事な部分に突き立てられながら、息も止まるような絶え間ない苦痛に混じって不可思議な感覚がジワジワと湧き出して来て、それに感じ始めている自分に驚き、抵抗の出来ない悔しさに涙を溢れさせた。

玄齋は背後から突き立てながら、志乃の頬を伝わって流れ落ちる涙を指先で掬って、勝利の快感に浸るようにその涙の味を味わった。

「どうじゃ？辛いかな？苦しいかな？・・惨めよの一！哀れよの一！自分達が仇持ちと知らなければ、自分の父親の死因が病死だと信じ込んでいたら、川田の地で一生安楽に暮らせたものを・・それを知ってしまったばかりに、遙か遠い知る人もいない他国の地に騙されて連れて来られて、親の仇の目の前で、一糸纏わぬ恥ずかしい裸姿にされ抵抗も出来ないよう雁字搦めに縛り上げられて、誰の助けも望めない・・」

志乃の股間に指をモゾモゾと這い回らせ、蕾の様な可愛らしい肉芽を嫌らしく指先で撫でながら、まるで傷口に塩を擦り込むように残忍な言葉で志乃の心を掻き糞った。

「そなた達は、ついさっきまで儂を見事に討ち取って親の仇<sup>あだ</sup>を果たすなどと愚かな夢を見ていたのであろう？・・見事儂を討ち果たして、この首を持って故郷に帰った暁には、孝行な姉弟よ、天晴れな姉弟よと、持て囃されて、弟は藩の重職に抜擢され、そなたも良家に興入れてきて栄耀栄華を極められると思いついた事で在ろう・・哀れよの一、惨めよの一・・親の仇を果たすつもりでおったのが、逆に親の仇<sup>かたき</sup>の立てた計略にまんまと騙され、これこの様に親の仇に新鉢を割られ、げす下郎の商人の前にも自らの恥ずかしい秘め処を丸出しにして深々と突き立てられる浅ましい姿を晒け出しおって・・」

志乃を背後から犯し肉体的苦痛を与えながら、言葉廻りにして志乃に精神的苦痛も与え続けるのであった。

玄齋の卑劣な言葉廻りに、堪えきれなくなった志乃は嗚咽の声を上げ、目から涙がどっと溢れ出した。

玄齋の言葉を耳にしていた真之介も汚辱の肉孔を篤馬から深々と犯されながら悔し涙に咽んだ。

悔しさと辛さに喉を鳴らして涙に咽ぶ志乃に更に畳み掛けるように、

「悔しいであろう？ どうじゃ、悔しさまぎれに、もう一つ更に悔しがる様な事を教えてやろうか？ ・ ・ 儂はな ・ ・ そなた達の母も犯してやったのじゃ！」

今は激しく勢いをつけて志乃の秘裂を突き立てながら、痛快に笑い声を上げて言った。

玄齋の突然の言葉に志乃も真之介もビクッと身体を硬化させた。

「あれは儂が、川田の地から去る最後の晩の事じゃった ・ ・ そなたの母が、 ・ ・ 確か八重殿と云ったな ・ ・ 藩に病死と届け出たので儂は役人の追及を受ける事は無かったが、このまま川田に留まる事も出来ず、別の地に進路を目指すことにしていた。行き掛けの駄賃と儂が川田の地を離れる原因となったそなたの家に深夜押し入り、祭壇に向かい一心不乱に経を読むそなたの母を襲い、そなたの父の霊前で存分に犯したのじゃ！」

父を殺めたばかりでなく、母まで手に掛けた玄齋に今こうして背後から犯されている事が判り、怒りと衝撃に志乃の目がカッと見開いた。

真之介も怒りで身体を悶えさせ篤馬から逃れようとした。

「そなたの父はこちらの方は至って淡泊だった様で、そなたの母に女の喜びと云うものを教えた事は無かった様じゃった。所が儂は違うぞ！ 腕に寄りを掛けてそなたの母を抱き、充分に女の喜びを与えてやった。そなたの母にとっても、そなたの父からでは決して得られない生まれて初めて味わう至福の時であったろう ・ ・ 最後は霊前にも拘わらず、髪を振り乱して大きな声で喜悅の声を上げるようになりおったわ！」

と、その時の事を思い出しながら玄齋が得意そうに笑い声を上げた。

玄齋の言葉に呻き声を上げて身を振った。

姉弟の身体を弄ぶだけに止まらず、死んだ父母まで辱める玄齋の陰険さに歯がみをするように悔しがるのであった。

一 弔問客も全て帰ってしまい周囲も寝静まった深夜、広間に設けられた薄暗い斎壇に向かい、一人霊前に佇み線香の火を絶やさない様に寝ずに故人のために夜伽して、一心不乱に経を上げる黒い喪服姿の若い女の後ろ姿が思わずゾクッと背筋を突き刺した。

武家の女房らしく端正に結い上げられた髪と喪服の襟足から延びた白いうなじを思わず見詰めると、息を呑む程の色香を感じさせた。

何の恨みもない、それどころか実現しなかったとは言え、自分のために親身になって働いてくれた恩人と言っても良い男を斬り殺し、今又その恩人の妻を犯そうとしている自分は、最

早人間ではなく、人を捨てた悪魔に違いないと思うと何故かゾクゾクするような背徳の快美感が股間から背筋を突き通し脳天を直撃する様な衝動を感じるのであった。

何度か訪れる度に見知っていた白百合にも似た清楚な美人で、凜とした気品を漂わす、武家の女房の鑑と畏怖の念さえ抱いていた内儀を今この手で穢すことが出来ると想像すると股間が痛い程緊張するのを覚えた。

気配を殺して音を立てずに八重の背後ににじり寄ったが、故人の冥福を祈って一心不乱に経を読む女には気が付か無い様であった。

ジリジリと忍び寄り、手を伸ばせば届く所まで女との距離を縮めていた。

流石に異様な気配を感じて後ろを振り返ろうとした瞬間、一瞬速く尾幡権八郎の手が女の着物の襟に掛かり、怪力にものをいわせて襦袢ごと一機に喪服を引き下ろした。

さつきまで清楚な着物に覆われていた両肩が露わとなり、剥き出しとなった胸元から豊満な乳房がほとんど飛び出そうであった。

まだ身体の大半を覆っている黒い着物からさらけ出された絹のように艶やかな白い肌が目に焼き付いた。

突然の事態に驚愕して悲鳴を上げることも忘れた女が恐怖の表情を浮かべて権八郎の方を見つめた。

まるで蛇に睨まれた蛙のように怯えたその目の色に権八郎の嗜虐の心がムラムラと燃え上がった。

女の背中を足蹴にして、乱暴に前に転がすと臀を高くもたげたまま祭壇の方に倒れ込んだ。脇腹まで無理矢理引き下ろされた喪服と下着が女の両腕を縛り上げたように拘束し、まるで縄で縛り上げられた様に両手の自由を奪っていた。

突然の事態に動転し、身悶えるように不自由な身体を蠢かせて権八郎の手から逃れようとする女の両足首をムンズと驚掴みにした。

両手で女の両脚を掴んだまま女の身体を自分の方に引き寄せると、そのまま女の身体を上を持ち上げた。

六尺以上の巨漢の権八郎が両腕を頭の上に伸ばせば、小柄な八重の身体は容易に空中に逆さ吊りの姿勢となった。

逆さ吊りになった女の足首を掴んだまま女の身体を揺さぶり、抵抗する女の脚の力を排除して両脚を開かせていくと、ズルズルと喪服は下に垂れ下がり、腰巻きは開いて下に捲れ上がっていった。

権八郎の直ぐ目の前で成熟した八重の白い脹ら脛が先ず現れ、そして大腿が徐々に露出していった。

突然襲い掛かった恐怖と、自分の夫を殺害した男から与えられる恥辱に、ほとんど捲れ上がった着物に顔を埋められた口からヒッヒッと短い悲鳴が上がり続けた。

今や権八郎に両脚を大の字に押し広げられ逆さ吊りにされた八重の下肢は、足裏を覆う白い足袋を除いて脹ら脛から太股の奥まで露出し、たつぷりと脂肪を置いた柔らかな尻までが丸出しとなっていた。

女の両脚を握る両手に力を入れて、これ以上開かない程女の股間を押し広げた。

白く柔らかな肉を置いた大腿の付け根部分には成熟した女の花園が広がっていた。

仄暗い蠟燭の灯りの下で、艶々とした黒い繁茂とその狭間からうっすらと垣間見える桜色の媚肉の影が権八郎の野蛮な獣性を掻き立てた。

扇の様に広げた股間の中心に顔を押し付け、鼻先で下草を掻き分け、秘裂を左右に開くように押し分けると、露わになった秘部に顔を埋め、二人の子供を産んだ熟した女性器の咽せる様な香りを胸の奥まで吸い込んだ。

鼻腔から逆流する権八郎の熱い鼻息が八重の羞恥の部分に吹き掛かると、人には決して見せるはずのない女の秘め場所を野蛮な男に目視されていると言う状況を自覚させられ、思わず羞恥が込み上げ、その刺激に反応して秘部に血流が集結してカッと熱を帯び始めるのを感じた。

成熟した女の濃厚な性臭をたつぷり吸い取って満足したかのように権八郎は、次に舌を前に突き出して、剥き出しにされた花園の中心をゾロリと撫で上げた。

夫にも受けたことのない微妙な箇所への舌先による愛撫に、八重はヒッ！と悲鳴を上げて身体をビクッと痙攣させた。

自分の舌先による攻撃が女の快感に継がる琴線に触れた事を覚った権八郎は嵩に懸かった様に女の股間に舌を匍わせ、熱心にこの女の感じるツボを探すように剥き出しの股の間を嘗め回した。

権八郎の執拗な舌使いに八重は堪らず身をくねらせヒィヒィと悲鳴を上げ続けた。

舌先を駆使してふっくらと丸みを帯びた陰唇を押し開き、その奥の柔らかな襞を優しく左右に掻き分けたり、剥き出しにされた肉の蕾に口唇を押し付け、口内に含んで優しく吸い上げたり、時には蟻の戸渡りを越えて後ろに舌を匍わせ、肛門の周囲を撫で回したり、女の反応

を見定める様に責めて回った。

女も何時の間にか最初の恐怖に怯える悲鳴から、権八郎の熟達した性技をまともに受けてアッアッというような身悶えるような悲鳴へと代わっていた。

たつぷりと時間を掛けて秘奥の周りを嘗め上げ、頃は良しと舌先をすつかりと柔らかくなった秘孔の奥に滑り込ませた。

捲れ上がった着物に埋もれた顔からヒーッと断末摩の様な悲鳴が上がった。

二人の子供を産んだことのある産道は、さしたる抵抗も見せず権八郎の舌先を受け入れた。これまで幾多の女に歓喜の涙を流させた熟達した舌技を前にして柔らかく開花した肉洞の内面を一杯に延ばした舌で味わった。

権八郎に女の急所を責め上げられ、八重は、もうお許し下さい・・・もうお許し下さい・・・と譖言の様に啜り泣きながら小さく言い続けていた。

長時間逆さ吊りの状態で、脳に血が逆流し鬱血する苦しさに、意識も朦朧となっているはずであり、怒りや羞恥心も混濁した意識の中で薄れ、ただ本能的に哀願の言葉を並べ始めると感じた権八郎であったが、膣孔奥深く延ばした舌先にドロツとした濃厚で甘美な樹液が湧き始めている事に気付いた。

これまで幾人もの女を抱いて来た権八郎は、女の中には男から残酷に扱われる程、身体を燃やす女が居ることを経験で知っていたが、この八重と云う名の慎み深い武家の女房もそのたぐいの女ではないかとニヤリとほくそ笑んだ。

長時間の逆さ吊り状態と異常な事態に正常な意識を喪失したままの女の身体を下に降ろした。着衣が乱れ艶やかな臀丘まで下半身を剥き出しにしたままグッタリとした女の着物に手を掛けた。

まだ正常な意識が戻らないのかグッタリとして無抵抗の女から帯を弛め抜き取ると、清楚な喪服に手を掛けた。

喪服には香を焚きしめたていたのか女の身体から立ち昇る典雅な香りが鼻に衝いた。

それは先程股間を押し広げて嗅いだ、熟した女の艶めかしい濃厚な匂いと大きく対照的な匂いであった。

権八郎の足下には乱れた肌襦袢と腰巻きだけを僅かに身に纏う女が横たわっていた。

肌襦袢を剥ぎ取ると、張りのある豊満な乳房が溢れ出た。長い間ズリ下げられた衣類により拘束されていた両腕に紫色の跡が残っていた。

ムッチリとした弛みの無い臀肉を剥き出しにしたままの状態最後まで身に着けていた腰巻

きの紐に指を掛けた時、女の意識が蘇った。

何時の間にか着衣を脱がされ腰巻き一枚の姿で夫の仇の前に裸身を晒すという異常な事態に引き攀った悲鳴を上げて権八郎の手を振り払った。

そして、下半身を隠すという機能を喪失したままの捲れ上がった湯文字を引き摺りながら、夫の亡骸に助けを求める様に斎壇に這い寄った。

肉付きの良い二つの尻の丸みを権八郎の目に晒しながら斎壇に取りすがり、権八郎の魔手から逃げようとする哀れな姿を晒す八重の姿を目にして権八郎は淫靡な笑いを浮かべた。

そして半身を起こした姿勢で亡き夫の遺骸を収めた棺に取りすがり泣きじゃくる女に歩み寄ると緩んだ湯文字を女の腰から強引に奪い取った。

憎い夫の仇に全裸に剥かれて八重は、あなた助けて！あなた助けて！と死んだ夫に助けを求める様に引き攀った悲鳴の様な声を上げ続けた。

人は死んでも魂は<sup>とど</sup>留まり続けているものであろうか？それなら儂に斬り殺されたこの男は、今自分の妻が、自分を斬り殺した男に強姦されようとしている姿を棺の中から見ているのであろうか？と、思うと何故か全身がゾクゾクする様な異様な快美感に襲われ、裸身を晒す女に武者ぶり付いた。

斎壇に上半身を預けただけで畳の上に横たわる女の身体に馬乗りになると、両の手で豊満な乳房を握り締めた。

ひい！と喉を引き絞るような声が上がった。

権八郎は袂から、短く竹を切ってその中に革紐を通した緘口具を取り出すと、八重の口をこじ開け、噛み込ませて猿轡から伸びた革紐を後頭部で縛った。

何時もこの家を訪問する度に應對に出たこの女房の姿を見ては、この世に何人も居ない実に美しい顔形だと見惚れていた権八郎にとって、青竹を口に噛み込まされ苦痛と恐怖に歪んだ女の顔から又別の色香を感じるのであった。

そして、脱ぎ散らかされた女の着物から帯紐を手にとると、女の両腕を力尽くで背中にねじ曲げ、後手に縛り上げた。

権八郎の怪力を持ってすれば、女の抵抗を力で封じ、犯すことなど容易な事であったが、権八郎の変態趣味は、縛り上げて身動きの出来ない女と強制的に交わることであった。

女の背に馬乗りになったまま全ての仕事を終わると、落ち着き払った様に再び剥き出しとなった女の柔肌を撫で回し、口唇で愛撫を始めた。

権八郎の嫌らしい手指や口唇が柔肌に触れる度に、まるで焼け火箸を押し付けられた様に八

重の身体がビクンビクンと痙攣した。

時間を掛けて八重の背中や腰尻周りの性感帯を丹念に愛撫した後、俯せの女をゴロリと仰向けに変えて、胸や下腹の性感にジックリと愛撫した。

絹のようにきめ細かい肌は、権八郎のがさついた手をしっとりと包み込むように柔らかく滑らかであった。

そして優しく丁寧に愛撫を続ける内に、嫌悪感も麻痺し始めたのか、女の肌は湿気を帯びたようによりしっとり感を増し、暖かく温もりを発する様にした。

心では拒絶しても、憎らしい程巧妙な権八郎の愛撫の前に熟れた女体はその本能を現し感じ始めているのか、うっすらと全身に汗を浮かべ体温が上昇してくるのを感じた。

女の口から漏れる悲鳴も何時しか、恐怖に怯える引き攣った悲鳴から、ハアハアと何かに甘える声の様に聞こえていた。

この女はこれまで夫からこの様な丹念な愛撫を受けたことは無いのだろうか？と思った。

そして、もう一つ、この女が被虐の悲しみを性的快感として感じる事の出来る種類の女ではないか？と思った。

これらの疑問に対して答えが出るのも後僅かだと感じていた。

成熟した女の身体から立ち昇る牝の匂いが、権八郎の鼻腔を刺激した。

仰向けに横たわる八重の上に覆い被さるように両手と口唇を駆使して愛撫を繰り返していた権八郎が遂に股の間の秘境に手を差し入れた。

これまで長時間に渡って、下腹や大腿などまるで外堀を埋めるように刺激され続け、その部分は焦らされたように熱く火照っていた。

仰向けに横たわった女の大腿を大きく左右に押し広げても、最早逆らう気力も脚を閉じる力も喪失したのか男の力の前に易々と股間を開き淫らな秘奥をマザマザと晒した。

権八郎が太股に手を掛け股間を押し開く間、女は逆らえない運命と覚ったのか、目に大きく涙を浮かべてイヤイヤをするように激しく首を振り立てたがそれ以上の抵抗は最早示さなかった。

権八郎は開け放たれた股間の中心に顔を近づけ、両手と口を駆使して、丹念にそして執拗に女の泣き所を責め上げた。

熟達した権八郎の女責めに晒され嗚咽が一層激しくなった。

武士の妻としての貞淑な心を裏切り、女の性の本能を呼び起こされたかのように、肉の襲は

汗ばみ充血し、可憐な木の芽は権八郎の目の前で屹立しその姿を晒していた。

今や権八郎の手管の前に屈した女体は秘奥を熱く火照らせ、充血し、艶めかしい匂いを立ち昇らせていた。

大きく開いた秘園の狭間から姿を現した、小豆の粒の様な肉芽を口中に含み、右手の中指を火照った秘奥の中心に突き立てた。

その瞬間ウツと呻き声を上げて八重の身体が弓なりに反った。

権八郎が差し入れた肉の洞窟の中は、暖かく湿り、それを待ちかねていたかの様に大きくうねって指を迎え奥へ奥へと誘うように差し入れた指を締め上げた。

その肉壁の動きと呼応するように熱い樹液が滲み出て来た。

どんなに心は拒んでも、これまでに何人もの女を泣かせてきた自分の技の前には無力なものよ、と秘裂の奥を撫で回しながら権八郎が淫靡な笑みを口元に浮かべた。

「お内儀、恥ずかしく無いのか、夫の霊前でこれこの様に滴らせて・・・棺の中から夫が見て御座るよ・・・」と、笑い掛けた。

権八郎の言葉通りに一瞬、身体を硬化させてたじろいだが、夫の仇から加えられる暴虐の嵐の中で、心を裏切り肉欲に走り始めた身体は、最早止める事は出来なかった。

愛液を外部に向かって滴らせ始めた華洞から指を抜いた権八郎は着物の前を押し開けて、いきり立った自分のモノを取り出し、八重の目に見せ付けた。

自分の夫のモノしか、それも慎み深い武家の女房として直接目にする事はばかり、房中で下腹に触れる感触でしか知らない八重は、夫のモノと比較すると余りに大きな怒張を目の前にして青ざめ、引き攣った悲鳴を上げた。

やはりこの夫のモノは儂のモノと比べ様も無い程小さかったのであったのだろうと八重の反応から確信して、満足げに微笑むと、その巨大なモノで串刺しにされるという恐怖感で身悶える女の濡れそぼる中心部に押し当てた。

女は、どうにもならない現実を前に、泣きじゃくりイヤイヤをするように激しく首を左右に振り立てた。

「それでは、お内儀もお待ち兼ねの様だから、頂かせて貰うか・・・」

仰向けに横たわる女の秘裂に怒張を押し当てたまま女の身体に覆い被さって行った。

女の口から断末摩の悲鳴が上がった。

ズブズブと女の秘め処に背徳の快感に酔い痴れ興奮の余りこれ以上無い程膨張したモノを埋

め込んで行きながらオヤツと感じた。

自分のこれまでの経験では何人も子供をもうけた熟女のその部分は締まりを失い、その内壁もまるで竹輪の穴のようにツルツルの面白みの無いものであったが、この女のその部分は、まるで未通女のその様に自分の分身をきつく締め上げて来た。

そして肉洞の内部の幾重にも畳まれた柔らかな襞は十分な潤いを持って、権八郎のモノを包み上げ得も言われぬ様な快感をもたらした。

この女は、これまで余り多くの回数、夫とまぐわった事は無いのだろうか？と、想像した。あの生真面目だけが取り柄の、人の裏にある機微を理解出来ない不器用な男らしいと感じた。恐らくあの男は、単に子孫を残すためだけに妻とまぐわい、前技もそこそこに突き立てて、射精し、子種を妻の胎内に植え付けるとそれだけで満足して終了してしまい、自分の妻に女の喜びを云う物を教えることは無かったのではないか？

それが証拠にこの女のこの部分はほとんど未通女の様に開発されておらず、強い締め加減もざらつく内部もまるで初夜の女を抱くようだと感じていた。

それなら、この未通女も同然の熟女に女の真の喜びと云う物を教えてやらねばなるまいと、ほくそ笑みながら思うのであった。

権八郎の執拗な前技により押さえも効かず燃え上がった身体は、これまで幾多の女に随喜の涙を絞らせて来た自慢の肉棒により蹂躪され尽くした。

権八郎の豪刀は鉄の様に硬く火の様に熱を帯びていたが、単に単調に女肉を抉るだけでは無く、その先端で子宮口をコツコツと突き上げ、雁の張った鰓の部分で内部の柔らかな襞を掻き筆った。

甘美な熟女の身体を味わい尽くす様に、権八郎は八重の心臓部を長い肉塊で貫き通したまま、上になったり、後ろから突き立てたりと次々と責め続けた。

いつしか権八郎の巧みな手管により、女の顔は紅潮し、甘い啜り泣きの様に鼻を鳴らし始めていた。

最早舌を嚙んで自害する意志も喪失していると感じた権八郎は、女の口を塞いでいた竹製の猿轡を外した。

自由になった口からハアと甘い溜息が漏れた。

「どうじゃ？お内儀、感じているであろう？」

八重の上に覆い被さり、腰を抜き差しさせながら尋ねた。

女は顔面を紅潮させ、ハアハアと荒い息を吐きながら、眉間に皺を寄せ苦しげに下唇を噛みしめながら無言で首を左右に振った。

「嘘をついても判るぞ！そなたのここは精一杯口を拵げて儂のモノを根元まで頬張り、儂のモノを思い切り喰い絞め、儂が腰を動かす度に暖かい露を吐き出しておるではないか？」

権八郎の言葉通りに組み敷かれた八重がイヤイヤ・・・と力無く首を振った。

下に組み敷く女の両脚を掴むと、扇の様に思い切り左右に押し広げた。

その股間の中心を幾多の女に歓喜の涙を溢れさせた褐色の醜い肉塊が、深々と刺し貫いていた。

「見られよ！お内儀！儂のモノがそなたの大事な秘め処を貫いているのが見えるであろう？」

覆い被さっていた身体を起し、女の両脚を肩に担ぎ上げる様にして、女の上体を引き起こして結合部を見せ付ける様にした。

「アア・・・イヤ！お許し下さい・・・」

これまで夫にしか許した事の無い女にとって最も大切な部分を、夫の仇である獣の様な男に蹂躪されている姿を見せ付けられ、哀しげな声を上げた。

実際、成熟した女である八重は男女の交接による肉体的快感というものをぼんやりと知覚するようになっていたが、夫はそんな妻の期待に全く無頓着であり性生活は驚く程淡泊であった。

月に数度も無い睦事でも良人は何回か腰を使うと早々と射精してしまい、サッサと性交を済ませてしまうと一人寝息を立てるのが常であった。

夫との房事に肉体の興奮は否応なく昂かめられたが、そんな八重の肉体的変化に夫は気付くこと無く、中途半端に燃え上がった状態で突き放され、やり場の無い肉欲の疼きに苛まされる—そんな状態に何時も熟れた女体は満たされないものを感じていたが、貞淑な武家の妻として夫に求める事ははしたない事と、ずっと心の奥に秘めていたのであった。それがこの獣の様な男により心の殻を打ち砕かれ、奥に秘めた恥ずべき肉欲を白日の下に引き吊り出されようとしている事に恐怖を感じるのであった。

「どうじゃ？夫を斬り殺した男に今腹苛まれ、しかもその上、亡き夫への貞節も忘れ果て身体はどうしようも無く感じてしまっている・・・」

女の両脚を肩に担ぎ上げた姿勢で深々と女の華肉をむさぼり、粘っこく両乳房を揉み上げ、

激しく腰を突き立てながら、自分の心を残酷に言葉廻りで抉り続ける権八郎を悲鳴の様な否定の叫びで制した。

「嘘を吐いても駄目だぞ、この恥ずかしげな肉擦れの音が聞こえるだろう・・・こんなに乳首もおっ立ておって・・・」

権八郎が女を責め立てながら薄ら笑いを浮かべて言った。

権八郎の言う通り、今や権八郎のモノが入り出る華洞からは、溢れ出した豊富な愛液が太い肉茎により掻き回されるグジュグジュと淫猥な音が響き、権八郎に撫で回される乳房の先端では乳首が痛い程尖っていた。

それは、今までの夫との交接では経験した事の無い、未知の肉体反応であったが、女の本能で、自分の肉体が浅ましく男の身体を求めている事を痛切に教えられた。

「アアーッ！もう、切つう御座います・・・もうお許し下さい・・・」

今や権八郎の術中に落ちた女が鼻を鳴らす様に切なげな声を上げた。

「そう云う時は、イキます、と言うのだ！・・・どうじゃイキそうか？」

権八郎の問いに女が顔面を朱に染めて、激しく首を縦に振った。

肉欲に屈した女の初めて見せる素直な態度に権八郎はニンマリとほくそ笑んだ。

そして、権八郎の分身がもたらす快美感に身を委ねて、今や汗塗れになってフーフーと荒い息を吐く女にトドメを刺す様に一層腰の動きを激しくするのであった。

八重の口から一瞬クッと云う様な呻き声が上がって、権八郎のモノを喰い絞める身体をグッと硬化させた。

「どうした？八重殿、いったのか？」

八重を追い上げた権八郎が意地悪い目付きで、昇り詰めた絶頂の余韻に浸る八重の頬を優しく叩きながら尋ねた。

権八郎により初めて与えられた女の喜びの至福感に酔った様に物憂げに目を開けると、恨みがましい目付きで自分の身体に覆い被さる権八郎を見詰めて、頬を赤らめ小さく肯いた。

ウツトリと女の顔を見詰めたまま、赤い小さな唇に自分のガサついた唇を重ねた。

すると驚いた事に女の方から強く唇を押し当てて来たので、思わず舌先で女の唇を押し開き、女の口内に押し入り甘美な唾液を啜った。

まるで蕾が弾けて可憐な花卉を咲かせた様に恥じらいの素振りを見せながら、素直な態度を示す様になった八重を権八郎は愛おしく感じた。

そして、権八郎の肉塊を啜えたままの華洞は、暖かく湿りまるでその男の肉棒に縋る様にピ

クピクと蠕動しながら奥へ奥へと誘う様に感じられた。

これまで何百人という女を抱いて来た権八郎であったが、八重の身体は五指に入る身体だと感じた。

その極上の女肉を貪り尽くしたい欲望に駆られ、再び腰を激しく動かし始めた。

恥ずかしい絶頂の姿を憎い男の目に晒してしまった八重は、突き抜ける様な快美感に身を委ね、すっかり混沌とした意識は、夫の仇に抱かれていることも忘れ果てたのか、権八郎の手管に煽り立てられ、扇情的な涕泣を漏らすのであった。

一度真の女の喜びを覚えた女体は、激烈な権八郎の腰の動きに煽り立てられ、一度目よりも激しく燃え上がりヒィヒィと甘い悲鳴を上げ続けた。

途中何度も連続する小さな山の頂を越える様に絶頂に達し、その都度歓喜の声を上げた女が、今最後に秘められた未踏の高山の頂に権八郎の追撃により追い上げようとしていることが判った。

「どうした？もうイキそうか？・・イクと言え！」

「ああ・・もうイキます。アアッ！イク！イク！」

権八郎に煽られ、武家の女房なら決して口にすることは無いであろう、下品な言葉を口走り、身体を海老の様に反らせた。その瞬間、膣孔の奥深くから熱い迸りがどっと溢れ出て権八郎の亀頭を洗った。

余りの気持ちの良さに権八郎も自制を忘れて、八重の胎内に熱い迸りを噴出した。

八重の膣壁がグッと収縮して、放出された精液を逃すまいと奥に抽送するように蠢いた。

激しい絶頂を極め、少し落ち着きを取り戻し始めた八重を見詰めながら、

「どうじゃ？判るか？今儂は八重殿の腹の中にたね胤を植え付けたぞ・・」

と、卑猥な笑みを浮かべながら囁く様に告げた。

ゆめうつ夢現の状態に在った八重の顔が見る見る不安で青ざめて行くのが判った。

そして権八郎に組み敷かれ秘裂に突き立てられながら、必死に逃れようと身体を蠢かせた。

夫との淡泊な睦み事でも懐妊した女だから、何度も絶頂に達した濃厚な交接の方が懐妊する可能性は高いと思った。

この武家の女房の鑑の様な女が憎い仇の子を孕んだと知ったら、どれほどの衝撃を受けるだろう？と権八郎の残忍な心が顔を覗かせた。

それならこの後も徹底的に八重を責め上げ、確実に妊娠させたいと思う権八郎であった。

自分の体力なら一晩に五度や六度の射精は出来る自信があった。

一旦八重の身体から未だに隆々とした肉塊を引き抜くと、夫の眠る棺に上体を擡げるように体勢を取らせた。

後ろ手に縛り上げられ、顎と胸を棺の上に載せた不自由な姿勢のため、ムッチリと張った艶々とした双臀は権八郎の方を向いていた。

その二つの張りのある双丘の間の仄暗い狭間には、これまで絶対人に見せたことは無いであろう、二つの恥ずかしい穴が権八郎の目の前に丸出しの状態になっていた。

長時間に渡って責め続けられた下の穴はザクロの様にパツクリと弾け、その奥から権八郎と八重の愛液が混じり合ったドロリとした液体が滴り落ちていた。

権八郎の劣情を悟った八重が腰をくねらせ絶望的な悲鳴を上げた、

憎い仇の前に悲痛な鳴き声を上げて尻を振り立てる扇情的な眺めに挑発された権八郎が背後より、犬の様に八重に突き立てた。

武家の女房としてこれまで経験した事の無い獣の様な体位の交接に、激しく背後から突き立てられながら羞恥の悲鳴を上げ続けた。

激烈な羞恥心とそれ故に一層掻き立てられた猛烈な快感が緋い交ぜとなって八重を襲い甘美は泣き声を上げ続けた。

獣の様に激しく背後から突き立て八重の快感を煽り立て続けた。

背徳の交接姿勢に八重の快美感は一層激しいモノとなり、今は何も判らなくなった様に権八郎の腰の動きに併せて自らも腰を振る様になっていた。

権八郎に強要されて武士の妻として在るまじき下品な言葉を叫び続けさせられた。

「孕め！孕め！憎い仇の子を、農の子をその腹の中に孕め！」

権八郎が激しく腰を振りながら、恐ろしい呪文の様に叫び続けた。

やがて激烈な濁流に呑み込まれる様に八重が再び絶頂を迎えた。

それと息を合わせる様に権八郎も再び八重の胎内に思いの丈を奔流の様に放出した。

その後も霊前にも拘わらず、権八郎は思いつくままの卑猥な姿勢を八重に取らせては、激しく衝き上げて、何度も八重の胎内に激しく射精を繰り返した。

貞淑な女の仮面を打ち砕かれ、野生の女の本性を剥き出しにされた八重はヒィヒィとヨガリ声を上げながら、髪を振り乱し権八郎のモノを受け入れ続けた。

女の本性を丸出しにして何度も絶頂を極めた女が、完全に意識を失って霊前に横たわってい

た。

権八郎から与えられた女体責めが如何に激烈であったのか物語るように、いまだに腰はピクピクと痙攣してその余韻を留め、だらしなく開け放たれた股間を閉じることも忘れた様に、故人の慰霊に向かって蹂躪され尽くした秘奥を明白に晒し、その奥に秘めた最も女で有ることを証明する肉の孔からは、ドロドロと得体の知れない樹液を垂れ流していた。

陸に打ち上げられ魚の様に口をパクパクさせて、死んだ様にグッタリとする八重の傍らに腰を降ろした権八郎は、軽い疲労感を感じながら、その猥褻な姿を眺めていた。

しばし、全裸で横たわる八重の扇情的な姿を眺めていた権八郎は、再び残忍な考えが浮かんで腰を上げた。

そして、この家に忍び込んだ時に持参した麻縄の束を畳の上に置くとそれを解いて、死んだ様に意識の無い八重の身体に縄掛けを始めた。

グッタリとして意識の無い八重は権八郎の思いのままに縛り上げられていった。

やがて、うっすらと意識を取り戻し始めたのか、気弱なか細い声で、

「ああ・・・何をなさっているのですか？」

と、高手小手に縛り上げ、縄止めを済ました権八郎に問い掛けた。

上半身をカッチリと縛り終えて権八郎は八重の身体を持ち上げる様に無理矢理立ち上がらせた。

まだ意識が混濁する八重の身体は危なっかしくフラフラと左右に揺れ権八郎が支えていないと倒れてしまいそうであった。

権八郎により緊縛された上半身は、柔らかく豊かな乳房の上下を二巻き三巻き縛り上げ、豊かな乳房を前方に向かって絞り出していた。

唯の裸身より縄掛けすることにより、一層扇情的な姿になったと八重の緊縛された姿を見詰めて権八郎が淫靡な笑みを浮かべた。

上半身の固縛を終了すると、ひときわ太い麻縄を取り出し扱いた。

ぐるりと腹の周りに縄を掛けると臍下の部分で横に渡した麻縄に絡げて前に垂れさせた。

だらりと垂れた縄を捩り合わせ縄尻を握り締めると、今は蘇った羞恥心によりピタリと閉じた脚の間を通して後ろから引っ張り上げた。

固く閉ざした太股の間を毛羽立ち荒くれた太い麻縄が割ってくる苦痛に悲鳴を上げて身悶えた。

権八郎の怪力により股間を突き通された麻縄は女陰を深々と割ってその柔肉の間に埋没し柔

らしく垂れた尻肉の間を挟る様に通されていた。

縄止めを済ませた権八郎が満足そうに肯いた。

まるで縄で作った禪の様な股間を通る縄には大きな瘤が作っており、八重の微妙な箇所を深々と挟っていた。

こうすれば、歩行の間も燃え上がった八重の身体は、冷めること無く肉欲の疼きを感じ続ける事だろうと思った。

権八郎により無理矢理立ち上がらせられた時、八重の股間を縦に通った縄が刺激し、ウッと切ない呻き声を上げた。

こうして、歩行も覚束ない八重の身体を支える様に祭壇の置かれた広間から廊下に出た。

権八郎に掴まれる様に身体を支えられ歩む八重は、股間に作られた意地の悪い瘤の効果を感じ知らされるのであった。

これまで何度か笹川家を訪問していた権八郎には、家の間取りに関しておおよそ見当が付いていた。

そして、八重には幼い女と男の子がいることも知っていた。

権八郎に引き摺られる様に廊下を歩みながら、この男は幼い我が子が眠る部屋に連れて行くようにしている魂胆が判り愕然とした。

八重の狼狽ぶりから、幼い姉弟が眠る部屋が何処に在るのか権八郎に判った。

障子をそっと開けると、小さな布団が二つ敷かれその中で幼子がスヤスヤと寝息を立てていた。

この男は夫の霊前ばかりか子供の目の前で自分を蹂躪する積もりだと判った八重が必死に抵抗したが、上半身をカッチリと緊縛された身体を大男の怪力により無理矢理部屋の中に押し込まれた。

幼い姉弟が眠る布団の前に八重を正座させた。

腰を降ろした時に、股間を責め続けていた立て縄がイヤらしく効果を発揮し、思わずウッと声が上がった。

スヤスヤと寝息を立てる子供達の直前で厳しく縛められた八重の身体を背後から再び愛撫し始めた。

一度は子供達の前に引き出され冷めてしまった八重であったが、権八郎の巧みなそして執拗な愛撫により身体奥深くの残り火が再びメラメラと燃え上がり始めていた。

心では逆らっても熟れた女の身体は権八郎の前に順応し始めていた。

恨めしそうな、そして悩ましそうな呻き声が八重の口から漏れていた。

嵐の様に吹き荒れる懊悩する性欲の中で僅かに残った理性が、歓喜の声を発して眠っている子供達の目を覚ましてしまい、浅ましい母親の姿を晒す事になるのを恐怖して、何とか声を上げるのを耐えた。

そんな健気な努力を嘲笑う様に熟達した権八郎の手技は確実に八重の熟れた女体を燃え上がらせていた。

浅黒い縄に括り上げられ表に向かって思い切り飛び出していた豊満な乳房をゆっくりと時間を掛けて揉み上げた。

切なく男を求める肉体が乳首を固く屹立させ、その陶醉感に誘発され股間に目覚めた木の芽をささくれ立った股縄が刺激した。

もじもじと太股を振り合わせる八重の変化に気付いたのか、うっすらと笑みを浮かべた権八郎は燃えさかる竈の様に熱を帯びた股座に手を差し入れた。

固く閉ざしていた股間に権八郎の進入を受け、まるで電撃を受けた様に八重の意識が白くなった。

ぐったりとした八重の体を抱きかかえながら、権八郎は次々と残酷な想いを巡らした。

眠りこける幼い娘の枕元に八重の体を運び、女の両足に自分の脚を絡め左右に思い切り押し広げた。

こうすれば娘が目を覚ました時、濡れそぼった母親の女陰が直ぐ目の前に在ることに気付くだろう・・・

これ以上無い程押し広げられた股間の中心を残忍な縄が深々と抉っていた。

権八郎は縦縄を握り締め前後に揺すった。

隙間無くぴっちり秘裂に密着していた股縄が陰核や秘園の柔肉を責め立て、その激しい衝撃が股間から背筋を通して脳髓まで駆け上り、八重の身体がビクンビクンと反応した。

股縄の責めの前に荒い息を吐き悶絶する八重の背後に腰を落とす権八郎は手を伸ばして股間の様子を指で確かめた。

今目の前に眠る子供達を産み落とした産道を閉ざす様に半ば埋め込まれた大きな縄の瘤は八重の女陰から沁み出した陰液によりネットリと濡れていた。

そのまま縄の瘤に指を添えて掻き回すと、耐えに耐えていた八重も限界に達したのか身体をビクンと硬直させ意識を失った。

ぐったりと権八郎の上に体を預ける八重を残忍な目で見下ろしていた権八郎は、もう、こん

な物は要らんだろうと、女の禪の様に股間を覆っていた縄を緩めた。

うっすらとした意識の中で秘裂を抉り快感の穴を意地悪く外部から責め立てていた瘤を持った縄が解かれほっとした感じを持ったが、それは、権八郎の優しさではなく、単に次の仕事への邪魔になる物を取り除いただけに過ぎなかった。

「お前もイヤらしい女だな・・ほれ、この縄をこんなに濡らしおって！特にこの瘤の周りはベチャベチャでは無いか？」

と、解いたばかりのまだ温もりの残る股縄を八重に見せ付けながら含み笑いをした。

開け広げられたままの八重の二つの大腿の下に手を差し入れると怪力の権八郎は八重の身体を易々と持ち上げた。

そしてゆるゆると下に降ろされる秘裂の下には天を衝く権八郎の怒張が待ち受けていた。

幼子の前で最後の瞬間を迎える事を覚悟した八重の口から悲痛な声が上がった。

「霊前でそなた達の母親を責め駟っただけでは無いぞ・・」

玄齋が志乃の華肉を抉りながら得意そうに喋った。

「その後で、幼いそなた達が眠る枕元に連れて行って、散々突き立ててやったわ！」

と、如何にも可笑しそうに笑い声を上げた。

「身体は感じてどうしようも無いのに、ぐっすりと眠るそなた達を起こすまいと、必死に声を堪えるそなた達の母の姿がいじらしかったわ！」

玄齋の得意そうな笑い声を聞きながら、志乃が玄齋に突き立てられ薄れ行く意識の中で、ああ・・そうであった・・と、思い出し始めていた。

自分は母上がこの怪物の様な男に犯されるのを布団の中から見ているのだった。

余りの恐怖に、布団を被ったまま金縛りに遭った様に身動きも出来ず、声も上げられず、ガタガタと震えながら、その全裸の男と女の行為を見続けたのだった。

その翌朝、母上はあの世に行っても父上をまともに見ることは出来ないと言うかの様に目隠しをして、父上の霊前で喉を掻き切って自害されたのだ・・

二人の幼子を残して死んでいくことは未練であったろうが、憎い仇の子を腹に宿した現実の前には他に残された道は無かったのであろう。

この恐ろしい事実は幼かった自分には余りにも大きな衝撃の記憶で在ったため、いつしか心の隅に追いやり消し去っていたのだった。

それでも何かの折りには、恐ろしい悪夢となって蘇り、自分を苦しめていたのだ・・・  
あの夢の中で全裸に縛り上げられて異様な男に責められていた若い女は自分の母親で、その女を責め上げる鬼の様な男は玄齋であったのだ・・・  
この恐怖の夜の記憶を完全に取り戻した時、志乃の心の中で何かが壊れ始めていた。

自分達は余りにも無力で、仇の玄齋は剣の腕でも、邪悪な陰謀を張り巡らせる頭脳でも、男としての精力でも、惣右衛門を後ろ楯とした金力でも到底自分達の力ではこの男に敵う筈も無い・・・

次第に、志乃には玄齋の持つ底知れぬ力が人知を越えた魔界に君臨する大魔王の持つ魔力の様に感じられ始めた。

あっさりと父が斬り殺され、母が陵辱された様に、自分達もこの男の玩具となり弄ばれるのが宿命で在ったのでは無かったのか・・・

哀しい諦めにも似た心境が心の中を占めて行き、心を塞ぎ、悲惨な境遇に涙が留めなく流れ落ちた。

最早抵抗する気力も失って、涙を流しながら従容と自分の男根を受け入れ始めた志乃の様子に気付いて、玄齋がほくそ笑んだ。

この娘もまた、母親の様に男に残忍に扱われれば扱われる程、悦虐の喜びに変えて牝芯を濡らす女ではないか？と、考えた。

八重の時は、これから旅に出る前で、時間が無くてそれを確かめる事は出来なかったが、娘の場合には十分に時間が有る・・・これからゆっくりと時間を掛けてそれを確かめ、自分の好みの女に仕立て上げるのも面白い・・・

志乃を背後から犯しながら暗い計略を思い描くのであった。

八重が一夜にして女の喜びを知らぬ貞淑な女から、女の情念を燃え上がらず、成熟した女として開花した様に、その娘にも処女から一夜にして女の喜びを知る女に変えてしまいたい・・・と、志乃を背後から抱きながら思った。

「それには、腕に撚りを掛けてお相手せねばのう・・・」

と、一人呟くと志乃を責め立てる腰の動きに拍車を掛けた。

太い玄齋のモノが中で動く時、玄齋のモノと肉洞内の襞が互いに擦れ合い、ある時は膣壁を表に引きずり出し、ある時は肉襞を畳んで押し込む様に感じられ、息も出来ない苦痛に喘いだが、やがて無意識の内に志乃の内奥から分泌液が流れ始め、肉洞内を潤し、その動きを円

滑にし始めていた。

ドクドクと脈打って自分のモノを締め付ける肉孔が暖かな湿り気を帯びて滑らかな摩擦の感触を示し始めたことに気付いた玄齋は、やはりこの女は被虐の喜びで身体を燃やす女で合ったとニヤリと口元を緩ませるのであった。

志乃自身気が付かない内に始まった女肉の反応は、これまでのズキズキする様な息も出来ない苦痛から、何やら不可思議な感触を感じさせる様になっていた。

玄齋の陰茎と摩擦しあう膈壁から、生まれてから感じたことの無い、甘美な感触を発するのを意識し始めていた。

その快美感は、次第に自分でも制御できない程強くなって行き、そのまま甘美な渦に飲み込まれて溺れ死んでしまうのでは無いかと、恐怖に襲われ頭を激しく振りたてた。

そんな志乃の理性を裏切る様に身体は、快感の終着に向けて流れ始め、心臓はドクドクと鼓動を速め、雪の様に白かった肌は鮮やかな桜色に染まり、ピクピクと身体は震え続けていた。

真之介を背後から責め立てていた篤馬は、そんな志乃の様子に気付いて、

「見よ！真之介殿！そなたの姉上は、我が父の手管の下で身体を燃え上がらせておるぞ！」

と腰を振りたてながら真之介に声を掛けた。

しかし、真之介も全身を紅潮させ息をフウフウ吐いて、姉の様子に構うどころでは無い様子が判った。

「おやおや・・真之介殿も拙者の手管に感じて身体を燃やしておるか！」

背後から真之介の菊門を突き立てながら、その前方の肉塊がムクムクと鎌首を擡げ始めている事に気付いて高らかに笑い声を発した。

憎みても余り在る仇の息子に肛門を存分に犯される内に自分でも気付かなかった肉の喜びの様な物が込み上げて来て、無意識の内に股間のモノを屹立させ始めた事を篤馬から指摘され、悔しさと恥ずかしさに猿ぐつわされた口から呻き声を上げて激しく首を振った。

「それでは、こちらの方も手で扱って進ぜよう・・」

背後から激しく後口を責め立てながら、前に手を伸ばすと真之介の一物を握り締めた。

篤馬の手を感じて、止めてくれえ！と言うように身体を震わせたが、ガッシリと縛り上げた縄が抵抗を封印した。

篤馬により剥き上げられ露出した鈴口から泉のように透明の粘液が沸き上がっていた。

背後から手コキされ、真之介のモノは一段と大きく硬くなり始めていた。

「見られよ、真之介殿！志乃殿は、もう直ぐ逝きそうで御座るぞ！」

「おやおや、真之介殿ももう直ぐ逝きそうであるか！」

と、腹を揺すって笑い声を上げた。

「それでは父上、この際姉弟同時に極楽往生させて上げようでは御座いませぬか。」

篤馬が志乃を責め上げる玄齋に声を掛けた。

志乃に対して最後の追い込みに入っていた玄齋も息子の申し出に「良かろう。」と、笑って応えた。

これまで千人以上の女を抱いて来たと言語する玄齋には女の責め処泣かせ処を熟知しており、ここまでの志乃との交接で志乃の弱点も見抜いていた。

一機に志乃を追い上げるため嵩に懸かった様に志乃の弱点を責め上げ始めた。

自分の女の壺を的確に責め上げてくる玄齋の巧みな腰の動きに、一撞きされる毎に津波の様な怒濤の衝撃が脳天まで込み上げ、ついさっきまで無垢な乙女であったのに、今は得体の知れぬ力に全身を支配され、玄齋が衝き上げる毎に自ら腰を振り、我を失って懊悩の極みにあった。

一方女を抱くだけでは無く修道を趣味とする篤馬も真之介の腸内を肉茎で責め立て、真之介に苦痛とは違う悲鳴を上げさせていた。

悪鬼の様な親子に容赦無く責め立てられ全身を火柱の様に燃え立たせて、身悶え苦悶する姉弟の様子を惣右衛門が信じられないという表情で目を血走らせて見詰めた。

ウウッ！と、一声上げて玄齋に抱かれながら志乃が身体を硬直させた。

ウッ！と呻き声を上げて真之介が背を弓の様に反らせた。

その瞬間肉棒の先端から激しく白濁した液を噴出させた。

「やれやれ・・・姉弟揃って仲良く逝きおったか・・・」

「それに真之介殿は同時に自分の精も放出されましたぞ！」

篤馬が可笑しそうに笑い声を上げた。

絶頂の余韻に身体を硬化させる志乃にこれまでの労をねぎらうかの様に、溜まっていた白濁した液を発射した。

自分の膣内に玄齋が熱い精液を放出したことを感じたのか、志乃の下腹がブルブルと痙攣し

た。

篤馬も溜まっていた精液をドッと真之介の腸内に噴射した。

男に犯され止めまで刺された真之介が悲鳴の様な惨めな声を上げた。

堪えていた物を放出して落ち着いた玄齋が、「本来ならこの後続けて何度も抱きたいところではあるが、今回はくじ引きで後が<sup>つか</sup>聞えておるから、これ位にしておこうか・・・」

と、志乃の秘奥から少し硬度を失った肉茎を抜き出した。

入り口を扼していた玄齋の巨根が無くなり、蓋が取れた様に肉洞内を満たしていた淫液が溢れる様に流れ出した。

玄齋から手を離され、滑り落ちる様に布団の上に崩れ落ちた志乃は死んだ様に身動きを見せず、閉じる力を喪失してしどけなく開いたままの肉孔の奥からは、処女の証であった赤い血と玄齋の放出した白い精液と志乃の秘奥から分泌された透明の粘液が混じり合って流れ出ていた。

二番目に志乃の身体を抱く権利を得た篤馬が、志乃の傍に寄り、立ち上がったまま布団の上に倒れ伏す志乃の事を冷酷な目で見下ろしていた。

玄齋との交接に気力体力を使い果たし、篤馬が直ぐ傍に居ることも気付かないのか、股間を大きく割ってその奥を篤馬の目に晒しながら、身動きもせず、忙しなく胸を上下させて苦しげに息を吐いていた。

篤馬は父の仕事の跡一蹂躪された秘裂の奥を冷たい目で見詰め続けていた。

「これこれ・・・貞淑な武士の<sup>おなご</sup>女子が男子の前でその様に股を開くものでは無いぞ！」  
と、力無く横たわる志乃の太股を蹴り上げた。

「大方、赤坂様に撞かれて痛くて股を閉じることも出来ませんのやろ・・・」

惣右衛門が横から笑い声を上げた。

股の付け根を蹴られて意識を取り戻した志乃が薄く目を開けると、其処に篤馬が立っていることに気付いてビクッと身体を震わせた。

「初めて男に抱かれたのに、こんなにも嬉しそうに垂れ流すとは、お前はどのような無恥淫乱女だ！」

篤馬が右足を志乃の柔らかな下腹の上に置くと、中の物を絞り出す様にグリグリと体重を載せた。

篤馬の冷酷な行為に志乃が仰向けに横たわったまま下腹を襲う激痛に悲鳴を上げた。

篤馬は言葉と足で志乃を残忍に責め立てながら、臍内に残った物を搾り上げた。

開き切った股座の奥からはドロドロと淫液が流れ続けていた。

布団の上に片膝付いて腰を落とした篤馬は、仰向けに寝ていた志乃の身体をひっくり返す様に俯せの姿勢とした。

「さて、志乃殿の前の初物は父上に取られたから、拙者は志乃殿の後ろの初物を頂くとするか・・・一日の内に姉弟の菊門を頂くのは流石に初めてに御座る・・・」

と、嬉しそうに笑い声を上げた。

志乃の身体を自分の方にたぐり寄せながら、志乃の顔面を固く覆っていた猿轡を「もうこんな物は不要で御座ろう」と、解き始めた。

既に今の志乃には舌を噛んで自死する気力も残っていないと見て取っての行動であった。

口の中に残っていた弟の下穿きを裂いて作った布切れを取り除かれ、自由になった口で、「ああ・・・もうお許し下さい・・・」と、仇の息子にか細い声で哀願するのであった。

「そうは行きませんぞ・・・志乃殿が拙者の事を憎からず思っていたのは知っておりましたぞ。本来なら拙者に最初に抱かれないかと思っていたのではありませんか？」

アア・・・と呻く様な声を上げて顔を赤く染めながら頭を振った。

篤馬が口にする様に一度はこの卑劣な若者に恋情を抱いてしまった自分を恥じた。

そして、自分がこの悪鬼のような冷酷な男に心を奪われてしまったばかりに冷静な判断力を失い、彼らの企んだ罠に易々と落ちてしまい自分ばかりか真之介にまでもこんな地獄の苦しみを嘗めさせているのだと思うと、真之介に済まない気持ちとなり、「許して！真之介！姉が愚かでした。お前にこんな苦しみを与える事になって！」と、涙をい流して詫げるのだった。

そんな泣き崩れる志乃を冷たい目で見下しながら、「志乃殿の姫御前は既に父上に奪われてしまい申したから、拙者は裏神様の方を頂き申すぞ・・・志乃殿も異存御座らぬであろう？」と、隠微な笑みを浮かべながら告げた。

篤馬が口にする言葉の意味が理解出来ない志乃であったが、篤馬のニヤリと笑った冷酷な笑みに恐怖して、不自由な身体を膝行らして篤馬から逃げようとした。

玄齋に散々責め立てられ、力の入らない志乃の身体は篤馬に容易に絡め取られ、引き寄せられて行った。

俯せのまま無理矢理尻を高く擡げる姿勢を取らされ、この卑劣な若者に背後から二つの秘め場所を目撃される羞恥に泣き叫ぶ様に声を上げた。

そんな志乃の狼狽にも関心を持たず、既に隆々と勃起していたモノを、散々玄齋に弄ばれた

秘孔に押し当てた。

志乃の悲鳴にも拘わらず玄齋により蹂躪され弛緩していた秘め処は易々と新たな男のモノを呑み込んで行った。

泉の様に湧き出た愛液が弟の腸内で汚された肉塊を洗っていった。

何度か出し入れして、今さっきまで未通であった狭い肉孔を楽しんだ後、この後の潤滑のために自らの男根にタツプリと父と志乃の混ざり合った愛液を塗した。

たっぷり志乃に苦悶の呻きを上げさせてから漸く抜き出した肉の槍はドロドロとした妖しげな粘液に艶々と濡れ光っていた。

そして、快感に打ち振るえ大きく膨張した穂先を志乃の菊花に押し当てた。

篤馬の真の狙いが初めて理解出来て、恐怖心が込み上げて来て、空気が抜ける様な悲鳴を上げた。

一方真之介の方も玄齋から猿轡を外されていた。

さっきまで篤馬の陵辱を受けていた菊門に玄齋の鉄の様に硬化した穂先が触れるのを感じて、又あの苦痛と屈辱を味合わされるのかと悲痛な思いとなって、「お願いで御座います！もうお許し下さい！」と、悲鳴を上げ、涙を流して哀願するのであった。

「そうは行かん！お前は儂の事を親の仇とつけ狙っていたのだろう？今キツチリとお前の姉を返り打ちにした。お前も返り打ちにしなければ肩手落ちと云う物だろう。」

と真之介の上に馬乗りになる姿勢を取りながら、カラカラと笑い声を上げた。

「倅に散々突き立てられてここも充分に開いておるであろう？儂の豪刀を突き立てても最早裂ける事はあるまい・・・」

真之介の菊花に先端を押し当てたまま、腰をグイッと前に押し出した。

ヒィー！と言う女の様な悲鳴が響き渡った。

「おお！狭い！何と言う締め付けじゃ！」

巨大な亀頭の先端部分を少しめり込ませただけで、真之介の菊花は周囲の皺を全て引き延ばされてしまい、極限まで広げられた肛門が僅かに鰓の張った亀頭部分の半分程を呑み込んでいた。

「やはり、滑りが足りぬ様だな・・・」と、呟くと、無理矢理突き立て肛口を引き裂く事を用意して、傍らに置かれていた貝殻の中に納められた潤滑油を兼ねた催陰薬を手にした。

ネットリとした油脂の様な媚薬をタツプリと二本の指先に掬い取ると、真之介の開孔したま

まになっている後口にベツトリと擦り付けた。

真之介は篤馬から責められた経験でその脂の様な物を塗り込められると、その部分が熱くなりムズムズして来てやがて肉茎で搔き回されて、何が何か判らない状態に追い込まれる事が判っていたので、玄齋の指先を腸内にまで受けながらヒィヒィと悲鳴を上げて尻を振る寄せた。

玄齋は真之介の少女の様な恥じらいを楽しむ様に、じっくりとその周囲に塗り込めると、次に自分の怒張全体に塗り始めた。

準備万端調った玄齋は改めて真之介の菊花にそれを押し当てた。

「それ！参るぞ！」

俯せに横たわる真之介の上に巨体を預けて、笑いと共に一声掛けた。

玄齋が腰を強く押し入れた瞬間、ギャーと断末摩の様な悲鳴が上がった。

志乃は自分が篤馬から突き立てられる激痛も忘れて、弟の方を見遣った。

玄齋が力一杯突き入れた陰茎は真之介の肛門を瞬間的に押し開き、巨大な亀頭部分は狭い入り口を一機に通り抜け、長い男根の半分以上が真之介の後口内に埋没していた。

「見られよ！志乃殿、真之介殿は父上の巨大なモノを一機に受け入れよったぞ！・・・おうおう！そう言っている間に志乃殿も拙者のモノを半分まで受け入れておるぞ！」

篤馬は玄齋の様に一撃で突き通す様な事をせず、その先端を菊花の中心の押し当てたまま、押したり引いたりを繰り返して、志乃の肛門が自ら開き始めるのを待って、徐々にその内部に侵入を計っていたのだった。

その分長時間に渡って苦痛に苛まれ続けているのだった。

息も止まる様な激痛の末、もっとも太い亀頭部分をその内部に納め、少し痛みの引いた志乃が全身汗塗れになり、篤馬のモノを直腸内まで突き入れられたままハアハアと喘ぐ様な息を吐いていた。

そんな哀れな姿を晒す志乃に憐憫の情を感じて休ませる様な優しさを持ち合わせず、「さあ、一番太い所が通ったから後は楽であろう・・・」と、志乃の後門に突き刺したまま、ゆっくりと腰を前後に動かし始めた。

まるで腸全体を引きずり出される様な感触に悲鳴が上がった。

「おうおう！凄いい締め付けで御座る！」

腰を前後に振りたてながら篤馬が感激した声を上げた。

今や姉弟は仇の父子にそれぞれの肛門を突き立てられ苦痛に脂汗を滴らせながら身悶えていた。

玄齋の巨大な怒張が入り出る真之介は、腰を前後される毎にヒィヒィと悲鳴を上げてまるで女の様に涙を流していた。

一方志乃の方は篤馬の陰茎の大きさにその部分が馴染んで来たのか、動きが円滑になっていた。

先程志乃を裸にして、その前の穴を確かめた時、この娘の秘孔は名器の素質が在ると見抜いた篤馬は、肛門を責め立てながら、薄い壁一枚を隔てた後ろの穴も尋常な造りでないと感じていた。

そして、篤馬が腰を動かす度にそれに呼応して志乃の背筋がピクピクと震えていた。

「この女、ついさっき新鉢を割られたばかりなのに父に抱かれて絶頂に達し、今又後門を責められて感じているのか？」

と、啞然とする思いで、荒い息を吐きながら自分の分身に田楽刺しにされる志乃の様子を見遣った。

それを確かめるため、抽送を繰り返しながら、志乃の割れ目に手をやり、その秘裂の間をまさぐった。

驚くことには、其処は体内から分泌された粘液でビショビショにぬれており、その深みから熱い樹液が次々と湧き出していた。

「お前は何と言う淫蕩な女だ！尻を抉られて喜ぶのか！」

志乃の目の前に感じている証拠として淫液に濡れた指を指しだして、嬉しそうに大笑いをした。

篤馬に嘲笑されて組み敷かれる志乃が哀しそうに、アアッ・・・違います・・・と呟いた。

懊悩の極みにある志乃には最早何が何か判らず、最初の肉を切り裂かれるような激痛も今は鎮まり、下腹を内側から押し広げるような、ただ臀部から背筋を通して込み上げるゾクゾクする様な快感にも似た激烈な刺激だけが女体を支配していた。

籤で負けて見物に回っていた惣右衛門が辛抱溜まらなくなった様に着ていた服を脱ぎ始めた。

「柏木様！志乃様の前の穴を使わせておくれやす！」

人目も憚らず、天井を向いた怒張を振りたてながら、志乃を抱く篤馬の前に駆け込んで来た。

「何？恵比寿屋！お主も無体な事を申す男よのう・・・ついさっき乙女の純潔を失い、いま又、

後ろの純潔を奪われている志乃殿を前から舐りたいとはのう・・・」

と、言葉とは裏腹に惣右衛門の希望を面白そうに聞いて、

「良かろう！但し志乃殿は先程乙女を失ったばかり、余り手荒にするで無いぞ！」

と、恵比寿屋に念押しすると惣右衛門が挿入しやすい様に志乃の中心に突き立てた儘、ゴロリと身体を回転させた。

今や篤馬に真下から尻穴を抉られながら、志乃の身体は仰向けとなり、愛液を沸き立たせる陰門は大きく広げられた股間の奥で惣右衛門の来訪を待っているかの様で在った。

篤馬が背後から貫き通しながら柔らかな乳房を愛撫していた両手を離して、志乃の両太股を抱え上げた。

いまや禪も脱ぎ捨て醜い鎌首を隆々と擡げさせる惣右衛門に見せ付ける様に両脚を鷺掴みにして空中に大きく八の字を描く様に股間を広げさせた。

まるで赤ん坊がオシメを代えるような姿勢で、下劣な商人の前に自分の秘奥がマザマザと晒される羞恥に咽び泣きながら首を激しく左右に振りたてた。

惣右衛門の血走った目には菊花の皺を思い切り引き伸ばされ一部の隙もなく篤馬の豪刀を腹の内に啞え込む後口と、まるで何かを誘うように充血して妖しく濡れ輝る前門が映った。

その淫猥な光景に頭に血が登った様に、惣右衛門はいきなり濡れそぼる志乃の秘孔に押し当てた。

二人の男の企みに気付いたのか志乃は、アアッ！嫌で御座います！と涙を流して身悶えた。醜く屹立した鎌首から逃れようと腰を振ろうにも篤馬に背後から突き立てられ、まるで杭で固定されたように身体を動かす事が出来なかった。

肉欲に狂った惣右衛門が荒い息を吐きながら志乃の上に覆い被さって来た。

まるでガマガエルの様な肥大した醜い顔が志乃の目前に迫り、生臭い鼻息が志乃の頬を舐めた。

そんな身動きも出来ない志乃の前門に下賤な商人の猛り狂ったモノがズブズブと侵入を始めていた。

突然の惣右衛門のちんにゅう闖入に志乃の悲鳴が上がった。

男二人に挟み撃ちにされて、前後の秘孔を挟り立てる男達の太い肉塊に、二つの陰孔を繋ぐ筋肉は限界まで引き延ばされて激痛に身を振った。

そんな志乃の哀願にも拘わらず、とうとう根元までおのれの肉棒を挿入し終えた惣右衛門は、興奮して頭に血が登り猛烈な勢いで腰を振りたてた。

猛々しい獣欲に狂った惣右衛門が力任せに志乃の乳房を握り締め激しい悲鳴を上げさせた。

「おいおい！恵比寿屋、お主もがさつな男よのう・・・そんな力いっぱい乳房を揉むものではない・・・」と、下からゆるゆると腰を使いながら篤馬が窘めるように言った。

薄い秘膜一枚を挟んだだけで二人の男の男根が擦れ合い、その激しい痛みにヒィヒィと悲鳴を上げ続けた。

「おいおい！恵比寿屋！そんなに腰を振りたてるもんじゃ無いぞ！志乃殿が痛がっておられるぞ！それに薄皮一枚で擦れる拙者も変な気分になって来おったわ・・・」

篤馬に<sup>たしな</sup>窘められて、溜まりに溜まった獣じみた最初の興奮も少し治まり腰の動きを少し緩やかにした。

「そうじゃ！拙者志乃殿のその部分は名器の素質が在ると見た。いきなり手荒に扱って壊してしまうより、ゆっくりとその素質を開花させたい。」

下から突き上げる篤馬が惣右衛門に諭す様に言った。

「どうじゃ？志乃殿の内部は素晴らしく良い気持ちであろう？この際じっくりと極上の内部を味わって見たらどうじゃ？」

「ああ・・・良い気持ちで御座います。この様に造りの良い<sup>おなご</sup>娘を抱いたのは初めてで御座います・・・」

志乃の奥に深々と怒張を突き立てながら、その暖かく湿った肉洞の感触を楽しむ様にウツリとした声を上げた。

男二人は上下から志乃を抱き締め、自らの分身を使って志乃の神秘の身体の奥の感じる箇所をそれぞれ探り当てる様に腰を使い始めた。

最初の切り裂かれる様な激的な痛みはジーンとした痺れに変わり、前後から快樂のツボを探り当てる様に蠢く二つの肉茎の動きに煽られて、名状出来ない感覚に襲われ再び志乃は懊悩の極みに押し上げられた。

「ああ・・・もうお止め下さい・・・志乃は気がおかしくなってしまう・・・」

男二人に重ね餅にされながら、気弱そうな声を上げた。

「志乃殿はこの様なやり方がお気に召した様子！武家の姫にしておくのは惜しい！<sup>まさ</sup>当に天晴れな淫婦じゃ！」

志乃を抱え上げたまま篤馬が嬉しそうに笑い声を上げた。

男女の性愛に長けた篤馬も精力絶倫の惣右衛門も簡単には終わらず、長い時間を掛けて志乃

に苦悶の旅を続けさせた。

「それ！見てみよ真之介！お主の姉は男二人のゲテモノを見事根元まで啜え込んだまま腰を使って楽しんでおるぞ！」

真之介の上に馬乗りになった玄齋が真之介の鬚を掴んで、志乃の方に顔を向けさせた。

玄齋の巨根を相手に半死半生の体の真之介は口から泡を噴き白目を剥いて、姉の様子に気付いているか定かでは無かった。

志乃も絶倫の体力をほこる男二人に挟み撃ちにされ最早弟の目を気にする余裕も無かった。男達はこのうら若い哀れな姫の身体から快樂の滴を絞り出すように責め上げ、二人の淫獣に絡め取られて、何度と無く女体の奥深く秘められた快樂の壺をたたき割られ怒濤の様な熱い飛沫を溢れさせ続けるのであった。

既に幾度となく頂上を極めさせられ、ああ・・・もうお許し下さい、もうお許し下さい・・・と切れ切れの息の下で哀願を続けるのであった。

何度か絶頂を極めた志乃を抱き締める男達は絶頂の余韻にゆっくり浸らせる優しさも持たず、度重なる衝撃に心臓も張り裂けそうに疲弊した女に嵩に懸かって責め掛かるのであった。

残忍な男達から攻め抜かれ、逝き地獄の苦痛に泣き叫んで哀願していた志乃も今やグッタリとして流す汗も途切れ白目を剥き半開きの唇からは荒い息を吐き出し続けていた。

意識喪失状態に在る姉妹を三人の男達は尚も攻め抜き、快感の最後の一滴まで搾り上げて、二人の体内に溜まったものを放出した。

前後の肉穴に熱いモノが打ち出された事を無意識下で感じ、志乃がウッと声を上げ身体を硬直させた。

篤馬と惣右衛門がそれぞれ塞いでいた穴から己のモノを抜き出した。

長時間蹂躪され続けた二つの穴は閉じる機能も失って、ポツカリと開いたまま男達の放出した精液と志乃自身の身体から流れ出た体液を垂れ流していた。

死んだ様に俯せに布団の上に倒れ伏す志乃を見下ろしながら、

「志乃様も最早ぐうの音も出ない様だすな・・・それにしても武士の姫とも思われない無い様な姿を晒しておいでだすな・・・」

男二人の精を搾り上げ、漸くこれで終わったと、俯せに横たわりながら涙を啜り上げていた志乃の身体を引き起こす様に篤馬が身体を寄せて来た。

又自分を犯すつもりだと気付いた志乃は恐怖に青くなり、「嫌！嫌！お止め下さい！どうか志

乃を哀れと思って、お情けをお掛け下さい！」と悲鳴の様な声を上げた。

「父上も恵比寿屋も志乃殿の名器を味わって来られましたが、拙者は未だ最後まで味あわせて貰っておりませんぞ・・・」とニヤッと冷酷に口元を歪めるとそのまま仰向けに横たわる志乃の上に体を預けて行った。

何度も逝かされて疲労困憊状態の自分を尚も責め掛かろうというこの悪魔の様な若者に恐怖して、篤馬に突き立てられながら狂った様に泣き叫んだ。

哀れな女の悲痛な叫びもこの男には心地良い音楽にしか聞こえないのか、散々突き立てた挙げ句、帯びたしい精を胎内に放出し、満足そうに笑い声を上げた。

その後も男達は僅かな休憩を取って身体を休めては志乃の二つの甘美な肉穴を食った。

男達は休みながらであったが、志乃には休む隙もない果てしない責め苦であった。

この秘密の蔵に二人が連れ込まれたのは、まだ早朝であったが、今は日もとつぷりと暮れた夕刻になっていた。

流石に悪魔の様な男三人もグッタリと疲労を感じ、死んだ様に横たわる姉妹を見詰めながら腰を降ろし、酒で乾いた喉を潤していた。

無言で酒を喉に運ぶ男達の見詰める先には、絶え間ない蹂躪で閉じることも忘れた様に空ろとなった二つの肉穴をマザマザと晒す志乃と俯せになったまま小さく嗚咽し続ける真之介の姿があった。

既に二人とも後ろ手に縛り上げてた縄は解かれていたが、自由になった手で恥ずかしい部分を隠す気力も完全に喪失している様であった。

夜気が迫って来て次第に冷たくなって行く身体に気付いて、志乃は徐々に意識を取り戻し始めていたが、疲労困憊した身体を起こす力も残っておらず、男達の方を向けてだらしなく開く股間を閉じる気力も失せたまま俯せに横たわっていた。

昨晚から今日に掛けて起きた身の変転を振り返ると、気も狂いそうになっていた。

漸く親の仇を討てると期待したのもつかの間、卑劣な罠によって仇の前に裸身を晒す辱めを受け、親の仇に乙女を奪われてしまい・・・」

色々と無残な記憶が脳内を駆け巡っている間に、玄齋がスクッと立ち上がった。

顔面に淫靡な笑みを浮かべて、息子と恵比寿屋の方を見渡すと、

「どうじゃ？お前達、女が糞をするところを見たことがあるか？」

と、問うた。

「さあ？そないな場面見たことはおへんな・・・」

と、頭を振る恵比寿屋に満足した様に、

「それでは、見てみたいとは、思わぬか？」と、尚も問い重ねる様に聞いた。

「それは、見てみたいもんでおますな・・・」

玄齋の次の行動を理解した様に恵比寿屋が淫靡な笑みを浮かべて応えた。

篤馬も面白そうに二人の会話を聞きながらニヤニヤと笑っていた。

「それではこの場で見せてやろう！」

と、一つ笑い声を上げて、死んだ様に横たわる志乃に近づいた。

薄い意識の中で玄齋が笑いながら自分に近づいて来るのに気付いて、ゾッとする恐怖に襲われた。

しかし、身体に力が入らず玄齋から逃れる事も出来ず、易々と玄齋に腰を抱き抱き込まれてしまった。

そして股間のモノを志乃の菊門に宛がった。

再び玄齋に後門を貫かれると思うと、あの時の苦痛と恐怖が蘇って、「お許し下さい！お助け下さい！」と、大泣きになって哀願した。

流石に何度も放出した疲労感からか、玄齋の陰茎は最前の熱鉄の様な硬度は無かったが、それでも何度も責め立てられ開きっぱなしになった志乃の裏門には、柔らかく起ち上がった長大なモノがズブズブと埋め込まれて行った。

再び肛口を責められる惨めさに、玄齋の男のモノを直腸内に感じながらエンエンと泣きじゃくり始めた。

そんな志乃の哀切を帯びた姿も気にならない様に、とうとう根元まで収めた玄齋は、

「それでは志乃殿！そろそろ参るぞ！」と、嬉しそうに声を発した。

その声が終わらない内に、腸内を占領する玄齋の男根の先端から暖かな液体が放出され始めた。

始めチョロチョロと流れ出したその暖かな液体はやがて強い水流となって志乃の腸内奥深くまで渦を巻いて流れ込んだ。

「ほうーっ、今日は早朝から廁に行っていなかったからいっぱい溜まっておるわ・・・」

志乃の腸内に放水しながら、堪えていた尿意でパンパンに張っていた膀胱が次第に軽くなっていく快感にウツトリしながら呟いた。

玄齋に自分の身体内に放尿される惨めさに、志乃は激しく首を振り、身体を悶えさせて大声

で泣き叫んだ。

「そら、まだまだ出るぞ・・・」

巨漢の玄齋が貯めに貯めていた小水の量は夥しく、腹を内側から圧迫して行くものを感じ始めていた。

何時までも続く放尿にこのまま注ぎ続けられたら自分の腹は破裂してしまうのでは無いかと恐怖を感じた。

力の入らない志乃の腰を抱えたまま自らの尻を緊張させ、最後の一滴まで志乃の体内に注ぎ終えた。

体内に溜まっていた汚水を出し切り、スッキリとした表情となった玄齋は志乃から身体を外した。

再び布団の上に俯せに横たわる志乃の様子に男達は好奇の視線を送った。

最初志乃は何事も無かった様に力無く布団に横たわっていたが、次第に下腹をピクピクと蠢かせる様になって来た。

そして、小さく苦しげな呻き声を上げながら、身体をくの字に曲げると手を腹の上に当てて身悶え始めていた。

「どないしはったんや？お嬢さん。えらい苦しそうや無いか？」

下腹から込み上げる苦痛に身悶える志乃に恵比寿屋がシレッとした顔で問い掛けた。

激しく突き上げる下腹からの痛みに額に汗を浮かべながら、

「後生で御座います！志乃に廁を使わせて下さいまし！」

と、残酷な性癖を持つ憎い男に哀願するのであった。

「廁と言われても・・・私もこの蔵を造る時に大工に色々指示をして、蔵の中に井戸を造ったり、水回りを造ったりと、普通の蔵には無い物を色々造らせましたが、うっかり廁だけは造るのを忘れておりましたな・・・」

と、腸内から込み上げる激痛に苛まれる志乃を面白そうに見詰めながら惚けたことを口にした。

「そやから、用便を足す時にはこのご不浄箱を使って貰うことにしております・・・」

と、漆塗りの四角い箱を手にして志乃の目の前に差し出した。

それは、厚い木の板で作られた長さが一尺五分、幅が八寸、高さが五寸ほどの長方形の箱で、まるで寿司の飯台の様に内側は赤、外側は黒の漆で塗り固められており防水性と耐水性がある事は明らかに分かった。

「昔、平安の貴族の世には姫様はお部屋の中でご不浄箱に便を垂れたと言うことで御座るから、志乃殿も平安貴族の姫になられた積もりで、ノビノビと糞でも小便でも放り出されるが良からう・・・」

横から篤馬が笑いながら口を挟んで来た。

どこまで女をいたぶればこの男達は気が済むのかと、新たな怒りが込み上げて来たが、切迫する便意に負けて、「お願いで御座います！ご不浄箱を使わせて下さい！その間、人払いをして下さい。そして・・・」

自分が排泄した見苦しい物を男の目に晒すのを恐れて、「その中身の後始末も私にさせて下さい！」と、続けざまに哀願した。

「あんたは内の大切なお客様や！お客様に糞の後始末なんかさせられますかい！ここで皆みんなの見ている前でノビノビと出さしたらよろしい・・・」

と、笑顔で志乃の申し出をはね除けた。

予期出来る答えであったが、アアッと志乃が絶望に首を振った。

「志乃殿は遠慮なされておられるのであろう・・・ほれ、この通り両手を後ろに縛ってしまえば、後は我々に託すより無く、遠慮されることもなくノビノビと臭くて太い物を放り出される事であろう。」

篤馬が苦痛に呻吟する志乃の背後に回り、手早く両手を後ろに絡め取り、しごきで後手に縛り上げて笑いながら言った。

玄齋が脂汗を浮かべて苦悶する志乃に、「さあ、こうなったらご不浄箱を跨いで皆の見ている前で排便するしかないだろう。それともこのまま布団の上に派手に撒き散らすつもりか？」と、問い掛けた。

進退窮まった志乃はただ布団の上に蹲り、苦悶に歪む泣き顔を布団に埋めて苦痛に身悶えてウンウンと首を振るだけであった。

その間にも切迫した便意で尻をブルブルと震わせ続けていた。

「これは、これは、見上げた心掛けで御座る！武士の娘として衆人の前で恥を晒す事を潔しとしないとは！志乃殿は最後まで耐えきる御所存と見請け申した！」

突然篤馬が変なことを口走り始めた。

「不肖、柏木篤馬、志乃殿の心掛けに感服致し、志乃殿を応援したくなり申した！但し、志乃殿の此所は先般より父や拙者のモノで何度も挟られ、ケツメドの筋肉も痺れが残って強く

締め付ける事も出来なくなっているものとお見受け申す。・・このままでは幾ら志乃殿が頑張ると申されても粗相をしてしまう事は必定！」

篤馬の芝居がかった台詞に面白そうに恵比寿屋と玄齋が顔を見合わせた。

「そこで、これを使って志乃殿のケツメドに栓をして遣わそう・・」

と、わざと志乃の目に入る様に奉書紙を差し出した。

「それは！」と、志乃が青ざめ、声を上げようとした瞬間、篤馬は手にした和紙をビリビリと引き裂き始めた。

それは志乃が肌身離さず懐中にしまっていた藩の発給した仇討免状であった。

叔父の兵衛門が藩の中をあちこち駆け回って、病死であるとの届出を取り消し、発給して貰った仇討免状であった。

その免状が毀損されてしまった今となつては、例え油断を見つけて見事玄齋を討ち取ったとしても、正当な仇討ちであるとの証拠が無くなってしまふと、得意気に免状を引き裂く篤馬を涙に霞む目で見詰めながら悲痛な思いに駆られるのであった。

さてさて・・と、一言口にするに篤馬は引き裂いた和紙の幾つかをクルクルと丸めて塊とした。

そして、その丸い和紙の塊を志乃の肛門に押し入れようとした。

篤馬の余りの狼藉に志乃が涙を流して抗議したが、それに構わずヒクつく肛口を押し開き丸めた紙を押し込んで行った。

ガサガサとした厚い和紙が薄い直腸の粘膜を擦り上げ激痛に泣き叫んだ。

志乃の悲痛な叫び声がこの若者には心地良い音色に聞こえるのか、鼻歌を歌いながら指の腹でグイグイと奥へ奥へと押し込み続けた。

鞠の様に丸めた紙の塊が、指で押されて押し潰され、変形しながら肛口を潜って行った。

最初の一つを直腸内に押し入れる事に成功すると、指を伸ばしてそのまま腸内奥深くまで押し込んだ。そして次の紙の塊を手に更に押し入れようとした。

「流石は、父上と拙者の一物を易々と啜え込んだ見事な志乃殿のケツの穴で御座る！ほれ、この様に丸めた紙を次々と呑み込んで行くわ！」

下腹から込み上げる激痛で身動きが出来ないのを良いことに、とうとう全ての仇討ち免状を引き裂いて作った紙の塊を腸内に納めて仕舞った。

「ご覧あれ！志乃殿はとうとう全ての紙を腹の中に納めて仕舞ったでは無いか！これで栓が出来て、天晴れ堪え切れる事である！」

と、哀れな女を此処まで無惨な状態に追い込んだ事に快哉の笑い声を上げた。

上から襲い来る激痛と、ガサつく和紙の痛痒感が身悶える度に志乃を内部から責め立て、苦しげな呻き声を上げ続けた。

元より丸めた和紙の塊が肛門栓の役割をする筈も無く、大腸の奥から降りて来た液状の便は和紙の間に染み込み、水分を吸収した紙の塊が腸内でムクムクと嵩を増していくのが感じられた。

見守る篤馬の目の前に、締まりを喪失して緩く開いた肛口から褐色の液が滲み出ている事を発見した。

とうとう全ての和紙の塊を液状化した便が浸透してしまい、最後の時が迫っていることが判った。

丸い輪のようになった肛口の筋肉が伸びたり縮んだりピクピクと蠢いていた。

それに呼応する様に秘密の花園の奥の秘孔の筋肉もピクピクと痙攣する様子が見詰める男達の劣情を掻き立てた。

全身汗塗れになった志乃はウンウンと呻き声を上げながら、最後の力を振り絞って肛門の筋肉を締め続け様としていた。

内側からの圧力に負けて、後門全体が山の様に迫り出し、肛口が半ば開きかけ、次に必死の力によりそれを内部に押し込めようとする健気な努力が篤馬達の目の前で行われていた。

半ば開口した菊門の奥に茶褐色に湿った紙の塊が目に入った。

貧血を起し始めたのか精白になった顔で口だけが浜に打ち上げられた魚の様にパクパクとしてた。

既に限界に達していることを理解した篤馬が、「さあさあ、余り無理をしていると身体に毒で御座るぞ・・・」と、志乃の事を抱き上げて不浄箱を跨ぐ様に腰を降ろさせた。

忍耐の限界を超えて今や意識が朦朧状態の志乃は無抵抗のまま不浄箱の上で蹲踞の姿勢を取らされながら、天井を向いて何か譫言<sup>うわごと</sup>を呟き続けていた。

志乃の後門の弛緩と緊縮の間隔は非常に短くなっていた。

男達は決定的瞬間を見逃すまいと、不浄箱の上に両脚を大きく広げて跨る志乃の周りに顔を寄せた。

突然志乃の口を衝いて泣き叫ぶ様な声が上がった。

その瞬間、堪えに堪えていた肛門がその口を押し開き夥しい液便を塗された和紙の塊をズボッという噴射音を発して不浄箱の底に叩き付けるように放出した。

最初の激しい噴出に続いて堰を切ったようにブリッブリッと大きな音を立てながら排泄を始めた志乃に男達が歓声を上げた。

男達の笑い声に包まれて、我に返った志乃が、イヤァッ！見ないで！と、悲痛な声を上げた。男達は顔を寄せ合い我慢の限界を超えて次々と便塊を放出する美女の凄まじい姿を下からのぞき見るように見上げた。

時折腸内で大きく膨らんだ奉書紙の塊が出口を扼し、排便が中断する事が在ったが、腸内で荒れ狂う圧力に悲鳴を上げながら汗に塗れた顔を狂った様に振りたて尻をブルブルと痙攣させて呻吟する志乃の姿があった。

尻を悶え震わせる度に汚物に濁された菊花が、ある時は大きく開孔しある時は収縮し、体内の塊を放出しようと蠢いていた。

男達は床に寝そべり自らのモノを握り締めて慰めながら、目を爛々と輝かせて陰惨な風景を眺め続けた。

やがて志乃の努力が報われ、肛口を閉塞していた大きな紙の塊は鋭い発射音を残して不浄箱の中に叩き付けられ、それに続いて液状化した便が降り注いだ。

一旦始まった排泄は最早志乃の意志では止める事が出来ず、ドロドロとした軟便と共に押し込められた和紙が不浄箱の中に山を築いて行った。

「これは凄い！とても花も恥じらう武家の姫とは思えぬわ！」

「それにしても何ちゅー臭いですやろ！、とてもお淑やかな志乃様のお身体から出た物とは思えませんわ！」

「いやいや・・若いだけあってとても健康そうな色をしておるぞ！どうじゃこの見事な色艶は！」

不浄箱を跨ぐ志乃を取り囲んで床に顔を押し付ける様にして、真下から美女の脱糞姿を眺めながら男達は口々に好きな事を叫<sup>わめ</sup>き合い笑い合った。

その後も、切り裂いた紙が内側から肛口を扼し排便が停止する事があったが、高まる内部からの圧力に、ウンウンと苦しげに腰を振った後、ズボッ！と大きな音を立てて奉書の塊を吹き飛ばす様に放出した。

発射の圧力で飛沫が撒き散らされたのも気にせず、男達はその大きな放射音に笑い合った。

「ご覧下され！父上！父上と拙者の放出した白い物も混じって御座るぞ！」

腸内に詰め込まれた全ての奉書紙を排出し終わり、その築き上げた山の上に白い液体が乗っ

ているのに気付いて指差して笑い上げた。

その後大量の軟便がドドドと降り注ぎ、その狼藉の痕跡を覆い隠した。

「どうした？志乃殿、これで全て腹の中の物を出し切られたか？」

不浄箱の中に大量の便の山を築き上げ、一旦排便が停止した志乃に問い掛けた。

志乃は羞恥に赤く染まった顔を激しく振りたてウンウンと呻き声を上げると、次の瞬間一

「おお！この娘は小便まで始めたぞ！」と、玄齋が驚いて大声を上げた。

不浄箱を跨いで大きく開いた股間の奥から一条の水流が流れ出し、箱の底を激しく叩いた。

志乃は、突然の下腹の反応に自分自身でも恐怖を感じた様に悲鳴の様な泣き声を上げた。

しかし、最早自分の力では制することが出来なくなった放出は、志乃の意志を裏切り奔流と  
なって流れ続けた。

自分の身体が自分の心を裏切って次々と醜態を男達の目に晒す現実恐怖した様な声を発し  
た。

「志乃殿も昨晚床に就く前に、手水を使った後は、ずっとしておりませぬ故沢山溜まってい  
たことでしょう・・・」

男達の目の前で泣きじゃくりながら放尿姿を晒す志乃を笑い上げた。

篤馬の言う通り、痛い程膀胱内に溜まっていた小水は、何時果てることも無く流れ続けるか  
の様で在った。

「おうおう、前と後ろから同時に放り出し続けるとは器用なもんじゃ！」

激しく泣き叫びながら、後口と尿道から絶えることなく汚物を落下し続ける女を男達は高ら  
かに笑いながら見続けた。

しかし、激しかった水流も何時しか勢いを失い、ポタポタと滴が垂れる様になっていた。

「もう終わりで御座るか？志乃殿？」

篤馬の問い掛けに顔を赤く染めて、小さく肯いた。

その時、名残を惜しむ様に、開いたままの肛口からポタリと小さな便塊が落下して、残忍な  
男達の笑いを誘った。

強制された事とは云え、憎むべき男達の眼前に数々の羞恥図を晒してしまった事に、志乃は  
不浄箱を跨いだまま首を項垂れ身体をブルブルと震わせていた。

「さあさあ！これだけ大便も小水も好きなだけ垂れ流せば、大満足された事であろうよ！そ  
れでは拙者が股の間を拭いて進ぜるよ・・・」

篤馬が懐紙を手をニヤニヤ笑いながら近づいた。

「おやおや！志乃殿のケツメドから何やら垂れて御座るよ！」

いまだにピクピクと痙攣を続ける弛緩した志乃の肛口から、茶色く変色した引き裂かれた仇討ち免状の紙片が垂れ下がっていた。

その滑稽な姿に大笑した篤馬は、懐紙で紙片を掴み、腸内からズルズルと引き出した。

しゃくり泣きを続ける志乃の股間を懐紙を手にした篤馬が妙に優しい手付きで拭き清めっていった。

自分の使用した不浄箱を前にして志乃が正座させられていた。

其処には自分の体内から排泄された汚物が山を築き、汚水が底に溜まっていた。

残酷な男達は志乃に自分の身体から流れ出た物を見せ付けることにより、更に羞恥心を煽ろうと考えたのであった。

男達は志乃と汚物を交互に見比べながら、やれ色はどうだとか、臭いがどうだとか、随分腹の中に溜め込んでいたものだとか囁し立て、志乃の心を冷酷に掻き糞った。

「おやおや！これはどうしたことじゃ！」

篤馬が今更ながら驚いた様な声を上げた。

便の山の中に大量の変色した紙片が混じっているのを指差して、

「これは志乃殿が肌身離さず持つておられた大切な仇討ち免状ではないか！それがどうして志乃殿の糞の山の中に在るのじゃ？」

篤馬の芝居がかった驚き方に、玄齋と惣右衛門が笑い声を上げた。

何処までも自分をいたぶろうとする男達の陰湿さに志乃が憤怒の表情を浮かべた。

「どうなさる？志乃殿。この糞の山の中から掘り出して、この臭い物を肌身離さず持たれるか？」

ジッと汚染された紙片を怒りの表情を浮かべて見詰める志乃の方をチラッと見て、

「それよりは、このまま糞と一緒に肥溜めに捨ててしまった方が良からう・・・」

志乃が何時までも返事をしないので、恵比寿屋が不浄箱を手にするとイソイソと片付けてしまった。

これで仇討ちの正当性を証明する証拠が永遠に失われてしまった一と、思い知らされ絶望感に押し潰されそうになった。

「これで儂も仇持ちだなどと人から後ろ指を差される事も無く、今宵より気持ち良く眠れるわ！」

と、玄齋が嬉しそうに笑い声を上げた。

惣右衛門は士農工商の身分制度の中において最下層の商人の身でありながら最上位の武家の息女をかくまでいたぶり抜く事が出来た事に痺れる様な快美感に浸っていた。

「さあさあ！夜も更けて来ましたし、お二人もお疲れの事ですやろ！これから寝所にご案内しまひよ・・・」

惣右衛門は立ち上がると、手にした鉤状に折れ曲がった鉄棒を壁の穴に突き刺した。

そして、その曲がった鉄棒をグルグルと回すと、ガラガラと音を立てて天井から何か垂れ下がって来た。

それは、二階に繋がる階段であった。

惣右衛門が自慢する様にこの蔵には、外観からは想像出来ない程、随所に様々な仕掛けが用意されていた。

惣右衛門は二人の逃亡防止の為、特別のハンドルを回さねば降りてこない吊り階段を仕込んでおいたのだった。

階段が下まで降りて二階に繋がる通り道がポツカリと口を開けた。

「さあさあ、登っておくれやす・・・」

全裸の姉弟をながめ、文字通り恵比寿顔を浮かべる惣右衛門は、言葉は慰めであるが有無を言わさぬ態度で二人を立ち上がらせると階段に向かわせた。

「さあ！登るんだ！」

志乃の背後に立った篤馬が志乃に階段を登ることを促す様に尻をピシヤリと叩いた。

すっかり疲れ果て腰に力が入らずフラフラと全裸のまま階段を登る志乃を下から見上げた。

豊かに張った腰が扇情的な姿を見せ、覚束ない足取りで階段に足を進める度に開いた股間の奥には、まだ弛緩した二つの陰孔がチラチラと見えた。

男達は身体を低くして、階段を登る志乃の姿を淫靡な目で眺め続けた。

処女膜を引き裂かれたばかりの志乃の陰部からは血が滲み出て太股を伝い滴り流れていた。

「おお！志乃殿の股座から血が垂れておりますぞ！これこそ正真正銘志乃殿が処女であった証！」と、篤馬が階段を登られる志乃の肉付きの良い臀部を下から見上げて、感動した様な声を上げた。

「おやおや！こちらの若様も尻の穴から血を流しておいでですぞ！」

玄齋の巨根を無理矢理突き立てられ、裂けてしまった肛門から血が滴り落ちていた。

「まさしく若様の尻の穴も処女であった証！」

男達は股間から血を垂れさせながら階段を登る姉弟を大声でからかい笑い上げるのであった。

階段を登り切った二階には太い白木の角材を組み合わせた格子に囲われた牢が作られていた。惣右衛門は牢の扉を開けると、向かい合わせの牢に姉弟を押し込み、ガチャリと扉に鉤を架けた。

牢内には畳が引かれており、布団と枕も用意されていた。

志乃は牢内に畳まれていた掛け布団に手を伸ばして慌てて身に纏い、残酷な男達から裸身を隠した。

一日中男達の目の前に晒していた裸体を覆うことが出来、人間らしい姿を取り戻したことによりホッとした気持ちとなった。

そして、怯えた目で格子の向こうから中の様子を窺う三人の男を見詰めた。

「オシッコや又々糞がしたくなったら、ここにしなはれ」と、惣右衛門が先程志乃に使わせたと同じ不浄箱を手にする、檻の下に設けられた小物の出し入れの為の小さな扉を開けて牢内に差し入れた。

「朝から何も食べてへんで、お腹が空きましたやろ。今、食べ物を運ばせませすさかい、ちよっと待ってておくれやす。」

揉み手しながらニコニコと笑みを浮かべ惣右衛門が立ち去った。

玄齋と篤馬の父子も姿を消していた。

薄暗い牢内に残され、互に向かい合った檻の中で姉弟は涙に咽んでいた。

志乃は、余りにも激烈な運命の変転にこれは現実の事か？と、疑いたくなかったが、股間から突き上げる疼痛感はそれが現実のものである事を受け入れるしか無かった。

向かいの牢に閉じ込められた真之介も姉を守れなかった不甲斐なさと仇の父子により蹂躪された無念さに男泣きに泣いていた。

ふと人が階段を登って来る音が志乃の耳に入った。

「ほら！お二人の食事を持って来ましたで。」

と、惣右衛門の太い声が響いた。

二人を閉じ込めた牢の前に立った人の姿を見て志乃はハッと声を上げた。

其処には惣右衛門に混じって、恵比寿屋を最初に尋ねた時に志乃達にお茶出した若い女中

の千鶴の姿があった！

牢の中に裸の志乃と真之介の姿を発見して、千鶴は二人分の膳を抱えたまま凍り付いた様に直立し、目はカッと見開いていた。

「旦那様！これはどうした事ですか？笹川様は仇討ちの為早朝立ち去られたと聞いておりました。それが何故此所に居るのですか？」

千鶴が悲鳴の様な声を上げて惣右衛門を問い詰めた。

「お二人は赤坂様に仇討ちを挑んであっさりと返り打ちに合っしもうたんや・・・それで命だけは赦されて儂の所に下げ渡されたんや。自分の技倆も辨えんと赤坂様に挑み掛かったアホな侍の成れの果てや！千鶴、お前も威張りくさっていた侍がこんな惨めな姿にされたの見て楽しいやろ？」

驚きに目を血走らせて詰問する千鶴に惚けて答えた。

「それなら何故裸で牢の中に閉じ込められているのですか？」

なおも激しく詰め寄る千鶴に、

「五月蠅い奴っちゃんー！お二人は赤坂様からワテ所に払い下げられたんや。今では、お二人はこの家に貰われて来た犬や猫みたいなもんや！犬猫が裸で檻の中に居ても何の不思議も無いやろ！」

「これが、人のする事ですか！酷すぎます！」

目に怒りを込めて惣右衛門を睨み付けた。

「お前は、黙っとれ！ワテが貰うたモンをどうしようとワテの勝手や！千鶴、お前も驚いたやろけど、こんなモン直ぐ慣れる！」

千鶴の激しい詰問にウンザリした様に応えた。

「お前は、そんな事一々気にせずに、飼い犬に餌を上げる様に、二人の食べもん運んだり、下の世話をすれば良いんや！」

と、志乃の抱えた膳をヒョイツと取り上げて檻の中に差し入れた。

「おやおや、若様はまだ不浄箱を使ってないようすな。志乃様は先程大グソと小便を済ませたから良えと思いますが、若様はまだやからあんまり我慢しすぎると身体に毒だっせ・・・」と牢内に差し入れられた不浄箱を覗き込みながら笑った。

そんな二人を犬猫の様に扱う惣右衛門に怒りを感じたのか、千鶴はブルブルと身体を震わせていた。

そんな千鶴の様子を無言のままニヤニヤと笑みを浮かべて見ていた。

「千鶴にはちょっと衝撃が強かったかも知れんが、そんなもん直ぐ慣れるやろ。明日からお前がお二人の餌の世話や下の世話をするんや！」

惣右衛門は突然に事態に対する驚愕と怒りの感情で目を剥き睨み付ける千鶴に笑いながら声を掛けた。

蔵の二階を薄暗く照らしていた蝋燭も燃え尽き、今は僅かに開いた窓から差し込む月明かりだけが、仄かに辺りを照らしていた。

二人は差し入れられた膳に手を付ける気持ちにもなれないまま、余りに過酷な運命の変転に、漆黒の闇の中で悄然とした姿で布団の上に座っていた。

一時と云え淡い恋心を抱いた男に手厳しく裏切られ、全ての希望を失った志乃は、布団に横になる気力も湧か無いまま、打ち拉がれて布団の上に腰を降ろしていた。

いっそ、このまま死んでしまいたい・・・しかし、自分が命を絶てば男達は真之介を生かしてはおかず、笹川家は断絶してしまうだろう・・・勝ち誇った男達にも油断をすることが在るだろう・・・その油断を見逃さず男達を倒すことが出来れば、この地獄から抜け出て晴れて故郷に帰ることが出来るだろう・・・今は死を選ぶのでは無く、この穢されてしまった身体を使って男達の油断を誘うしか無い・・・と、心の中で呟くのであった。

その時、蔵の一階と連絡する吊り階段がガラガラと降ろされて行く音を聞いた。

又あの冷酷な男達が此所に登って来るのかと怯えた志乃は裸体を覆っていた布団を固く握りしめた。

小さな足音が聞こえ、燭台の火がユラユラとこちらに近づいて来るのが分かった。

ふと燭台の灯りの方に目を向けた時、志乃が驚いた声を上げた。

「あなたは、千鶴！」

千鶴はシッと云う様に唇に指を当てた。

「志乃様と真之介様の着物をお持ちしました。」と、言うとき格子の間から二人が着ていた着物を差し入れた。

二人が身繕いしている間に千鶴は手にした鍵の束から、檻の入り口を閉じていた南京錠の鍵を見つけ出し、南京錠を外して扉を開けた。

狭い檻の入り口から身を折って表に出て来ながら、「有り難う！千鶴さん！」と志乃が言った。

「いいえ！お礼を言うのはこちらなのです。」と、潤んだ目で志乃の目を見詰めながら千鶴が

言った。

「実は、笹川様は私の恩人なのです。私の両親は昔、行商の旅で全国を回っておりました。ある時、川田の地で私の母が病を得て、丁度笹川様のお屋敷の前で行き倒れてしまったのです。途方に暮れているところを心優しい笹川様に見つけて頂き、下女に命じてお屋敷の中で病が癒えるまで看病して頂きました。笹川様は私の母の命の恩人。そしてその後生まれた私にとっても命の恩人なのです。」

「ああ・・・その話は聞いたことがあります・・・」

志乃は幼い頃の記憶をたどる様に呟いた。

地獄に仏という言葉はあるが、まさかこの知るべ無き土地で昔両親が助けた夫婦の娘に会うとは！まさしく志乃にとって神のお導きの様に感じられた。

「両親は流行病で最近死んでしまいましたが、死ぬ寸前まで笹川様に感謝しておりました。」千鶴は急に涙を流し始めると、激しい言葉で「そんな大切な志乃様や真之介様にこんな酷い目に遭わせる彼奴らは鬼や悪魔だ！・・・もっと早く気付いていれば、お二人をこんな酷い目に遭わせる前にお助け出来ましたのに！申し訳御座いませんでした！」

無念な思いで感極まった千鶴が志乃の胸の顔を埋めて泣きじゃくった。

そんな千鶴をあやす様に優しく背を撫でた。

「良いんですよ、千鶴・・・今此所で助けて貰っただけで充分です。」

三人は一刻も早く、この地獄の様な蔵を出ようと歩みを速めた。

千鶴の手にする僅かな燭台の灯りを頼りに吊り階段を下りた三人は出口の扉に向かった。

後僅かでこの恐ろしい蔵の形をした地獄から抜け出し自由になれると、入り口の重い鉄扉に身体を預ける様にして押した。

鉄扉を押し開けて、表に向かって大きく開いた瞬間、三人は引き攀った悲鳴を上げ、見る見る血の気が引いて行った。

何と其処には恵比寿屋と玄齋と篤馬が立っていたのだ。

「千鶴！やっぱりお前は裏切りやがったな！」

三人の前に仁王立ちした惣右衛門が千鶴の事を睨み付けながら憎々しげに声を上げた。

「主人の飼い猫を逃がそうとは、とんだ使用人ですな・・・」

三人を逃がさない様に油断無く見張りながら篤馬が口にした。

玄齋達は三人に逃げる隙を与えず、ジリッと蔵の入り口の方に進んだ。

「おのれ！父母の仇！」

対峙する緊張を引き裂く様に真之介が上段に剣を振りかぶり、玄齋に斬り掛かった。

これに遅れず、志乃も短刀を手に篤馬に飛び掛かった。

ところが、玄齋は見事な手捌きで当に眉間を割ろうとする真之介の刃を寸での所で白刃取りに受け止め、そのまま身体を捻って真之介の腹に蹴りを入れた。

大男の強烈な足蹴りに、堪らず、真之介は玄齋の手に刀を奪われ、宙を飛んで元の蔵の中に蹴り込まれてしまった。

篤馬も突き掛かる志乃の手を掴むと、思い切り捻り上げ短刀を奪い取った。

「志乃殿は一日中男三人に撞かれに撞かれて、さぞやお疲れの様子。こんなふらつく腰では止まっている案山子も突かせぬぞ！」

と、笑い声を上げると、まるで荷物を投げ込むように志乃の身体を軽々と持ち上げて蔵の中に放り込んだ。

「アイタタタ！コイツ噛みよった！」

惣右衛門が千鶴に思い切り手を噛み付かれて悲鳴を上げていた。

篤馬が呆れた様に、惣右衛門に武者ぶり付く千鶴を引き離した。

「お前達は、鬼だ！悪魔だ！真之介様や志乃様を酷い目に遭わせて！世間の<sup>みんな</sup>皆に言ってやる！恵比寿屋は人さらいだと！」

千鶴が篤馬に羽交い締めになれながら叫び声を上げた。

「恵比寿屋、お主の所の下女は、元気は良いが、少し躰が足りぬ様じゃな？」

狂った様に叫び声を上げる千鶴をニヤニヤと見詰めながら惣右衛門に問い掛けた。

「左様で御座いますなあ・・ワテも今までほったらかしにしてたのが、悪御座いました。少し厳しく躰けんといといけませんな・・」

と、千鶴に噛み付かれて血の滲む腕をさすりながら呟く様に言った。

三人を再び蔵の中に押し込め、篤馬が内側から鍵を掛けた。

「ほな、夜も遅いし、取りあえず志乃様と真之介様には元通り檻に入って貰いまひよ。ほてから千鶴は二人を逃がそうとした罰を受けるんや！」

「お待ち下さい！千鶴さんは悪くありません！悪いのは、この志乃です！私が千鶴さんに逃がしてくれる様頼んだのです！」

志乃は自分達を逃がそうとしたため災難に遭遇した千鶴を自分の身体に代えても助けなけれ

ばならないーと、決意すると悲痛な声を上げた。

志乃様！と、懸命に惣右衛門に哀願する志乃に堪らず声を発した。

志乃が自分で全ての罪を被って助けようとしていることを理解した千鶴は、これ以上志乃に責め苦が襲い掛かることを避けようと、

「悪いのは私です！私が勝手に志乃様達を逃がそうとしたのです！どうか私を罰して下さい！」と、泣きながら訴えた。

「当たり前や！一番悪いのはお前や！」

惣右衛門が千鶴を睨み付けながら吐き捨てた。

「そやから、これから三人してお前の身体に嫌と言う程、躰というものを教え込ませよー思ってたけど・・・」

ふと肩頬を淫靡に膨らませると、

「志乃様が身代わりとなって、千鶴の罰を一手に引き受けるー言うんやったら、千鶴は助けてやっても宜しおます・・・」

と、ニヤニヤと志乃の方を向いて問い掛けた。

「分かりました・・・どの様な責め苦も喜んで私が受けますから、どうか千鶴を許して上げて下さい。」

自分達が惣右衛門達から受けた責めから、この残忍な男達が狙っているのは千鶴の純潔であることが理解出来た。そしてそれは恐ろしい責め苦を伴ったものである事を身を以て思い知らされた志乃は、何としてもこの残忍な男達から幼気ない少女の純潔を護らなければならない！自分は既に穢された女なのだから、この身を犠牲にしてもこの悪魔の様な男達の手から少女を護りたい！ーと心に念じるのであった。

「いけません！志乃様！千鶴はどんな責めでも受けます！どうか千鶴の事は気にしないで下さい！」

志乃の己を犠牲とする決心に、千鶴が泣きながら叫び声を上げた。

「さいでっか？まあ、こちらとしても未熟な千鶴を抱くより、成熟した志乃様を抱いた方が楽しおますしな・・・」

惣右衛門が好色そうな笑みを浮かべた。

男達が志乃を責める事に決めたことに気付いた千鶴は青ざめた顔で、自分を責めろ！とか志乃様には罪は無い！とか大声で叫び続けた。

「五月蠅いやっちな・・・」と、金切り声を上げて泣き叫ぶ千鶴に閉口した様に、篤馬に抱

きすくめられて動きを封じられている千鶴の口に帯び紐で猿轡をした。

続けて篤馬が千鶴の身体にクルクルと縄掛けしていった。

口を塞がれ身動きを封じられた千鶴が床に転がされた。

玄齋に取り押さえられていた真之介も、既に抵抗の気力を失っており玄齋に易々と縛り上げられてしまった。

篤馬が蔵の中の方々を回って、壁に設けられた燭台の蠟燭に火を点けて回った。

部屋の中の各所の燭台の灯りに照らされて、男達を取り囲む輪の中に一人志乃が立っていた。

蠟燭の赤い灯りに照らされて、雪の様に白い顔の志乃が決心した様に目を閉じて立っていた。

「お願いで御座います。志乃はこれから皆様の責めを喜んでお受けします。ですから真之介と千鶴にはこの場を去らせて下さい。」

弟と幼い少女の目の前で男と女の情事を見せる事に堪えかねて、頬に熱い涙を滴らせながら哀願した。

「だめで御座るよ！ここから逃げだそうとした者がどうなるか、良く教えておかないといけなくて御座る！・・・それに、志乃殿が我々に抱かれて先程の様に甘い声を上げて、歡喜の表情を浮かべるところ良く見せてやれば、千鶴にとっても男女のまぐ合いが如何に楽しいモノか、今後の参考になるで御座るよ！」

床にしゃがみ込んだ篤馬が面白そうに声を上げた。

玄齋達三人の責めを受けて何時の間にか身体の奥底に秘められていた自分でも知らなかった感情を引きずり出され、燃え上がってしまった事が思い出され、千鶴の眼前で再びその様な醜態を晒してしまうのではないかと恐怖感が込み上げ激しく首を振った。

千鶴と真之介をここから立ち去らせて欲しいと泣いて哀願するのを無視して、

「全く！何時の間にかこんな物を着込みおって！お前達は何時も犬猫みたいに素っ裸でいれば良いんだ！」と、身に付けている物を脱いで再び全裸を晒す様に玄齋が命じた。

猿轡をされて声の出せない千鶴が顔を赤くして必死に首を振った。

惣右衛門が自慢した通り、この蔵の中には随所に色々な仕掛けがされており、今は千鶴と真之介は縄掛けされたまま、壁に立位で固定されており、二人から良く見える先には志乃が男達と対峙していた。

決意を固めた様に小さく息を吸うと、志乃は帯び締めを解き、袋帯びに手を掛けた。

千鶴がいけませんと言う様に激しく首を振り呻き声を上げた。

大丈夫、お前の身は必ず守ります・・・と、言うように愛しみを込めた目でチラッと千鶴の方

に目配せすると、心を決めて帯を解き始めた。

シュッシュッと衣擦れの音をさせて、袋帯が解かれて行き、足下に落下した。

帯を失って、少しはだけた着物の襟を恥ずかしそうに握り締めた。

早く脱げと言う様な男達の視線に急き立てられ、着物の襟に手を掛けたまま、大きく左右に開くとそのまま着物を脱ぎ落とした。

白い長襦袢姿で立ち尽くす志乃の身体に男達の視線が降り注いだ。

男達の冷たい視線に煽られて、志乃は長襦袢を身体に留めていた何本かの紐を解き始めた。

キュッキュッと紐が解ける音がシンと静まりかえった部屋の中に響いた。

白い長襦袢も脱ぎ捨てると、薄い肌襦袢と赤い裾よけだけを身に付けただけの志乃の立ち姿があった。

薄い下着越しに志乃の身体の線がクッキリと覗えた。

昨日から何度も目に焼き付けた志乃の身体ではあったが、改めて見ても美しいと男達が思った。

「さあ、肌襦袢も脱ぐのじゃ！」

篤馬が生唾を飲み込みながら命じた。

男達の射る様な視線を感じて固く目を閉ざした志乃は、意を決して肌襦袢を脱ぎ捨てた。

志乃の周りに蝮局を巻いた帯や着物の上にファサッと薄い下着が落下した。

志乃の成熟した形の良い乳房が露出した瞬間、男達の目の前に裸身を晒す羞恥に堪えかねて両手で乳房を隠すと、へたり込む様に片膝立てて座り込んでしまった。

「さあ、どうしたで御座る？我々の目に裸を晒すのは初めてでは、無かろう・・・」

羞恥に男達に向けて背を丸め床にしゃがみ込む志乃の姿に篤馬が声を掛けた。

篤馬に言われて、ああ・・・そうであった。今更恥ずかしがっても仕方無い・・・今はこの穢れた身体を使って千鶴の貞操を護らなければならない！と、哀しい諦めをした志乃は立ち上がると乳房を覆っていた手を除けて裾よけを解き始めた。

男達の視線が剥き出しになった形の良い乳房に釘付けになった。

そして、千鶴もまた何時の間にか憑かれた様に志乃の成熟した美しい裸身を見続けていた。

志乃の身体を覆っていた最後の布が解かれ、フワッと足下に落下した。

羞恥に堪えかねて、志乃は小さく身体を縮め、右手で股間を覆い、左手で乳房を隠して男達の視線から隠したが、男達は志乃の股間を覆う繁茂が露出した瞬間をクッキリと目に留めていた。

両手で恥ずかしい部分を覆い隠し、羞恥に身体を前屈みに縮めて、元通りの裸姿を晒している志乃に冷たい視線で見詰める男達から下卑た笑いが上がった。

千鶴は、男達の乾いた笑い声に惚けた様に雪の様に白く成熟した女の優美な曲面を描く美しい志乃の裸身を見詰め続けていた自分に気付き、固く目を閉じて顔を伏せた。

「全く千鶴も無駄な事をしたものよ・・・この志乃殿はな、男とまぐわい何時も股の間に物を入れておくのが大好きな淫婦なのじゃ！此所に居て我らに抱かれるのが幸せで仕方無いのじゃ！ここから連れ出されても志乃殿にとっては有り難迷惑というもの・・・」

篤馬が千鶴の方を振り返って笑いながら声を掛けた。

そんな篤馬の言葉に志乃が怒りを込めて睨み付けた。

志乃の非難を含んだ視線を受け、

「違ふと申すか？それなら千鶴の目の前で如何に自分が淫婦であるか証明するが良い・・・」と、ニヤケた笑みを浮かべて篤馬が応えた。

「ほら！何を恥ずかしそうに手で隠しているんだ？その美しいお姿をもっと良く見せれば良からう・・・」

再び卑劣な男達の目に裸身を晒す羞恥に打ち震え、腰を落として立て膝で床にしゃがみ込んでしまった志乃の背後に回った篤馬が、羞恥に顔を染め、少しでも男達の淫靡な視線から身を守る様に身体を丸くする志乃の両手を邪険に握り、乳房と秘部を隠そうと抵抗するのを無視して力尽くで背中にねじ上げた。

男の力の前に抗えず、小さく切れ切れの悲鳴を上げる志乃の両手を背中で交差させた篤馬は、手にした麻縄を使って手早く縛り始めた。

両手を背中で高手小手に縛り上げ、余った縄を前に回して、豊かに実った乳房の上下に縄掛けしていった。

まるでみずみずしい果実の様なプリプリとした志乃の乳房を搾り上げる様に幾重にも荒くれた麻縄が掛けられていった。

乱れた島田に結った髪が白いうなじに掛かり悔しげにフルフルと震えていた。

上半身を厳しく縛り上げ身動き出来ぬ事を確認した篤馬は、これで良からうと、乳房を搾り上げた縄尻を握り締めたまま志乃の背を蹴り上げた。

アッと悲鳴を上げた志乃の上体が前に倒れ込み、豊かな尻を上に向ける無様な姿を晒した。

志乃の背後に立つ篤馬が、上を向く志乃の尻たぶに両手を掛けて左右に大きく押し開いた。

散々蹂躪されてまだ火照りを残す二つの秘奥に冷たい夜気が流れ込んで小さく悲鳴を上げた。

「千鶴も良く見てみよ！これが十分に熟した女の、いや淫婦の陰門じゃ！」

と、柱に立位で縛り付けられた千鶴にも未だ腫れの残る赤く充血した秘園が良く見えるように尻たぶを押し開いた。

悪鬼の様な男達ばかりか弟や千鶴にも開陳される羞恥に悲鳴を上げた。

「拙者たちから散々責められ、大活躍されて、お疲れのご様子であった姫御前も後ろの祠も暫し休まれて、すっかりお疲れを癒やされたご様子。昨日の朝の様に神々しい姿を晒しておりますぞ・・・」

パツクリと開いた股間の二つの羞恥の部分に顔を近付けてじっくりと検分する篤馬に、イヤイヤと顔を振った。

「若い娘らしく良い香りが立ち昇って参りますぞ・・・とてもついさっき臭い糞をその美しいお身体から放り出された志乃殿とは思われない・・・」

開け放たれた股間に鼻を押し付けるようにして、女体から発する甘い香りを鼻腔の奥に吸い込みながらウツトリとしたように呟いた。

下劣な男達の面前で晒してしまった落花無惨な排便の姿を再び思い起こさせようとする篤馬の陰険さに、志乃の心が締め付けられた。

「溜まりに溜まった大糞を放り出されて、スッキリされたろうが、空っぽになってしまわれて、この中も少し寂しい思いをされているのでは無いですか？」

傍らに置かれていた器の中から薄黄色くドロリとした粘帖な媚薬をタツプリと中指に掬い取った。

意地悪い言葉で責め立てながら、突然志乃の肛口にズブリと指を差し入れた。

太い男の指があっさりと志乃の肛孔内に沈み込むのを見て驚いて目を見開いた。

粘っこい油の様な媚薬に塗された指先は何の抵抗も受けず、志乃の腸内に吸い込まれ、指の根元まで埋め込まれた。

女体を興奮させる作用を持つ薬が志乃の直腸壁を浸透し、思わず下腹がカッと熱くなるのを感じた。

雪の様に白かった志乃の下腹が熱を持って赤く染まっていった。

薬の効果と相まって、指先で直腸の内部を撫で回される痛烈な感触に思わず悲鳴を上げて尻を振った。

まる一日玄齋父子の肛虐を受け続け、未通だった秘め処が柔らかく開き、男の節ばった太い

指を易々と受け入れていた。

その上、無理矢理突き立てられたとは謂え並の男以上の大きさと自負する自分や父のモノを引き裂けもせず柔らかく受け止める等、この女の後ろの部分は前の穴と同様に何百人何千人に一人の得難い持ち物を持っていると感じるのであった。

そして、催陰剤の効果も在るとは謂え、指先の動きに反応を示すまで開発されるとは、この女は父の言うように虐待されれば虐待される程悦楽に感じる種類の女では無いかと思うのであった。

志乃の悲鳴に攀られて、思わずこの様子を盗み見てしまった千鶴は、排泄の用しか使わないと思っていた不潔な所に太い男の指を易々と飲み込んで、篤馬の指先の動きに煽られるように婀娜っぽい豊かな双臀を舞わせる志乃を驚いて見詰めた。

そんな千鶴の驚いた様子に気を良くした様に、更に篤馬はもう一本の指を加え、二本の指先で内側から志乃を責め上げた。

歳は若いとはいえ、その様な性交を重ねて来て、熟達した手技を誇る篤馬の指先には何か悪魔めいた力が潜んでいるかの様に、苦痛を超越した快美感の様なものを後ろの肉穴に与えるのであった。

篤馬の淫靡な指使いの前に、ジンジンするような妖しげな感触を与えられ続ける志乃は、逆らう力も失った様に顔を床に擦りつけて、半開きになった口から切れ切れの呻き声を上げ、指先を咥え込む尻をピクピクと痙攣させるのであった。

幾人もの女（若い男も含め）と肛門性交の魅力を味わって来た篤馬であったが、これほど短時間に後ろの穴の性感を覚えた女に合った事は無く、志乃を責め立てながら目をパチパチさせるのであった。

「見てみよ！千鶴！志乃殿はケツメドに指を入れられて感じて御座るぞ！」

憑かれた様に二人の様子を見詰める千鶴に得意になって声を掛けた。

ああーっ！そんな事は御座いませぬ・・・と、志乃は顔を真っ赤にして否定した。

「嘘を吐かれるな！・・・これが何よりの証拠！」と、陰唇の奥から滲み出した粘っこい液を指先に掬い取ると、千鶴の方に見せ付けた。

清純な少女の前に女の淫らな姿をさらけ出してしまったという、込み上げる激しい羞恥に志乃は固く目を閉ざして嗚咽した。

玄齋もこれまでの経験で男から虐待される程、性感を感じる被虐願望の女が世の中には居る事を知っていたが、志乃にその様な素養がある事を確信して、ほくそ笑んだ。

先程から続けざまに塗り込められた媚薬の効果と巧みな篤馬の手技の為であったが、下腹から込み上げる名状出来ない妖しげな感覚に煽り立てられ、男達の前で思わず腰を振りたて啜り泣きを始めた。

不浄な箇所を弟や千鶴の目の前で責められるという激烈な羞恥が込み上げて来たが、それを打ち消すように目眩く淫靡な刺激が志乃を包んで行くのであった。

目の前に赤い靄の様なものがかすみ正常な意識を保てなくなっていた。

「まったく千鶴も無駄な事をしたもの・・・これこの通り、この志乃殿はな、こんな淫らな事が大好きな淫乱な女なのじゃ・・・ここから助け出されても志乃殿にとっては迷惑千万な事だったのじゃ！」

なおも激しく志乃を責め立てながら、驚きの目で見詰める千鶴の方を向きながら笑って言った。

「ああっ・・・その様な事は御座いません・・・」

篤馬から淫婦呼ばわりされて、組み敷かれ苦しい息を吐きながら志乃が呻く様に言った。

「何？違うと申すのか？」

志乃の肛門を指で責め立てながら篤馬が意地悪く笑った。

そして、惣右衛門の方を向くと目で何かを合図した。

篤馬の意図を察した惣右衛門はその場を立ち去り蔵の奥の方へ向かった。

暫くして盆の上に何かを載せてイソイソと舞い戻って来た。

惣右衛門が抱えて来た盆の上には男性器を模した大小の張り形が置かれていた。

薄い鼈甲で加工した褐色の張り形の中には熱い湯を浸ませた真綿が詰め込まれていた。

内部に水回りや竈まで装備したこの特殊な蔵の中ではその様な物まで用意出来るのであった。

志乃の臀の傍に陣取った篤馬がその内の太い一本を手を取った。

「恵比寿屋！これは少し熱くは無いか？」

お湯を染み込ませた綿を詰められた鼈甲細工の大ぶりの張り形を手にして篤馬が惣右衛門の方を振り向いて尋ねた。

「いえいえ・・・これ位熱くしておきませんと直ぐに冷めてしまいまっせ・・・」

篤馬の問いに惣右衛門がシレッとした顔で答えた。

二人のやりとりに後ろを振り向いた志乃の目に篤馬の握る太い張り形が目映った。

その不気味な形状をした陰具のあまりの太さと長さに目を瞠った。

そして、何やら嬉しげに篤馬がその張り形にドロリとした油の様な物を塗り付けているのが判った。

男女の睦み事に無知であった志乃ではあったが、昨日からの激烈な経験から、その葉が体内に入ると、堪えようにも身体が熱くなり、その部分がむず痒くなって来るのが分かっていた。

「これだけ濡れていれば充分で御座ろう？」

篤馬が秘裂の奥の女の花芯に、握り締めた筒具を突き立てた。

その瞬間、アアッ・・・と悲鳴を上げ、眉根を蹙め、擡げた尻をビクッと痙攣させた。

腰をブルブルと震わせ身悶える志乃を嘲笑う様に柔肉を押し分け、その太い張り形が陰肉の奥に押し進められてきた。

「ああ・・・熱いわ・・・」

股間から込み上げる灼熱感に志乃の意識は白くなった。

「見よ！千鶴！志乃殿はこんな太いゲテモノをいとも簡単に呑み込んでしまわれたではないか？」

太くて長い鼈甲の筒具を奥へ奥へと注送しながら篤馬が笑い声を上げた。

これまで志乃を畏敬の目で見て来た千鶴にとって、不気味な形状をした太い筒具を体内に収めて身悶える志乃の姿に言い様の無い驚きを覚えた。

志乃の深奥まで達した陰具は志乃の秘裂から大きく表に飛び出し、股間に突き立てられた杭の様に見えた。

これ以上奥に入らない事を確認した篤馬はもう一本の小振りの鼈甲製の張り形に手を伸ばした。

そして、それを先程まで指先で責め立てていた後ろの門に押し当てた。

「アアーッ！もうお許し下さい！」

篤馬の意図を察した志乃が悲鳴の様な声を上げた。

そんな志乃の狼狽にも関わらず、篤馬は手に力を込めるとズブズブと突き立てて行くのであった。

ドロリとした油状の催陰剤と巧妙な手技により柔らかく蕾を開いた菊花は、何の抵抗も出来ず、淫靡な形状の筒具が腸内に埋め込まれて行った。

アアッ！アアッ！と篤馬に突き刺されながら志乃が下腹を震わせ泣き叫んだ。

「如何で御座るか、志乃殿？拙者実はこちらの二刀流も得意技であってな・・・我が二刀流の

「極意しかとそのお体で受け止められよ！」

と、ほざきながら志乃の股間から杭の様に突き出した二本の張り形を握り締め、緩やかに操作し始めた。

「見るのじゃ！千鶴・・菊の花と赤貝をいっぱい押し開き、ほれあのように太い張り形を呑み込んでいるのが判るじゃろう・・」

玄齋が固く目を閉ざし顔を逸らす千鶴の顎に手を掛けて正面を向かせながら言った。

弟と千鶴の目の前で醜態を晒す事に恐怖して身体を固くして守ろうと心に決めた志乃であったが、自分から豪語するように柏木の術は巧妙を極めた。

前後の穴に突き立てた二本の鼈甲の張り形を一方を引くと他方を押し込め、あるいは同時に深く突き入れ、女体の感じ処を熟知している様に突き立てながらも微妙に左右に操作し、志乃の決意を打ち破ろうとするのであった。

二本の張り形に塗り込められた媚薬の効果と熱く暖められた張り形の発する灼熱感は、体内に埋め込まれた直後の身を切り裂かれる様な激痛を今は押し流し、身体は熱く火照り、心臓は強く速く鼓動し、制御不能の興奮状態に導いていくのであった。

「どうじゃ？志乃殿、良いご気分御座ろう？」

額に汗を浮かべて二本の筒具を操作しながら篤馬が問い掛けた。

「ああっ・・切のう御座います！どうかお許し下さい・・」

息継ぎを速め、眉間に皺を寄せて辛そうに哀願した。

「何の、何の・・これまでは小手調べに御座る。もっともっと良い気分浸られれば、宜しかろう・・」

志乃の女体を感じ始めている事を認識した篤馬が嵩に掛かった様に攻め手を強くした。

前後の秘め処を責める篤馬の巧妙な手技に何時しか煽り立てられ荒い息を吐くようになっていた。

篤馬の技巧の前で懊悩する志乃の様子を確認した玄齋が床に倒れ伏す志乃の顔の前に進んだ。そして股間を開くとクルクルと下穿きを外した。

そこにはムクムクと起立する醜い男のモノがあった。

志乃の島田に結った髻を驚掴みにして自分の方を向かせると、「ほれ、これを啜えるのじゃ！」

と、口の端に卑猥な笑みを浮かべて命じた。

自分の前と後ろの純潔を蹂躪した醜怪で巨大なモノを目の前に見せ付けられ、「ああっ！嫌

で御座います・・・お許し下さい・・・」と、哀願するのであった。

「嫌と申すか？お主、千鶴を助けたいのであろう？今までの努力を無にしても良いのか？」

「ああー！どうか千鶴だけはお助け下さい！」

懊悩する意識の中で千鶴の操だけは守らなければならないと哀しく心に決めるのであった。

不自由な身体で唇を固く隆起したモノに寄せて行った。

その様子に、「アアーッ！志乃様！どうかお止め下さい！」と、固く縛られた猿轡の下で悲鳴の様な呻き声を上げた。

自分の乙女を散らした憎い肉棒であったが、それをこんなに間近で見るのは初めてであった。

間近に迫る男の肉塊は信じられない程大きく志乃の目に映った。

そして男の熱気と獣じみた臭いが亀頭の先端からジワジワ伝わって来た。

玄齋の視線を受け、意を決したように、赤く炙った灼熱の鉄棒の様な熱く固い肉棒にそっと唇を押し当てた。

千鶴が悲鳴の様な声を上げて立位に縛られた身体を震わせた。

猛り狂った怒張に柔らかな乙女の唇が触れるのを感じて玄齋が快感に震えた。

「そうじゃ！そのまま唇を亀頭の周りに匍わすのじゃ！」

快感と勝利感に浸って乾いた声を出した。

いまや篤馬の張り形の攻めの前に正常な精神は喪失した志乃が命じられるままに唇を熱い男根の周りに匍わせた。

自分の両親の仇の男根に触れる唇の感触と下腹から込み上げる刺激が脳髄の中で呼応し合い頭は靄が掛かった様に正常な状態を維持出来なくなっていた。

「舌を出して周りを良く嘗めるのじゃ！」

下腹を突き上げる激しい快美感に懊悩し、何も訳が分からないまま命じられるままに舌先を伸ばして、むくつけき仇の男根を丹念に嘗めまわすのであった。

獣じみた腐臭と生臭い味が舌先を刺激した。

丹念に何度も口唇での奉仕を要求した後、「さあ、これを啜えるのじゃ・・・」と、命じた。

ズキズキとする下半身からの刺激に放心状態となっている志乃は何も判らないように口を開けた。

薄く開いた唇を押し分ける様に玄齋が猛々しく狂った怒張を口内に押し入れた。

一機に根元まで口内に埋没させ、気道を閉塞させ、志乃が咽んだ。

柱に繋がれた千鶴が目を見開いて見詰めた。

「さあ！舌を使ってしゃぶり上げるのじゃ！」

肉茎を口内にねじ込んだまま勝ち誇った様に命じた。

口中に玄齋の野獣の様な臭いと強烈な味が拡がった。

まともな意識も喪失して仕舞った志乃は命じられるままに舌を駆使して憎い仇のモノに奉仕を始めた。

陰惨な性の責め苦の前に、弟や千鶴の存在も、現実の何もかも忘失してしまい、まるで頭の中が濃密な靄で覆われてしまった様な状態の志乃にとって差し出された一本の肉棒に縋る様に顎を動かし頬を膨らませていた。

二つの責め棒で同時に女の急所を突かれ、ただ受動的に責め苦を味合わされるだけの志乃にとって唯一能動的に動かすことの出来るのは、玄齋のモノを咥え込んだ口腔しか無かった。

まるで、志乃は篤馬から与えられる股間からズキズキと這い上がってくる責め苦から逃れる様に、必死になって口中のモノを激しく舌先で扱き、頬を窄ませて強く吸い上げた。

玄齋も志乃の口腔内を掻き回す様に腰を振りたて、柔らかな頬肉に触れ、滑らかな舌先の感触を楽しみ、窄まった唇が肉茎を絞める心地良い感触に背中にムズムズするモノを感じ始め、気もそぞろになり始めていた。

全身汗塗れになって狂った様に憎い仇の男根を口内で愛撫する志乃の姿に気を良くした篤馬は益々激しく責めの手を加えた。

「そうじゃ！そうじゃ！良い気持ちじゃ！」

志乃にしゃぶり上げられながら玄齋が気持ち良さそうに喚声を上げた。

口を塞がれてまともに息の出来ない志乃は顔を真っ赤に染めて荒い鼻息を立てながら一心不乱に口腔を駆使して奉仕を続けた。

「志乃殿ももう直ぐイキそうなお様子・・・どうじゃ、どうじゃ！」

と、額に汗を浮かべて張り形の動きを速めた。

玄齋のモノを咥えたまま、突然志乃がウッと呻き声を発して身体を硬直させた。

その瞬間を逃さぬように玄齋も腰を痙攣させた。志乃の口内に夥しい精液を放出させたのであった。

「折角父上が下された精で御座る。残さず飲み干すのじゃ！」

篤馬の言葉にまるで催眠術に掛けられた者が術者の命令に応じる様に喉を上下させて、口内

に残された粘っこい液を嚙下した。

その直後、紅潮していた志乃の顔面からすうっと血の気が引いて、意識を完全に喪失し、崩れ落ちる様に床の上に倒れ伏した。

股間には二本の張り形が残されたままで、野太い筒具が凄まじかった崩壊の名残を留めるようにピクピクと震えていた。

「どうじゃ？千鶴、これで志乃殿が大家の武家の姫で在りながら、その形作った貞淑そうな顔の下に淫乱な素顔を隠す、どうしようも無い淫婦と云う事が判ったじゃろう？」

完全に意識を喪失し、薄く開いた口の端から白い粘液を滴らせ、愛おしげに二本の張り形を啜え込んだまま横たわる志乃を取り囲んで嗜虐者達が快哉の笑い声を上げた。

「まったく、檻を余分に作って置いて良う御座いました・・・」

志乃と真之介を元の様に檻の中に閉じ込めて惣右衛門が呟いた。

「ほれ！千鶴！お前も入るんや！」

真之介と隣会った牢の前に千鶴を引き立てて声を出した。

「アアーッ！イヤ！」

千鶴が悲鳴を上げた。

男達が千鶴の着ていた服に手を掛けて無理矢理剥がそうとしたのだった。

「ああ・・・お約束で御座います。どうか千鶴をお許し下さい・・・」

着ている物を奪われまいと手脚をバタつかせ必死に抵抗する千鶴であったが、男三人の力の前では抗せず、次々と衣類を剥ぎ取られて行くのであった。

この様子を為す術も無く見続けるしかない志乃は檻の格子を握り締め、「お約束で御座います！」と悲鳴を上げて抵抗する千鶴の衣類を奪い取る事に必死の男達に向かって、牢の中から悲鳴の様な声を発して哀願した。

「心配せんでも千鶴には指一本触れません！そやけどこの檻の中では犬猫みたいに素っ裸で暮らすと言うのが定法でおます！」

不安そうに見詰める志乃の方を振り返って笑って言った。

男達は必死に抵抗する千鶴からとうとう一切の着物を奪い取った。

最後の一枚を剥ぎ取られる時、志乃の目に股間に漸く生え出した、か細い黒い春草が目映った。

「そら！入るんや！」一切の衣類を奪われた千鶴の尻を蹴倒す様に檻の中に閉じ込めるとバ

タンと扉を閉めて鍵を掛けた。

幼さの残る裸身に牢内の薄い布団を纏い、啜り上げる千鶴の姿が在った。

志乃も真之介も掛ける言葉もなくただ泣き声を上げる千鶴を見詰め続けるしか無かった。

三人を蔵の中に残し、母屋に向かいながら惣右衛門が、「それにしても困りましたな・・・」と、  
呟いた。

「どうしたと言うのじゃ？」惣右衛門の困った顔に玄齋が問い掛けた。

「いえね、お二人の身の回りの世話をさせよ思て千鶴を雇たのに、肝心の千鶴も檻の中に入  
ってしても世話をする人間が居りません。店の者に世話させるちゅうのはばかりが在りま  
すよって・・・」

惣右衛門の言葉に、

「それなら儂は町外れに妾を養っておる。そいつに彼奴らの世話をさせよう・・・」

「それは、良い考えで御座いますな。」

惣右衛門が安心したように声を上げた。

第一部了